

「進学校」における人間性涵養とリーダーシップ
ー日本と欧州3ヶ国から学ぶー

高等教育研究叢書

131 2016年3月

秦 由美子 編



広島大学

高等教育研究開発センター

「進学校」における人間性涵養とリーダーシップ
ー日本と欧州3ヶ国から学ぶー

秦 由美子 編

広島大学高等教育研究開発センター

目 次

1. はじめに	秦 由美子	1
2. 日本の学校		
2. 1 麻布中学校・麻布高等学校	秦 由美子	8
2. 2 鷗友学園女子中学高等学校	大佐古紀雄	13
2. 3 開成中学校・高等学校	大佐古紀雄	18
2. 4 慶應義塾高等学校	秦 由美子	23
2. 5 甲陽学院中学校・高等学校	秦 由美子	27
2. 6 東京都立戸山高等学校	佐々木 亮	33
2. 7 灘中学校・灘高等学校	秦 由美子	36
2. 8 東京都立日比谷高等学校	秦 由美子	43
2. 9 ラ・サール高等学校・中学校	秦 由美子	48
2. 10 早稲田中学校・高等学校	大佐古紀雄	54
3. イギリスの学校		
3. 1 ウィンチェスター校	古阪 肇	60
3. 2 イートン校	秦 由美子	64
3. 3 シュルーズベリー校	古阪 肇	69
3. 4 ウェストミンスター校	古阪 肇	73
3. 5 マーチャント・テイラーズ校	秦 由美子	78
3. 6 ラグビー校	秦 由美子	84
3. 7 生徒の実績を積極的に公開する英国パブリック・スクール —日英双方で学んだ日本人生徒たちによる英国式評価への反応—	松原 直美	89
3. 8 チャーターハウス校	秦 由美子	95
4. フランスの学校	佐々木 亮	103
5. スイスの学校	古阪 肇	109
6. Independent Grammar Schools in Northwest England in Historical Context	ロバート・アスピノール	114
7. おわりに	秦 由美子	120

1. はじめに

(1) 本叢書の目的と意義

平成 25 年度から 3 年間、独立行政法人日本学術振興会の補助金を得て挑戦的萌芽研究「「リーダーシップ教育」の日本モデルの研究」を実施した。本叢書はその調査結果を纏めた一部である。「一部」であるという理由は、海外約 20 校、日本国内 10 校の訪問調査には、各校およそ 1 時間半から最長で 3 時間半のインタビューを実施しており、更には、それぞれの学校で収集した資料やアンケートを書き加えると膨大な紙面となり、本叢書の制限枚数に収まらないためである。収まらなかった調査は、改めてその成果を発表する予定である。

本調査の対象校は、海外では、イギリスのパブリック・スクール(PS)の「ザ・ナインあるいはザ・グレート・ナイン」¹と呼ばれているウィンチェスター(1382年)、イートン(1440年)、セント・ポールズ(1509年)、シュルーズベリー(1552年)、ウェストミンスター(1179年に原型が出来、1560年に再建)、マーチャント・テイラーズ(1561年)、ラグビー(1567年)、ハロウ(1572年)、チャーターハウス(1611年)(設立年順)及び、グラマー・スクールの中で最も有名なマンチェスター・グラマー・スクールを含むグラマー・スクール(文法学校)、海外においては他に、フランスやスイスのエリート養成校も対象とした。上記「グレート・ナイン」は、数多くのグラマー・スクールの中から、1864年にクラレンドン委員会により公刊された『クラレンドン報告書』が対象にした 9 校である。

国内においては日本の名門中高一貫校 8 校(麻布、鷗友学園、開成、慶応義塾、甲陽学院、灘、ラ・サール、早稲田)、及び日比谷高校と戸山高校における調査を行った。これら日本の名門校においては、第二次世界大戦の結果、検証されることなく廃止されていった日本の旧制高等学校の教育をも念頭に置きながら、アンケート調査と訪問調査を行った。これら訪問校の調査結果をまとめた成果は、日本の教育に提言するのみならず、高大連携の具体策としても意義あるものと考えられる。

上記の学校の校長、副校長はじめ、関係者の皆様には、インタビュー訪問の際にも大変温かく迎え入れて下さったことに感謝するのみならず、今回の叢書の作成にあたり、大変お忙しい中、加筆修正にまで丁寧に対応していただき、深く感謝申し上げます。

(2) パブリック・スクールの定義

パブリック・スクールは法制上明文化された学校ではないが、その語源は、中世ラテン語の *publicae scholae* (Board of Education. *The Public Schools and the General Education System*. London:HMSO, 1944:106-124) に由来し、その定義は、広義の意味では、1944 年の教育法で使用された公立学校とは別の学校制度にある「独立学校 (Independent School)」(Education Act, Part III 1944) を意味する。独立学校とは、学校の財源を国や地方自治体に頼らず、授業料、寄付、寄付の投資の利子等で運営しており、

学校登録や学校査察等の事項以外には教育行政の範疇外である国や地方当局の管轄下にならない学校である (<https://www.gov.uk/types-of-school/overview>)。しかし、独立学校では定義としては広範過ぎるため、次に狭義の定義を挙げる。つまり PS は、寄付基金立グラマー・スクールの一種で (Lawton 1975、Green 1990、空本 1969)、1942 年のフレミング委員会 (Fleming Commission) が公刊した報告書の中で述べるところの、1869 年に設置された校長協議会 (Headmasters' Conference、現在は headmasters' and Headmistresses' Conference: HMC²である) または 1941 年に設置された理事会連盟 (Governing Bodies' Association) の加盟校である。基金立学校とは、国や私人の財産ではなく、慈善の為に拠出された宗教財産 (元々は修道院の財産であった土地) を転用し、信託形式で運用した基金を信託された理事会が、設立者の意思を尊重して運営する自治組織の学校のことである。

カルトンの定義である「ハウス (寮) 制度を基本とした寄宿制学校」は減少しているが、「社会の特定階級と密着した学校を特徴とする学校群」という定義も含まれているといえる (Kalton 1966)。尤も狭義の意味では、1861 年に設置された王立委員会であるクラレンンドン委員会の調査対象校であった今回の訪問校である 9 校といえるが、一般には、基本財産を有する独立学校委員会 (Independent School Council、2015 年現在 1257 校) の中で、校長協議会 (243 校) 及び理事会連盟に所属する学校といえよう。

グラマー・スクールはあらゆる学問の基礎とされた、ギリシャ語及びラテン語の教科としての文法を教える学校であったことからその名称がつけられたが、中世教育史家石山 (1950) によれば、紀元前 2 世紀頃からグラマー・スクールは存在しており、イギリスの学校の起源は中世初期の教会の制の進展と共に司教座聖堂 (Cathedral) や修道院 (Monastery) に付設されたグラマー・スクールやソング・スクール (唱歌学校) にあるとする。文法の他に、音楽、幾何、算術、天文、修辞学、弁証法を含む七科が七自由科 (septem artes liberales) として、高等教育の予備課程たる中等教科がローマ時代に確立された。森川によれば、グラマー・スクールとは「公の便益のために信託された寄付基金によって設立・維持され、古典語・古典文学の教授を主目的とする学校」としている (森川 1997)。

その後、ウィンチェスターの司教であったウィッカムのウィリアム (William of Wykeham) が、1382 年に初めて貧困層にあった生徒と有償の生徒を対象としたグラマー・スクールであるウィンチェスター・カレッジ (Winchester College) ³を設立し、当該カレッジの卒業生が大学に進学するために、1386 年にはオックスフォード大学内にニュー・カレッジが創設された (Sabben-Clare 1981)。形式上は聖母に祈祷する場所であるが (正式名称は、聖母マリア・カレッジ (Seinte Marie College) である)、内容としてはあらゆる学芸の基礎となるラテン語の文法と自由学芸を学ぶ学校であった。

(3) 初等・中等教育の中でのパブリック・スクール

初等・中等教育に相当するイギリスの義務教育年齢は、1972 年⁴以降は満 5 歳から 16

歳⁵までとなっていたが、初等・中等学校はパブリック・セクターとプライベート・セクターに大別される。パブリック・セクターには公立学校のほか、国または地方公共団体から補助金を受け、その補助額に応じた管理を受ける任意団体 (voluntary body) が経営する学校 (voluntary school) も含まれている。プライベート・セクターは公的補助金を受けず、公からの管理も受けない、中央政府からも地方自治体 (地方教育当局 (Local Education Authorities: LEAs)) からも補助金を受けず独立した寄付基金立学校⁶ (寄宿料、授業料は有償) (endowed school) によって代表される。また、初等教育から中等教育に移行する年齢に関しても、パブリック・セクターとプライベート・セクターでは相違がある。つまり、初等教育におけるパブリック・セクターの学校では 11 歳で中等学校 (secondary school)⁷ に入学するが、プライベート・セクターでは前期準備学校 (pre-preparatory school) に続く準備学校 (preparatory school)⁸ を経て、14 歳で中等学校 (パブリック・スクールはその代表的なもの) に入学する。初等学校から中等学校への接続の時点で既に、パブリック・プライベート両セクター間に年齢差があることは大きな特徴といえる。中等教育は 16 歳の時点で前期中等教育と後期中等教育とに分かれており、16 歳から 18 歳の後期中等教育段階は「シックスフォーム (sixth form)」（第六年級）⁹ と呼ばれ、年齢的には日本の高等学校に相当する。

表 1 1980 年代のパブリック・スクールと
オックス・ブリッジ卒業生が卒業後に占める役職(%)

職種もしくは役職	パブリック スクール	オックス ブリッジ
公務員	50	61
高等裁判所及び裁判官	83	83
弁護士	89	89
イギリス国教会司教	59	71
大使	69	82
大保険会社の取締役	92	50
銀行の取締役	70	47
銀行の会長	83	67
イングランド銀行の取締役	78	89
証券会社の会長	88	59
40 大企業の取締役	66	40

出典: Whitty, G., Edward, T. and Fitz, J. 1989: 17.

1965 年には労働党政権下で中等学校の総合制化への政策転換が打ち出され、その結果、1976 年には 76% の生徒が総合制中等学校に学ぶことになった (Jones 2003: 71)。しかし、1980 年代においてもパブリック・スクールへの進学率は低いにもかかわらず (9 歳時に 6%、14 歳時でも 8%)、依然としてパブリック・スクールが社会で占める地位は高かった (表 1)。公務員、大使、イギリス国教会の司教、高位の外交官あるいは国立の企業のトップにはオックス・ブリッジの卒業生がパブリック・スクールの卒業生よりも高い割合

で就職するものの、その他の大企業には、パブリック・スクールの卒業生の方がオックス・ブリッジの卒業生よりも高い割合で社会的地位の高い職につくことを考え併せると、オックスフォード大学やケンブリッジ大学を卒業した後就職するよりも、パブリック・スクールの卒業することこそが社会での成功に直結すると考える人々も存在していたと推察され

る。

社会的な階級差というものは、階級ごとの文化的あるいは精神的特性を醸成する。例えば、優秀な子供であっても特定の階級に生まれれば大学に進学することなど彼らの視野には入ってこなかった。その具体的な例証が、イギリスでは 16 歳までが義務教育年限となっているが、1970 年においても 16 歳未満の生徒の 44%が何一つ資格を持たず離学していたという事実である (NCIHE 1997)。早期離学者は、親からの独立や自らの家庭を築くことを目的として早期に学校を辞めて職に就いていた。しかし、果たして全て生徒は大学に進学すべきであるのか。表 1 から理解される様に、企業の会長も取締役もパブリック・スクール卒業生で大学に進学していない者の割合が高く、高度専門職においてもパブリック・スクール卒業生が同じ割合である。日本で言うならば、高卒で大卒並みあるいは大卒以上に、社会の中で成功し、高い地位に就けるのである。「教育の機会均等」とは、全員に同じレベルの教育を行うことではなく、大学に進学して学問を究める人生もあれば、高校を卒業して社会の中で自分の人生を開拓する道もあるべきである。大学出というだけの理由で高校出の被雇用者よりも高給を得る状況や、企業の中での出世コースとそれ以外のコースとに分類された状況が無くなれば、偏差値教育による無意味な大学のランク付けも無くなっていくのかもしれない。

表 2 一科目以上の資格を有取得/無取得で
離学した生徒の割合 (%)

	A レベル	O レベル	無資格
1970 年	17	34	44
1992 年	30	64	7

出典: Mackinnon, D. ed. 1996: 171.

しかし一方、戦後福祉国家としての道を歩んできたイギリスでは、この状況に対し政府が採った措置とは、社会政策や教育政策等を通しての平等化政策の展開であった。市場経済において生じた富裕階級と貧困層の格差が、政府による知識や技能を向上させる手段としての「教育」、即ち、一種の公共政策により解

決されるとの信念が、現在に続く「高等教育機関進学機会均等 (widening participation)」政策や、大学進学も可能な職業資格の導入を実現させたのである。出自により大学進学が困難な社会において、政府の政策が大きな打開策となることは事実であった。職業資格についても同様のことがいえる。これら離学者の中には仮に中等学校を卒業しても資格を取得できなかった生徒が多かったが、離学者に対して資格の取得を促すことを目的として政府は多数の多様な資格制度を導入した。その結果 1992 年には無資格者の割合が 1970 年に比べて格段に減少することになった (表 2)。

(4) 現在のイギリスの学校の種類

2015 年現在では、以下の様な種類の学校が存在している。

●アカデミー

- ①フリー・スクール ②伝統的アカデミー ③アカデミー転換校

●公費維持学校 (maintained school) : 公財政により維持される学校

①地方当局が設置・維持する公立学校 (community school)

②1988年教育改革法により導入された国庫補助学校 (Grant Maintained School) の後継としての地方補助学校 (foundation school)

③公営学校として教会などを設立母体とする地方により維持される学校としての

・有志団体立管理学校 (voluntary-controlled school)

・有志団体立補助学校 (voluntary-aided school)

●その他

①グラマー・スクール

②独立学校 (Independent School) : ここに PS は分類されている。

このように多様な学校が存在することで、生徒は学校選択が広がり、自ら選んだ学校を卒業した時点で卒業試験を受けることになる。大学進学を希望する生徒は更にシックスフォームやシックスフォーム・カレッジで学べばよいのであり、そうでない者は中等学校を卒業した時点の 18 歳で社会に出ていく。卒業時の卒業試験において優秀な成績を取ることができれば、社会で十分に優遇される。つまり、どこの学校を卒業したかではなく、どの様な成績を取って学校を卒業したかが重要である。

イギリスの教育は複雑であるとよく耳にするが、複雑であるがために、つまり複雑である結果、若者にとって多様な人生の選択が可能となるのである。

<引用・参考文献>

Dent, H.C. *British Education*. London: Longmans, 1955.

Green, A. *Education and State Formation: The Rise of Education Systems in England, France and the USA*. London: MacMillan, 1990.

Jones, K. *Education in Britain: 1944 to the present*. Oxford: Blackwell, 2003.

Kalton, G., *The Public Schools: A Factual Survey*. London: Longmans, 1966: 2-4.

Lawton, D. *Class, Culture and the Curriculum*. London: Routledge and Kegan Paul, 1975.

Report of Committee on Public Schools. *The Public Schools and the General Education System*. London: HMSO, 1942.

Sabben-Clare, J. *Winchester College*. Winchester: P. & G. Wells, 1981.

Simon, B. *Studies in the History of Education, 1780-1870*. London: Lawrence and Wishart, 1960.

Tawney, R. H., ed. *Secondary Education for All: A Policy for Labour for the Education Advisory Committee of the Labour Party*. London: The Labour Party, 1922.

Whitty, G., Edward, T., and Fitz, J. "England and Wales: the Role of the Private Sector." In *Private Schools in Ten Countries – Policy and Practice*. Walford, G., ed., 8-31.

London: Routledge, 1989.

池田潔『自由と規律—イギリスの学校生活』岩波新書 1949.

池田良三『イギリスの学校教育—ハロー校チャールズ・ボーンの改革』ぎょうせい 1974.

佐伯正一.『中等教育の発展：産業革命期イギリスのパブリック・スクール、文法学校、労働者大学』高陵社書店 1973.

G・ウォルフオード『パブリック・スクールの社会学：英国エリート教育の内幕』竹内洋, 海部優子訳 世界思想社 1996.

篠原康正.「イギリス」『諸外国の教育の動き 2004』文部科学省（編）文部科学省 2005.

空本和助.『イギリス教育制度の研究—イギリス教育の伝統と近代化』お茶の水書房 1969.

成田克矢.『イギリス教育政策史研究』東京：御茶の水書房 1966.

藤井泰.『イギリス中等教育制度史研究』東京：風間書房 1995.

望田研吾.『現代イギリスの中等教育改革の研究』九州大学出版会 1996.

森嶋通夫『イギリスと日本—その教育と経済』岩波書店 1977年.

森川泉.『イギリス中等教育行政史研究』風間書房 1997.

1 通学制であったセント・ポールズ校とマーチャント・テイラーズ校を除く7校を「グレート・セブン」とも呼ばれている（鈴木秀人 2002:186）。

2 HMC は、メンバーシップを持つ学校が連合王国に275、世界に59存在している。

3 ウィンチェスター・カレッジの学寮長であるマスターによると、カレッジでの生徒の育成には「均整の取れた、幅広い(rounded)人間を育てることを目標として掲げていた(2001年のウィンチェスター・カレッジでのインタビューにおいて)。

4 1944年の教育法(1944 Education Act)では義務教育終了年齢は、15歳とされ、その後、1972年に16歳に引き上げられた。2008年の教育・技能法(Education and Skills Act)第1、2条では、18歳まで離学年齢が引き上げられ、義務教育終了(16歳)後の2年間については教育・訓練が義務化された。

5 教育・技能法案において、義務教育終了年齢が、16歳から18歳に引き上げることが示された(2007年11月)。

6 教育目的が何であれ、公の便益の為に遺贈・寄贈された信託基金によって、設立資金及び維持経費の全てあるいは一部が賄われている学校。これは、一人又は複数の私人が自己の所有財産の一部又は全てを公の便宜の為に遺贈・寄贈する慣行(古く中世紀に始まっている)である慈善活動(charity)から始まる。

7 小学校は5歳から11歳の学童を、中等学校は11歳から18歳の生徒を収容する。

8 前期準備学校は5歳から8歳の学童を、準備学校は8歳から13歳の生徒を収容する。

9 これは、大学入学資格試験である教育資格一般認定(General Certificate of Education: GCE)試験の準備教育を主として行う学年で、一般に16歳でGCE試験普通レベル(Ordinary Level)合格後、さらに2年から3年の学習を続ける中等学校最上級学年のことを意味する。この期間に、高等教育機関進学に必要なGCE試験上級レベル(Advanced Level)受験のために3から5科目を学習する。シックスフォームに進級するための資格要件として、数科目のGCE試験普通レベル合格を課す中等学校も多い。しかし、近年、総合制中等学校(Comprehensive school)の増加につれ、16歳を越えてシックスフォームに進級しても、生徒は、必ずしもGCE試験上級レベルを受験しなくなり、更には、シックスフォームに進

級するための資格要件も不要になってきている。また、高等教育機関の進学は希望しないものの、就職のためにシックスフォームに進級して資格を取得する生徒が増加した。シックスフォームのクラスの規模が拡大した場合には、独立してシックスフォーム・カレッジとして設置される場合もある(Thilor, Reid, and Holly 1974), (Macfarlane 1978)。

2. 日本の学校

2. 1 麻布中学校・麻布高等学校

(1) 基礎情報

【麻布学園】	
創立年	1895（明治28）年
学校形態	私立・完全一貫性
男女比	男子校
学費	月額 40,200 円 学費内訳： 授業料 年額 482,400 円 維持費 年額 120,000 円 実験実習費 年額 51,600 円 施設設備費 年額 82,000 円 生徒活動費 年額 7,160 円 PTA 会費 年額 4,800 円
学生数	中学校：913 名

【麻布学園】校歌・校章

麻布中学・高等学校校歌

作詞：森 六蔵 他

作曲：池 譲

1. 千代田の南 麻布の丘に
筑波のみどり 富士の白雪
朝な夕なに 窓より仰ぎ
学びにいそしむ わかきますらを
2. 蓬（よもぎ）にすさぶ 人の心を
矯めむ麻の葉 かざしにさして
愛と誠を もといとたてつ
新しき道 先きがけ行かむ

麻布学園の校章

麻の葉をデザイン化したものです。麻は、中国古代の思想家、荀子の「蓬（よもぎ）も麻中に生ずれば、扶けずして直く、白沙も涅（つち）にあらば、これとともに黒し。」という言葉通り（校歌の2番にも引用されています）、自主・自立の校風と、仲間を大切にしながら豊かな人間性を育むという、学園の教育の理想を表しています。

(2) 平秀明校長先生との対談

1) 過去の遺産を受け継ぎながら、麻布学園はどのような学園にしたいのか、また、どのような生徒を育てたいのか。

創立以来の伝統として「自由闊達、自主自立」の校風の下で、生徒の自主性を育むことに専心しており、この校風が連綿と受け継がれています。麻布の6年間でしっかりと自分の考えを持つ生徒に育ててほしいと思っています。今、世の中では知識がインターネットなどで溢れ、氾濫していますが、知識の集積ではなく、教養を身に着けてほしいので

す。今までの日本の教育は、国家社会のために役立つ有益な人間を育てるための教育でした。これからの世界では、経済、政治、環境問題といった様々な問題も、国家の枠にとられないで人類社会のために貢献する人材を育てたい、そういう風に思っています。

2) 麻布では教養をどのように身につけさせているのか。生徒の中に浸透させようとしているのか。

あらゆる教育活動の中でやっています。勉強も大いにさせていますが、考えさせる教育を行っています。私たちの学校は進学校として認知されていますが、大学の先の将来、即ち世の中に出た時の芽を育てるような授業をしています。そういう意味で言うと、直接大学入試に役立たないことも教えています。

授業は教員の采配に委ねています。1990年代から大学の教育が非常に軽くなってしまいました。その頃から大学の学生選抜も、一種の青田買いともいえるA0入試や、うちの生徒の中でも理系だと歴史を勉強しない、文系だと理科はいらぬとか、そういう傾向が表れてきました。しかし、これは良くない傾向だと考え、教員の中で委員会を立ち上げ、新学習指導要領に沿う形で、2004年度から教養総合という授業を設けました。2004年度から始まり、現在は、高1、高2の2学年で行われています。

(安藤校務主任)：教養総合の授業の例を挙げれば、語学で言えば「ラテン語」等でしょうか。学校カリキュラムに直接関係がなくても教員がやりたいと思っている内容を、テーマを決めて実施しています。

学年の枠を取り払い、教員が実施したい内容に従って、外部から講師やOBの方々を招き、毎週土曜日の3、4時間目に実施しています。各学期、高1で3つ、高2でも3つ、合計6つの講座をとることができます。語学、人文、科学、芸術、スポーツ、リレー講座(主に毎回外部から講師を招く：例えば「現代医療について考える」「原子力利用と社会」「生命倫理について考える」といった大きなテーマをオムニバス形式で実施)の6分野です。必修授業です。非常に成功していると思いますね。

3) 学園の将来

これまでもそうですし、これからもそうだと思うのですが、校長があれこれ思ったとしても、校長がトップダウンで決めて変化する学校ではありません。教員全員が知恵を出し合って進んでいく、意思により動かされていくのが本校です。私としては12歳から18歳の丁度少年から青年に至る生徒を預かるわけだから、彼らが生き活きと過ごしてほしいと思っています。そこで得られる所謂教科以外の学び、友達との友情や、卑怯なことをしないとか、クラブなどで同じ目的に向かって頑張るとか、運動会が盛り上がるように縁の下で支えるとか、隠れた(Hidden)カリキュラム、といったところで充実してほしいと思っています。これまでもそうでしたし、これからもそうであってほしいのです。

4) 教育の仕組み

本学園は、二つの車輪で回っています。一つは、教科会：英・数・国・理・社・芸術・技術・体育の各教科に教科会があり、週に一度教科会の時間が設けられています。その中で教科に関するカリキュラムや授業の進め方における問題を話し合うのです。もう一つは、学年会で、中学1年生の学年会から高校3年の学年会までで、1クラス正・副2名の担任がいます。1学年7クラスですから、 $14 \times 6 = 84$ 名の正・副担任が居ることになります。学年会は水曜日に行います。議題は生徒の生活上の事が中心です。色々な問題が起きるので、生徒指導など自分のクラスだけではなく、学年として話をしていくことになります。この学年会が非常に重要ですね。

他に、週に2回学年主任会議があり、校長と二人の校務主任プラス学年主任6人（中1～高3）とで情報を共有しあっています。どこの学年でどのような問題が起こっているのか全員で共有します。他に職員会議や教科主任会議があります。最高議決機関は、職員会議で、校長が独断で行うことはできないのです。理事会は経営に責任を有し、校長は教育に責任を持つといったように明確に分かれています。また、理事会は、本学園ではどういう教育が行われるかには関与しません。

また、毎年クラス替えがあり、毎年担任も変わることになっているので、生徒はなるべく多くの先生から影響を受けることを望んでいますし、生徒たちも多くの生徒と知りあって、刺激を受けることは良いことだと思っています。固定した関係ではなくてですね。ただし、英・数・国はどの学年でも教えるので、教師はそのまま持ち上がる場合があります。

5) 学年会の問題

怪我のような日常的な問題から不登校問題まで色々ですが、色々な「逸脱行為」が起こりますが、その都度学年会で指導方針を決めています。学年主任会議で、その指導案を示し、他の学年主任から意見をもらい、最終的には職員会議に提案して、生徒指導をすることになります。自由な校風ではありますが、「窃盗と暴力といじめは絶対に許さない」方針で、生徒を指導しています。

6) 重要なマナー

地元に着した学校ですので、近辺の方々からは迷惑な学校と思われることもあります(笑)。うとうしい学校、迷惑な学校、登下校時並んで歩いていても生徒がよけない、ぶつかっても謝らない、店でうるさい。それを、「誠にすみません」と校務主任が対処していくわけです。朝礼やクラスタイムで、「・・・したら謝りましょう」と注意するのです。

(安藤)：中1で入ってきたときに、マナーを教えています。中庭では固いボールは使わないといったルールから始まって、校外でのマナーについて教える。徹底して、クラス

タイムで教えています。

(平校長)：自由な学校で、私服や校則はありません。生徒が、時に羽目を外してしまい、問題を起こす時があります。しかも、社会が学校に厳しくなっています。昔ならば問題が起こったときに、そこで社会や大人が「こんなことしちゃいけないじゃないか」と注意することが一番教育だと思っていましたが、以前とは、地域の在り方や時代が異なっているようです。子供時代は、全ての大人が経験した時代であり、発展途上なので、大人と同じレベルを求めるのは間違いであって、大人は子供が誤ったことをしていることに気づいた時には注意すべきだと思っています。

7) 自由な校風

麻布の自由を体現していると言われている文化祭・運動会では、生徒が実行委員会を組織し、全てを請け負うため、予算も百万単位のお金を管理することになり、テーマも先輩から伝授されながら、自分たちで決めていくのです。教員は生徒のやりたいことをできるだけ実現できるように支援する形を取っています。40以上のクラブがあり、高2がクラブの運営を自主的に行っています。遠足や修学旅行も行き先は、生徒が主体となって決めています。

8) カリキュラムポリシー

(飛嶋校務主任)：毎年ではありませんが、「教養総合の時間をどう思いますか、どういう分野を設定してほしいですか」といった生徒アンケートや教員アンケートをとり、それによって改善していくのです。毎年授業内容を発表する「経験交流会」を実施しており、その会で内容・生徒の反応・失敗談などについて話してもらっています。この経験交流会は自主参加ですので、参加しない教員もいます。

他に、例えば、英語の授業では、教材としては以前はプログレスを使っていましたが、2007年からは文英堂のBirdland English Courseを使用していますが、この教科書は高3までの内容を網羅しており、教科書の中1から中3まで終わった時点で、公立学校の殆どの内容が終了することになっています。つまり、センター試験は受けられる内容を授業したことになります。そこで、高校では一部検定教科書三省堂の『クラウン』を使用しながら、その他プリント教材を併用して教えています。音声教材や動画教材も積極的に活用しています。

今年2014年8月には英語科の発案で、初めての試みですが、福島県天栄村にあるBritish Hillsという疑似英国があるのですが、そこで中学3年の有志が2泊3日で研修してきました。80名の参加でした。本人というより保護者の関心がとても高く、親に背中を押された生徒が多そうでした。英語しか使ってはいけない場所なので勉強になったと思います。

9) 国際化

イギリスのグレートナインの各校である Winchester 校との交流を行っていました。誕生の経緯は、麻布の卒業生で理事をしていた方との縁で 100 周年のときに国際交流事業の皮切りとして導入されました。生徒を選考し、2～3 か月の交換留学をしていたのですが、2008 年頃を最後に、交流が終了しました。代わりにカナダの私立学校との相互訪問、相互交流が始まりました。

(松尾教務主任) : 国際化についてですが、ベテランの教員が多かった団塊の世代が退職し、若手教員が増えた結果、英語教育への考え方がフレッシュになってきました。コミュニケーションに軸足を置いた英語教育、以前よりかなりシフトしましたね。外部講習会に参加したり、イギリスに一月教員が行って来たり、積極的に学びを教育に活かそうとしています。新たな麻布の英語教育が期待されます。

10) 教員

専任は校長、司書、養護教諭を含め 92 名です。卒業生は其中で校長含め 12 人で、私学としては少ないでしょう。2000 年に 6 クラスから 7 クラスになり、6 学年で 42 クラスあるので、正・副担任で 84 名となります。校務主任、教務主任、校長は担任を持っていません。1800 人に対して 92 名の教員となり、大体教員対生徒の割合は、1 : 20 人弱で、手厚い体制を取っている学校とあってよいと思っています。1 学年の定員 300 名で、1 クラス 42、43 名となります。

非常勤は、30 人弱を雇用しています。ただ、非常勤にクラブの担任をさせている学校もありますが、麻布は専任がクラブを受け持つことになっており、非常勤は授業だけお願いしています。10 時間以上持たないので、専任と同じ時間数を持つこともありません。

私学は人でもつ。若い方を取れば、30 年から 40 年勤めてもらいたいですね。定年は 65 歳です。校長は別です。校長は理事会で検討し、決定されます。歴代の校長は生え抜きで、教員を経験し、その後校長になるパターンです。麻布卒業生ですね。ただ、生え抜きでない校長もいました。

11) 進路

進学や進路指導については、生徒の考えを尊重しています。学校が特に医学部進学を推奨していることはありません。本人が望むところを受けなさい、と言っています。学年会に進路指導の先生がいるので、生徒からの質問を受けています。リレー講座で先輩の体験談を知って、医者や弁護士になろうと思う生徒もいるようです。進路指導は殆どしてないのですが、「進路指導部」で学外から演者を招いて講演してもらっています。300 人の中の 1 割、つまり 20 から 30 人程度が医学部進学していますね。

他に、海外の大学を希望する生徒が毎年 1 名程度います。海外大学卒業後の進路は把握

していませんが、様々な領域に進んでいるようです。

1 2) 男子校であること

中学からの一貫校である麻布は、ずっと男子校として存続してきました。戦後、公立学校は男女共学化をしましたが、麻布は男子だけを選択しました。中学や高校時代は人格形成時ですので、異性を気にせずのびのびできることが重要だと思っています。男子のみの学校は日本には200校もありません。希少価値となっていると思っています。

居場所があるということが重要です。女子が居ると、はじかれてしまう生徒もいますが、男子校だとどの個人にも居場所があるのです。

2. 2 鷗友学園女子中学高等学校

(1) はじめに

鷗友学園女子中学高等学校（以下鷗友）は、大正時代に東京府立第一高等女学校（現東京都立白鷗高等学校・附属中学校）の創立50周年記念事業として、同校の同窓会（鷗友会）が世田谷高等女学校および技芸女学校を引き継ぐ形で1935（昭和10）年に鷗友学園高等女学校を設立したことに始まる。開校から約半年で第2代校長となった市川源三（1874～1940）は、若かりし頃から女子教育を志し、高等師範研究科在学中に雑誌『女子教育』を発刊、心理学・社会学・教育学の外国文献の翻訳・紹介を積極的に行ってきた。1901（明治34）年に第一高女の教諭になり、さらに1918（大正7）年からは、鷗友の校長になるまでの17年にわたり第一高女の校長を務めたのである。「女子教育＝良妻賢母教育」が当たり前とされていた時代に、「女性である前にまずひとりの人間であれ」「社会の中で自分の能力を最大限発揮して活躍する女性になれ」と教えていた。しかし、戦争の影響もあって市川の理想とする教育が難しくなる中で、同窓会が立ち上がり、「市川先生のために学校をプレゼント」（吉野校長談）したものである。戦後学校制度改革の下で中高併設の学校となり現在に至る。学年定員220名（編入なし）、専任教員69名（男性31、女性38）、講師55名（男性12名、女性43名）である（2014年度現在）。

鷗友の教育について、さらなる詳細を直接うかがうため、小口幸成理事長の協力を得て2014年5月27日に同校を訪問し、吉野野校長にヒアリングを行った¹。いただいた資料²とヒアリング内容に加え公式ホームページ（最終確認2015年11月17日）で公開されている最新の情報も踏まえて、本稿の内容は基本的に記述している。なお、多くの示唆をいただき、かつ先方の自発的なご厚意で全校生徒にアンケートをとっていただいたにもかかわらず、紙幅の都合により本稿では示唆の一部やアンケート結果には触れられないことがたいへん心苦しい。この場を借りてご協力への感謝と共に、お詫びを申し上げたい。

(2) 鷗友の教育理念

鷗友の創立以来の校訓は市川が掲げた「慈愛（あい）と誠実（まこと）と創造」である。第一高女の教育実践の多くをそのまま鷗友に導入し、科学や英語に重点を置きつつ体育や園芸も必修とし、合科学習（現在の総合的学習につながるもの）、自由研究、宗教活動、芸術的教養のための校友会活動、さらには、当時としては珍しく級長を選挙で決めるなどの自治会制度も取り入れるなど、大正自由教育の影響を強く受けていた。入学希望者が徐々に増加したが、市川は学園創立からわずか5年で逝去する。その後を受けたのは、学園創設時に理事長となった石川志づであった。内村鑑三や津田梅子、そして市川にも薫陶を受けた石川は、キリスト教精神による全人教育（なお、鷗友はミッションスクールではない）と英語教育に力を入れて、女性の自立、そして国際社会で活躍する女性の育成をめざした。特に、第二次大戦中でも英語教育を続けるほどであった。しかし、こうして市川や石川が積み上げた理念は、戦後の学制改革によって公立・共学が中心となって受験における併願校の位置づけとなる風潮の強まりを背景に、その形骸化が進んでいった。この当時の入学者の学力や自信の低下は著しく、教科書の漢字が読めない生徒さえいる状況であった。

そして、1986年から伊藤進校長の下で教育改革に着手する。伊藤は、生徒たちに授業に目を向けさせ、自信をつけさせていくため、市川と石川が積み上げた理念を、「～てもよい、まず肯定から始めよう」「学びは遊びだ今勉強が面白い」「喜びと真剣さあふれる学園」「自由と表出」「あれもこれも」などの言葉に置き直し、生徒たちに諭すことから始めた。教師たちには「中空構造」と「わいがや主義」（自分是指図をせず中心にいない、みなさんがわいわいやりながら教育を進めるように）をかけ声にして組織の活性化を図ろうとした。あわせて、1990年代から急速に家族や地域社会といったコミュニティが崩壊し、生徒たちが「個」としてばらばらに閉じ込められているような状況が肌で感じられていたことから、2000年頃から学校でのコミュニティづくりにも力を入れるようになった。そして、今なお続く不断の改革の蓄積は、飛躍的な生徒の学力や人間性の向上、学校の再興に結実している。現在学校が掲げているスローガンは「自分の枠を超え、学校の枠を超え、日本の枠を超え、隣人（となりびと）となれ。世界にはばたけ鷗友生」である。

(3) 教育理念の「見える化」と科学的分析・考察に基づく教育改革

教育改革においては、校訓を原点にして、教科だけではなく、生活からきちんと生徒を育てるカリキュラムづくりを企図した。「慈愛」は人間関係を大切にし社会性を伸ばすこと、「誠実」はひとりひとりの能力を発見し伸ばすこと、そして発見し伸ばした自分の能力を社会の中で最大限に発揮していきいきと「創造」的に活躍することをめざす。この校訓を「見える化」して、実際のカリキュラムに具現化して落とし込み教員間で共有する作業を絶えず行った。特に、生徒たちの個々の状況のデータを取り科学的に分析する作業であることが特徴的である。「慈愛」は生徒指導（HR、委員会活動、クラブ活動など）を通じて

身につけていく。「誠実」は学業を通じて、みずからがもてるさまざまな能力を見つけ出していく。この「慈愛」を縦軸に、「誠実」を横軸において、縦軸は社会との関係、横軸は時間の流れを指標として、慈愛を帯びた社会性のベクトルと時間をかけて身につけた誠実のベクトルとが結合して行き着く先に、「創造」があるという図（右参照）をつくった。すべての教員が、この校訓を具現化したイメージを理解し、同じ方向を向いて対処することが求められた（教員間で温度差やずれがあっては、生徒たちは何が正しいのか分からなくなるからだ）。

図 鷗友の教育理念の「見える化」



これを枠組みとして、ある教育産業による心理テストをアレンジした調査を全校に実施した。中1の段階では、受験勉強を突破し家庭環境も良好な家が多いため、「慈愛」「誠実」いずれも良い右上の象限にある。それが、思春期の中で反抗期その他の影響で一度左下の象限におちていく現象が見られた。鷗友では、この「落ち込み」を積極的に捉え、いったん落ち込んでも、自信をつけて自分で選びとる力がつけば、そこから這い上がって自立する力がついていく、と考えたのである。実際、中2から中3にかけて落ち込んでも、高1からぐんぐんとあがり、最後は大学生の平均よりも高い位置に到達した。

鷗友では、学業に当たる「誠実」だけではなく、人間性にあたる「慈愛」まで明確にカリキュラムに位置づけている。その中で社会性に強い生徒がそうでない生徒も巻き込んで、自主的にコミュニティをつくりあげ学校生活を動かしていくことがある。そうしたコミュニティづくりのために鷗友が工夫している点がいくつかある。第1に中1における少人数クラスである。中2以上は1クラス40人ベースだが、中1はこれが30人となる。第2には、「3日に1回の席替え」である。この理由は、女子の場合はクラス内での小集団の形成が非常に早く、心理的に強い親密さがある一方で閉鎖的な関係が築かれる。それが小集団間での人間関係トラブル、いじめなどにつながるために、未然にランダムにシャッフルしてしまう。人間関係を苦手としてきた生徒でも、3日に1回は声をかけてもらえるチャンスが生ずるため、クラスの中での居場所がある安心感を醸成するメリットがある。また、親密な関係が強固になる前に解体されるため、親密すぎず疎遠すぎずというちょうどいい距離感の人間関係を醸成できる良さもある。小集団化の進行は、お互いにけん制する風土を生み、積極的に発言することや、他者に声をかけることさえも躊躇してしまうようになる。東京学芸大学の浅野智彦教授による親密圏と公共圏の概念をうまく重ね合わせることで、女子の間でも倫理性を背景にして積極性を働かせることができるようになるのだそうである。クラスがまとまってくると、クラスを超えて、あるいは学年を超えて一緒に弁当を食べる日なども設けられる。これだけではなく、HR単位でエンカウンターを実施し、中1から中3ではアサーションをクラスごとに年5~6回、3年間で15~16回実施し、専門家によるワークショップを行うプログラムも組んでいる。こうした社会性を育むプログ

ラムが徹底してきちんと設計されているのである。教師に対してもこうした実践に対応できるように研修が進められている。クラブ活動や校友会も、社会性を高める場として重視している。反省会から入り、議論を通じて、ひとつのことをまとまってやっていく方法を実践的に学ぶ場となっている。とりわけ、行事などは全校的に巻き込んだ話し合いを展開しないと前に進まないくらいに参加意識が強い。

これらの社会性の育成が結実するのが高3の運動会である。鷗友の運動会は学年対抗で、初めての中1こそついていけないが、中2からは運動会のために必死になって各学年が準備をするようになる。そのなかで、高3は最後まであり例えば以下のようなことが起こるそうだ。伝統競技には希望選手が多いため、出場選手を決めるために学年で予選をやる、負けた生徒のために勝った生徒たちがその気持ちに応えるためにもっと頑張る、受験の重圧があって練習に出たがらない生徒には連絡を取って激励して参加を促し、運動会後に一緒になって苦手な分野の勉強会を開いてあげる、などである。諸事に対して結束して頑張る雰囲気、学校内に醸成されていったことが最大の収穫だそうである。「自己肯定感を高めアイデンティティの確立を援助する」ことも、社会性と同様に重視されている。社会性が高くても自己肯定感が低い生徒もいる。家庭でのタテの関係で親や祖父母から学んでいることも多いが、与えられるだけなので、自己肯定感の低さにつながってしまうのである。このように鷗友では学問の力も借りたデータに基づく科学的な分析をベースとした教育改革をしているのが特徴であるが、そこから得られたものは多々あるのだ。

(4) 鷗友のカリキュラムの特性

「誠実」にあたる学業に関しては、カリキュラムは、そのときの生徒の状況やニーズに応じて、カリキュラム変更を行っている。ちょうどヒアリング當時も、次の年度に向けた協議が進められているとのことであった。各教科に対する考え方として特徴的なのは、それぞれの教科において自発的にカリキュラムを構想しているそうだが、一方で教育理念や方針との意図的な関連づけが明確にされていると思われる点にある。たとえば英語・数学・国語は、言語（記号）でもって相手と自分の気持ちや考えをやりとりする手段・道具として、理科・社会は、情報を集め、現実をしっかりと見て、分析、思考、判断して結果を表現する力として位置づけている。それゆえ、例えば英語はすべて英語で授業を行っており、LL教室には1万4千冊の洋書を揃えて、中3までに100万語以上を読むことを目標にしており、国際社会に対応できる女性の育成をめざしている。いずれも、人間関係を形成する力と関連づけられている。理科は、生徒自身を研究者の立場に立たせる授業を展開している。実験設備も本格的で、筆者が本研究の過程で視察した英国のパブリックスクールに匹敵するレベルである。社会科では、情報の収集・判別、思考方法、レポート・小論文の書き方も含めて「知の技法」をも学ぶ。英数国理社以外の科目も重視する姿勢がある。自分自身を知るという意味では重要な科目であり、家庭科はその総合科目である。日常の手

仕事はアーツ（芸芸）であり、頭だけが自分ではない、あらゆる表現手段を自分のものにして、それが学問と融合して全人的な人間をめざすという考え方である。例えば、「平和について発表すること」を課題にすると、もちろん文章で発表する生徒もいるが、中には歌で、絵で、ピアノで、造形で、発表するという生徒も出てくる。芸大に現役で進学する学生も毎年必ずいるそうだ。音楽は6年間合唱中心、美術は中1から油絵、書道は中学で芸術科書道、体育のダンスは体育リトミックが取り入れられている。いずれも、表現力を高めることをねらいとしており、その道の専門家が指導している。この点に関しては、園芸が科目として導入されていることも関係している。

教員に対しては、必要な条件としてコミュニケーション能力と授業力を求めている。ただし、女子の場合「教える力」の前にコミュニケーションやコーチングができることが重要であると考えられている。例えば、教員が生徒に接する上での方針として「さんづけ」で呼ぶこともそのひとつであろう。中高一貫の思春期の女子のみを相手にする学校であることに対する理解を要する。総体的にみて、教育方針も含めて教育上の意図を理解し、それに対応する力が求められている。その上で、多様な教員の確保にも努めているそうである。教員への研修も、初任者に対しては授業サポートをつけて担任は2年目からもたせるそうである。

宗教教育の効用については、個別性を超えた普遍性をもって物事を考えることができるようになる点があげられている。個別の利害を超えて、一段上から普遍的な思考が出来るようになってほしいと考えている。また、進学実績に対しては、進学実績を優先する考え方はとらないが、これはひとりひとりのやりたいことをかなえるために後押しした結果であり、また実績が上がることで生徒の自己肯定感の向上につながっていることは確かとの見解を持っている。近年は理系志望が増えて半分以上になってきているそうだ。

（5）考察～女性のためのリーダーシップにつなぐ科学的学校改革～

鷗友の教育においては、学業の部分の工夫と同等に、生徒の人間関係づくりの仕組みをていねいに築き上げ、社会性を高めることに大きな意を用いている。むしろ、後者の方が優先されていると錯覚するくらいの力の入れ方であった。教育面で陥った危機に対して、まず、教育理念を「眼前の子どもの現実」に沿うように再解釈し、生徒には科学的な手法でかつ誠実に向き合っ、地道に改善・改革を積み上げるなかで成果が結実した。この経緯からみて、このように形成された鷗友の教育実践にはあらゆる場面において「地に足がついた本質」を強く見て取ることができる。その本質を支える創立以来の女子教育の理念のために、特に女子の特性を十二分に踏まえた対応がなされている。吉野校長の説明では、権威的（imperial）リーダーではなく、人を巻き込む（inclusive）リーダー育成をめざしているとのことであった。例えば国際関係をみても覇権型国家よりも協調型国家のほうがこれから求められるとの考えも踏まえられている。我々にとってリーダーシップ教育のモ

デルを探求する過程において、この指摘は非常に重要だ。女性が社会的に自立するためには、まず自分自身に対してだけでなく、周囲と対等に協調し、社会を巻き込むリーダーが出てくる必要がある（ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイ氏が好例だろう）。女性の可能性を花開かせる良好な環境は、女子教育の場で初めて十分に実現が可能であること、そして科学的にも思春期における別学の効用が証明されつつある中で、女子（のためのリーダーシップ）教育の進歩が、そのままリーダーシップの世界標準まで一変させてしまう可能性すら、鷗友の教育が示唆しているように思えてならない。

2. 3 開成中学校・高等学校

(1) はじめに

開成中学校・高等学校（以下開成）は、1871（明治4）年に、加賀藩砲術師範であった佐野鼎が欧米の教育事情を視察する中で日本にも欧米並みの学校が必要であるとの強い思いに至り、帰国後創立した「共立学校」に始まる。しかし、佐野はその6年後に若くして没し、共立学校も事実上廃校寸前となっていた。1878（明治11）年に初代校長として就任した当時若干25歳の高橋是清が、学園を再興しその基礎を築いたとされる。東京大学の入学者の低学力を憂慮していた高橋は、東京大学予備門の英語教師を招聘し、東京大学入学希望者に学力を付けさせて合格をめざす学校に転換することに学校の活路を見出した。いったん府立学校になった時代を経て、1895（明治28）年に校名を「開成」に改めた。戦後、新制学校制度の下で開成高等学校を創設して現在に至る。なお、1960（昭和35）年から、高校からの入学者を受け入れるようになった。現在の教員数は専任85名（その他講師が30名程度）、中学校は生徒定員900名（学年定員300名）で学級数21、高等学校が生徒定員1,200名（学年定員400名）で学級数24、高校からの入学定員は100である。学校長は基本的に開成OBが就任しており、2015年現在はハーバード大学元教授の柳沢幸雄氏が担っている。開成の教育について、さらなる詳細を直接うかがうため、2014年8月8日に同校を訪問し、葛西太郎教頭³にヒアリングを行った。いただいた資料⁴とヒアリング内容に加え公式ホームページ（最終確認2015年11月15日）で公開されている最新の情報も踏まえて、本稿の内容は基本的に記述されている。なお、周到に準備された資料に基づいたヒアリングから多くの興味深い知見を得ることができたが、紙幅の都合により本稿で触れられなかったことも多くある。この場を借りてご協力いただいたことに感謝申し上げますと共にお詫び申し上げたい。

(2) 開成の教育理念

開成の教育理念は、以下のように説明されている。まず、高橋が生徒と教師に対し論じた内容が開成の教育理念の基礎となっている。以下、公式HPの記載を要約する。

学問の目的は、自身固有の能力の進歩にある。それは、ミクロには自身・家庭の利益、マクロには社会の利益の増進にあり、そのために何かしら探求を要する事項はすべて学問である。そして何が対象であれ注意や観察をすることがそのまま学問となる。この注意・観察の程度が学問の成否を大きく左右し、その注意・観察の成否は学ぶ者に左右される。みずから創意工夫することは面倒だが、だからといって模倣ばかりでは推論も思考もしない弊害を生む。学問のためには記憶力と思考力の両方が必要で、前者は後者を養う土台となる。事の与える影響をよく考えず、前例主義で事を進め、結果は関知しないのは、この両者をきちんと育成しなかった結果である。一つ一つの事物について、一つ一つ推論・探求することで事の理を解明できるし、未知の理論の発見さえもできる。だから、学問は思考力を用いるのが最も貴いのだ。

この理念を原点に、さらに4つの考え方が歴史を重ねる中で育まれてきたとされる。第1が、「開成」の名称の由来である「開物成務」（『易経』）である。「人間性を開拓啓発し、人としての務めを成す」意がある。ここから、「人としての務めを成し社会や世界に貢献する次代の人材を育てるため、人間性の開拓・啓発に尽力する」との理念につながっている。第2に、英国の作家・政治家であった E.B.リットンの言である「ペンは剣よりも強し」である。有名な「ペンケン」の校章にもなっているが、「どんな力にも屈することのない学問・言論の優位を信じる」精神を象徴している。第3に「質実剛健」がある。第9代校長片山正夫が示したことに由来する。「進取の気性を持ち、時代に向かっていく」ために「外見を飾ることなく内面が充実していて、たくましく揺るぎようがない」人材を育てる精神が込められている。第4に、「自由」である。これは「自主」と「自律」を礎に、みずから開拓し、育んでいく積極的な「自由」であると説明されている。

そしてこれらの理念を育んだいわば全体に通底する精神として「共立精神」が位置づけられている。「共立」の由来は共同出資で学校が創立された経緯にあり、教育理念というよりも学園全体の構成員に醸成された組織風土としての「共に立て、共に育てる学園」との考え方である。

（3）教員の深い学問的専門性が支えるカリキュラム・授業

調査を通じてまず筆者が着目したのは、教員がもつ深い学問的専門性であり、それに裏打ちされたカリキュラム構成と授業である。まず、開成では教員の勤務や配置に関する考え方に大きな特徴がある。

開成においては、朝と帰りの HR はなく、教員も授業の時のみ出校が義務づけられている。毎日の職員打ち合わせもなく、研究日（出校が免除される日）が置かれている。これだけ時間に余裕を持たせている最大の理由は、教員の授業研究の時間を確保するためであ

る。授業研究を怠ると開成として提供するに足る授業が成り立たないからである。学校として研修はしていないが、校長が研修を行うように促して研修委員会を立ち上げたところ、いかに上から実施する研修が無意味かという論文集ができあがってしまったというエピソードがある。研さんは教員が自分の責任でやるもので学校が手を出すことではないという認識であるが、これは開成の教師観の表れとして非常に興味深い。

また、1970年代の舟山正吉理事長と関口隆克校長による改革も大きい。両者は、「共立精神」を意識した経営・運営を進め、まず教員の待遇改善に努めた。教員の給与水準を向上し、採用の質も高める取り組みをした。組織のフラット化を進め、教頭（学内では教務委員長と称している）などの役割も2年交替で輪番制として、管理職は校長と事務長のみであり、それ以外の教職員はひとしく扱うようにした。学園の雰囲気明るくなり、生徒募集も好転したため、この時代の2人は「中興の祖」とされている。なお、理事長と理事は無報酬であり、理事長が責任を持って校長を任命している。校長の個性が学校運営にも現れることがある。校長には決定権があるが、現校長は「多数に従う」との理念を表明しており、校長からの提案が教師たちによって否決されることも普通にあるそうだ。

教員の採用は校長に一任されているが、方針は特でない。ただ、科目担当の分担において専門性を重視している。例えば、同じ国語の授業でも、現代文専門、古文専門、漢文専門と、担当教員が完全に別になる。また、同じ世界史でも近代史や現代史など教員ごとのより深いレベルでの専門性は異なっている。採用の際にも、当該教科や科目のなかで欠けている専門分野を補う、あるいは開成の生徒にどのような内容を提供すべきかとの観点で検討がなされるそうである。つまり、深い専門性を兼ね備えた教員を生徒への最良の教育という観点から幅広く揃えることに主眼が置かれているのである。なお、以前は女性教員がゼロであったが、公募をするようになり増えている。専任で5名、講師も入れて15名程度だそうだ。またOB教員は全体の約4分の1である。院卒レベルでの採用が多くなっている。

こうして各科目で、教育内容の全体に深い学問的専門性を帯びた授業を提供できる仕組みになっている。個別の科目での工夫についてごく一部だが触れると、英語は、正則英語を非常に大事にしておりネイティブ教員も用意している。中1の理科はすべて実験や観察、解剖などから入っている。受験科目でない科目にも力を入れている。音楽は、高校での音楽はピアノ、作曲、歌唱、ギターからの選択で1年間通じて少人数で学ぶ。いずれも現役のプロのプレイヤーが指導を行う。美術は、日展の審査員が専任教員で科の中心になっている。いずれにせよ、実体験、実験、本物を重視している点に特徴がある。なお、選択科目では仮に受講希望者が1名になっても開講することを旨としている。

開成は高校からの入学者（以下編入生）の1年次を別クラス・別カリキュラムにしている。中学では一部の教科で先取り学習を行っている。例えば数学は中2から中3の内容に入り、中3では高1の内容を学ぶ。高校でも1年先取りのペースで学習が進む。高1で中

学からの内部進学者（以下内進生）と編入生とを授業で混ぜると、編入生に劣等感を生む懸念があるため、高2の段階で学習進度が揃うように進度調整をしているのである。なお、中学の英語、理科、社会では先取り学習を行っていない。

ここでクラス編成がポイントとなる。中学は1クラス43名が7クラス、高校では1クラス50名が8クラス（高1はうち編入生が2クラス）である。高1までは毎年クラス替えを行うが、高2からの最後の2年間は同じクラスになる。なお、文理別あるいは習熟度別のクラス分けはしない。高3では理科、社会、数学の一部は文理別授業で少人数教育となる。学年が上がるときは、最低でも半分の教員が持ち上がる。

（4）人間関係を醸成する具現化された教育理念と課外活動・編入生

調査を通じてもうひとつ筆者が着目したのは、教育理念が具現化された環境と生徒間の人間関係の醸成とが、密接に関連していると思われることにある。特に、課外活動や編入生がポイントで、結果的に人間関係が縦横無尽にかつ強固に醸成されていると推察する。

まず、部活動・同好会活動が盛んで、強制ではないにもかかわらず、加入率は9割以上、複数加入している生徒もめずらしくない。学業に支障が出ない範囲での活動とされており、またいわゆる勝利至上主義や学園の知名度向上への貢献とも一線を画している。50の部と25の同好会が2015年現在置かれている。

運動会や文化祭などの学校行事では、生徒たちはよりよいものにするために徹底した議論を積み重ねて準備・本番を遂行する。この議論を大事にする気風は「ペンは剣よりも強し」につながる。文化祭でも、それぞれの企画には、単に「既成のもの」をもってきて終わりではなく、それに頼らない「自分たち自身の手作り」の意図が込められていることが多いそうだ。これは「外面を飾らず」「たくましく揺るぎようもない価値」を示す「質実剛健」ともつながる。そして、生徒主体で行事をやり終えることが「開成生」として育った証しでもあり「通過儀礼」であると考えられている。特に運動会は、高3になると下級生への指導も含めて、それぞれの生徒が役割を担い、何かしら先頭に切って行動する場面を経験することが不可避となる。一方、運動会でのクラス編成は高校で1クラス増える関係で、中学では各学年で各クラスを8等分の輪切りにして高校の各クラスに貼り付けている。このため、中学段階では運動会は学年の全クラスを横断するように集団が組まれることから、クラスの枠を超えた人間関係がこの時期から形成されていくそうだ。

生徒には様々なタイプがいるが、クラブや行事など多彩な活動の場が用意されており、縦横無尽に生徒たちが関わるため、どんなタイプでもどこかに居場所やロールモデルを見つけやすい（講演会などOBが学園に協力することも多く、それもロールモデルの提供になっていることが考えられる）。さらに恒常的に何かしらの役割を担い続けることで、「リーダー・タイプ」「補佐的タイプ」などを自他共に認識していくことになる。そしてその集大成が高3で取り組む運動会であると考えられている。学校や学年、クラス規模での大き

なリーダーもいるが、より細かい単位（役割など）でのリーダーも可視的・非可視的にちらばっているイメージだろう。課外活動を通じて、教師が指示したわけでもなく自然と居場所を形成して自然と役割分担の棲み分けができあがっていく。だから、中1段階から縦横無尽の関係が形成される素地があり、それが「共に支える学園」の礎にもなる。開成生の気質として、「おれがおれが」と個人が前に出るのではなく、協調性と人当たりを重視するタイプが多いといわれることとも関係していると考えられている。

また、編入生の存在も人間形成に大きな影響があるそうだ。編入生は、公立中学の出身が多く多様な生徒と思春期に触れてきた経験を持っている。また海外帰国生を最低でも編入生の1割確保しているため、海外経験がある生徒も入ってくる。高校入学までにある程度強い「個」が確立された成熟した生徒がやってくるため、内進生の中で培われた負の同調性を緩和し、内進生の精神的な刺激にもなることがあるそうだ。

「開成学園の概要」のQ&Aにも載るくらいに「開成は生徒に対する面倒見が悪い」という言説が聞かれるそうだ。確かに生徒を細かい規則でいたずらに縛らないが、自覚と責任を持たせるためにまず「自分で考える」ことが基本だそうだ。これは「開物成務」にもつながる考え方である。それでも、必要などころでは手をかけ、何かしたいと思ったら反対はしないし、困ったら支援もする姿勢で臨んでいるそうである。これは、開成における「自主」「自律」に基づく「自分で自分の考えを決められる自由」であり、それが様々な場面での「生徒主体」の意識につながる。なお、進路指導も、基本的に「生徒の希望を叶える」という視点で行われており、「東大合格者数1位」にもこだわりはないとしている。

（5）考察～開成における「リーダーシップ教育」とは～

前述の高橋是清が残した理念をさらに要約してしまえば、生活や社会のあらゆる事象が学問の対象であり、学問のためには注意と観察に基づく思考が重要であるから、記憶力に基づいた思考力の涵養が不可欠だということだろう。開成では個々の教員の専門性の範囲を限定しつつ深くすることで、この「深みのある学問」に中等教育の段階で触れてこれを鍛錬させる意図があると考えられる。そうした開成型の学問的鍛錬で得た素養を発揮する場所も、授業はもちろんのこと課外活動など幅広く用意されている。学校生活において教員も生徒も議論を好む気質は、こうした素養の発露であり、それがさらに実践的に学問的鍛錬に還元されつつ、人間関係を縦横無尽に深める可能性を帯びた場にもなっている。そうした環境の下で、開成生ひとりひとりが、自分の力量、性格、気質を多角的・客観的・相対的に理解するプロセスにつながる。こうした自分に対する理解が適切に進んでいけば、おのずとみずからを適材適所に導こうとする選択をするだろう。選択が他者に委ねられる場面にあっても、現実という名の制約の下で、より最適に近い解を見つけることもできるだろう。そして、それぞれの生活場面において、多様な人物と縦横無尽に関わった経験が、誰に対しても適切な対処ができる関係づくりを可能とする素地をもたらすだろう。そうし

た対人関係能力は、リーダーシップと呼ばれる資質につながる重要な要素と考えられる。リーダーシップは、人間関係のあり方を示す概念である。それは、知識の量や思考力にのみ独立的に依拠するものではなく、それらを生活の中で学問的に探求しながら多様な人間関係の中で実践的に活用する経験・場数を多く踏むことで、はじめて磨かれていくものであることを、開成の教育から得た示唆として考えている。

2. 4 慶應義塾高等学校

(1) 基礎情報

1) 塾校の理念

慶應義塾高等学校は慶應義塾第一高等学校、第二高等学校の名称で1948(昭和23)年に設立され、翌年に両校を統合して慶應義塾高等学校と改称し、その秋、米軍に接収されていた日吉の旧大学予科校舎が返還された際に移転し、現在に至る。生徒総数約2,200名、各学年18学級からなる男子校で、人材の豊富さと個性の多様性が特徴です。福澤精神に則り、独立自尊の気風にとみ、自主性と気品を重んじ、将来「全社会の先導者」となる人材の育成を教育の目的としている。

各学年18学級で、第1学年は各学級とも塾内推薦入学者と、受験による外部入学者とがほぼ同じ比率になるよう編成され、また第2学年に進級する時編成替えを行なっている。

生徒数は、1年生が706名、2年生が726名、3年生が692名の合計2,124名である(2015年4月)。また、教員は、学校長1名、教諭100名、講師43名、事務職員32名、校医3名、カウンセラー3名、看護師1名である。

授業時間は50分単位とし、週31時間。始業は年間を通して8時20分、終業は14時50分(木曜のみ15時50分)である。土曜は授業を行わない。試験は各学期末に定期試験を行い、別に5月、11月に中間試験がある。

(2) 赤井豊秋主事との対談

1) ミッション

鳥居元塾長によりますと、福沢諭吉の設立した慶應義塾はイギリスのパブリック・スクールを模倣して作られたということです。2年前の2012年から交換留学するようになり、イートンとSFCは交換留学をしています。

本学は、福沢諭吉の教え「慶應義塾は単に一所の学塾として自ら甘んずるを得ず、その目的は、わが日本国中における気品の泉源、智徳の模範をたらんことを期し、これを実際にして居家处世、立国の本旨を明らかにして、これを口にいうのみにあらず、躬行実践、もって全社会の先導者たらんことを欲するものなり」を実行すること、諭吉の精神を実践

することが命題です。

※居家 = 家庭をおさめてゆくこと。※処世 = 世間で暮らしを立ててゆくこと。※立国 = 国の独立をたもつこと。※本旨 = 本来の趣旨。※躬行 = 口で言う通りを、みずから実際に行うこと。

2) カリキュラム

旧カリの時は選択科目を多くしていました。高校3年生の時には学生の自主性を尊重し、学生が自主的に選択する方法を選んでいました。しかし、新カリでは自主性を重んじると生徒が「やすきに流れる」ことになり、「定食メニュー」に変更しました。基礎的学力をつける科目は、1、2年で必修にしましたが、特徴は、基幹となるコア科目として物理、化学、生物、地学、全教科を学ばせており、社会に関しても、医学部理工学部志望以外の生徒にたいしては、現代社会、世界史、日本史、地理全てを学ばせています。医学部理工学部志望者に対しては、必修科目を生徒に取らせないといけないため、社会が6単位では無理なので、数III、物理と化学を6単位で12単位とし、社会一科目で15単位としています。あとは必修です。旧カリのとき、理科4科目は必修ではなかったのですが、現在、全員理科4科目は必修です。

慶應大学・商学部では、高大連携大学生と一緒にコースを取ることが可能で、大学・理工学部連携での大学1年の数学にも高校生が取りに行くことが可能です。ここ数年、毎年22名の生徒が医学部に進学します。現在理工志望者が80名から90名いますが、理工学部に向かない生徒が行くと留年するので、必修科目を策定しました。救済措置はありません。理工学部では追試があるようですが、高校では原則ありません。自己責任なのだから、留年することになります。先導的人物になるためには、当然だと思っています。

私は数学を教えているのですが、独立自尊と自主管理・自己管理を旨としています。放校については、高校にはあります。授業や学校生活についてゆけない生徒は、進路変更してもらっています。本校は最長3年間延長できるのですが、最高5年生がいます。普通部と高校で一回ずつ留年し、20歳で3年生の生徒もおりました。慶應が好きな人はずっと残っているので、慶應を好きでない人は、あまり来てほしくないのです。慶應の設立趣旨を分らず来ている生徒は、本校は面倒見が悪いと言っていますので、学校説明会でも、「慶應だけ好きな人だけ来ていただきたい」と伝えるようにしています。

3) 入試

入試で特徴的なことは、面接を実施していることです。そこで受験生が本校に合うかどうかを見極め、教えたいと思われる子弟をいれることにしています。ハードルは幾つもあり、入試の成績が良くても落とされる場合もあります。ペーパー試験が主ではありますが、

その他の要素も重要だと考えています。例えば、中学校の成績も重要です。また、致命的な点が見つければ考慮します。欠席が多い生徒は考慮します。

面接委員は全教員で、一次で落とし、二次に行くのは780名となります。教員は約100名ですから、一人30人ほど受験生を担当することになります。2人面接と1人面接と2回実施し、決定するのです。

慶應に行きたい生徒が来るのが順当で、大学に進学して苦労しないような準備をする場所だと考えています。授業では例えば理科の授業の半分程度は、書くことが重要だと考えており、レポートを書かせています。一旦、本校に入学すると、慶應の雰囲気になっていきますね。内部から行く生徒はパイプが太いので、メリットも多いと言えます。

普通部も中等部も面接があります。ニューヨーク学院は、親御さんの母親か父親の片方も面接を行います。これは、寮生活が多く、入学後に退寮してもらうことも難しいからで、子供とは別々の面接です。子供は英語または日本語で面接を行います。

慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）は慶應義塾の一貫教育校の一つで、1990年に創立されました。ニューヨーク州より認可されたアメリカの高等学校として、ニューヨーク州の私立学校連盟（NYSAIS）にも加盟しています。また、日本国文部科学省から、「高等学校の課程を有する在外教育施設」として指定され、授業の約7割は英語で行われています。

受験のための説明会は、学校説明会だけで、昔はもっと多かったです。2000人程度が学校説明会に来、同じく2000人程度が本学を受験します。受験生が減ってきていますが、危機感は余り持っていません。

4) 本校の特徴

本校には理・工・医学部コースがありますが、経済、商学部への進学が多いでしょう。大学への推薦を受けることが出来ますし、全員が大学に進学します。理科コースには、医学部進学希望者が多く、成績優秀な子が多いです。成績優秀者が多いと、競争ですので、他の学校では上位であったとしても、本校では必然的に下位になる生徒も出てきます。すると、1年、2年、3年の傾斜した成績が大学進学の見込みとなるため、理科コースを希望する生徒は、本来医学部希望者が殆どなのですが、希望の学部へ行けなくなることがあります。成績等の順に好きな学部に進むわけです。ただ、生徒の中には大学への推薦を辞退し、他大学の医学部、歯学部、獣医学部を受験する者もおります。

一貫教育校の医学部希望者とは医学部で面談をしています。というのも、医者となるには人格も必要ですから。成績が良いだけでは問題で医者に向いているかどうかです。しかし、医学部に進学する生徒には体育会のメンバーも多く、リーダーシップを発揮できる生徒が育っているようです。

大学の各クラブの体育会を通して世話役(学生コーチ)が来て、高校生の面倒みってくれる伝統がある。同窓会の結びつきは強いですね。休みが比較的長く、受験勉強がないので、

体育会に入っている生徒が多く、75%は体育会に所属しています。所属しないと不安に思えるようです。今年は1年生の8割が体育会に所属しています。居場所がほしいのだと思います。

慶應大学に入学すると、非常に有利です。例えば、連合三田会で卒業生をいろいろな意味でバックアップしますし、実業界ともパイプが太く、実業界で活躍する人材を育成しています。経済学部では、一部上場の一般企業社長が多いと聞いています。

5) 教員

校長は、理事会というよりも「塾長と一貫教育校担当理事」が決めて、大学の教授になります。我々主事については、校長が決めることになっており、学務担当の私(赤井先生)、生徒生活担当、特別教育担当と3名主事がいます。主事は校長が任命。在職期間、原則4年で1年任期となっており、4年以降は2年ずつ更新することになっています。校長は、任期が自由です。本校の教員は150名程度で、部会が公募を出し、教員を集めています。教員の資格としては、中高の免許が不可欠で、教員向けのOJTはありません。教員は各自独立しており、自分の授業は先輩教員の助言等で自分の責任で実施しています。

国内外の留学として1年間勉強することも可能です。また、大学院あるいは研究所での研究、大学に行って免許取得や、国外では例外的に修士が取れる可能性があり、相応の理由があれば、延長手続きを取ればさらに半年延長も可能です。他に、海外短期留学制度があります。申請書を出せば順番に行けることになっています。ひと月に一度、一貫教育校の校長と主事、理事と塾長が集まる会合があるので、そこで調整し、決定しています。しかしながら、修士号を取りに行く教員は、あまりいないようですが。というのも、学校業務が忙しくなかなかな行けません。行きづらいといえますか。

6) 学校での生活

生徒会は、運動会や球技大会を主催し、教員は補佐役に徹し、自主的にやらせるようにしています。補習授業は余りしていません。分からなければ、自ら先生に直接聞きに来ます。試験前に自主的に補習授業をする教員はいますが、若干名です。偏差値74で入学してきた生徒なのだから、教科書を読めばわかるはずですが、成績が良くないとすれば、やらないだけでしょう。自分で苦労しないと道は開けません。生徒に危機感をいかにもたせるかが重要だと考えています。また、私自身は、生徒を大人として扱い、生徒と距離を置かないと駄目だと考えています。生徒が教師に甘えないようにしています。こまっちゃくれたしっかりした生徒も多いですが、全体的に幼くなってきているようです。十分な選択肢があるのだから、独自で学ぶべきでしょう。

しかし、高校3年となるとしっかりしてきます。また、社会人となるとさらにしっかりする。成人した元生徒が、クラブに来るとその成長がよくわかります。生徒は、素質があ

るので、目的意識を持てば大丈夫で、ぐっとよくなるのです。やはり慶應は経済がメインと言われており、生徒は経済学部に行きたがるようです。最近、法学部も人気が高いですね。

7) 生徒の気質

ほとんどの生徒はクラブ活動で汗を流し自己管理ができ、人付き合いができ真面目で優秀です。残念なことですが、生徒の中には、謙虚さがなく、頭がいいと勘違いし、天狗になっている生徒もいます。電車でのマナーが悪いと苦情の電話がたまにあります。集団になると校内と同じ感覚で場所をわきまえないようです。

メンタルに不安な生徒がおり、その対応が大変です。カウンセラーが3人と校医がおり、カウンセラーと担任が対応しています。カウンセラーが3名いる点、恵まれています。

2. 5 甲陽学院中学校・高等学校

(1) 基礎情報

【甲陽学院高等学校】	
創立年	1917 (大正 6) 年 1920 (大正 9) 年 3 月に、故辰馬吉左衛門氏によって創設された「財団法人辰馬学院甲陽中学校」に始まるが、その淵源は更に 1917 (大正 6) 年 2 月、甲子園に設立された故伊賀駒吉郎氏の「私立甲陽中学」にまで遡る
学校形態	私立 中高六年間の一貫教育
男女比	男子校
学費	授業料第 1 期 1・2 年生 213,750 円 3 年生 184,050 円 授業料第 2 期 1・2 年生 180,250 円 3 年生 150,550 円 授業料第 3 期 1・2 年生 180,250 円 3 年生 150,550 円 授業料第 4 期 1・2 年生 180,250 円 3 年生 145,550 円
生徒数	一学年 200 名

【甲陽学院高等学校】教育方針
教育方針： 「気品高く教養豊かな有為の人材の育成」
校風： 「明朗・潑瀨・無邪気」
設立趣旨： 『古人曰く、一年の計は穀を植うるにあり、十年の計は樹を植うるにあり、百年の計は人を植うるにありと。天下の英才を教育して、各其の天稟を發揮せしめ、光彩陸離百花爛漫の偉観を現出する』

は、畜に国家百年の大計たるのみならず、人生の快事之れより大なるは無かる可し』

【甲陽学院高等学校】入試方法

- 中学校 国語200点 算数200点 理科100点
- 高等学校 募集なし

【甲陽学院高等学校】課外活動

- 運動部11・文化部10
- 剣道部 柔道部 サッカー部 水泳部 卓球部 テニス部 バasketボール部 バレーボール部
ハンドボール部 野球部 陸上部 アンサンブル部 グリー部 化学部 写真部 将棋部 生物部
地歴部 美術部 物理部 文芸部

【甲陽学院高等学校】その他の活動

4月 創立記念音楽会 5月 体育祭 9月 音楽と展覧の会(通称:音展) 2月 耐寒登山

【甲陽学院高等学校】卒業後の進路

- 2015年度の主な大学合格者数は、東京大学28 (20) 名、京都大学67 (47) 名、慶応義塾大学30 (2) 名、早稲田大学18 (3) 名 (括弧内は、現役合格者数)

（2）石井教務主任と杉山進学資料室長の話

1) 教育方針

「気品高く教養豊かな有為の人材の育成」を謳っています。それでは、そのために何かやっているのかというと何も意識的に実質的なことはやっておらず、道徳的な指導も特別なことはしていません。ただ、何か問題が起こりますと、例えば登下校の際に苦情があれば生徒指導をし、「甲陽学院」を背負って社会に出ていくのだから、気品をもって過ごしてください、しっかり意識して過ごしてください、と伝えています。生徒の中から「気品高く教養豊かな有為の人材の育成」という意識が出てくるように、誘発されるように、講話しています。

中学生は制服もあるのですが、高校は中学と場所もかわり、校則もありません。しかし、隠れた (hidden) カリキュラムが、伝統の中で培われたものがあると考えています。(つまり、一人一人が責任を持って、甲陽学院の姿勢を社会に示す必要も出てくる。)

甲陽の生徒は、立ち居振る舞いを下級生が見ていて学び、わきまえることによって、甲陽生として恥ずかしくないように振る舞うようになるといった良い伝統が脈脈と続いていると思っています。教員側からの押しつけではなく、生徒自身が伝統の重みを感じているのでしょう。甲陽中学での厳しい校則、生活習慣が、高校では解放され、校則もないので、

法律に違反しないかぎりの自由が生徒に与えられています。髪の毛を染めても OK です。生徒にはしっかりと自由を与えていますが、生徒も生徒でしっかりと自分で考えます。例えば、本日の終業式にも 600 人の生徒が講堂に集まったのですが、30 秒待てば静かになる彼らは立派だと思います。だからこそ、やりたいことはできるだけ生徒にさせてやろうと考えるのです。外見など関係ありません。自由でいいのです。

ただ、以前に比べれば生徒は喧嘩をしなくなりました。たばこも吸いませんし、覇気がなくなっているというか、食って掛かる生徒もいなくなってきました。逆に、母親と仲良しの生徒が多く、保護者の影響力が増大してきています。進路も保護者と一緒に考えるようです。「母がそう言うので・・・」と述べる生徒が多く、親の意向をそのまま受け入れているようです。

2) カリキュラム

基本的に学校で決定したカリキュラムに関しては、「いじらない」ことにしています。つまり、学習指導要領が変更されたあとも必要最小限の変更にとどめ、5 日制が導入された時も土曜日は半ドン（半日）で授業を実施することを決めました。毎日 6 限で終了し、ロングホームルーム（LHR）だけは、火曜日 7 限目にありますが、週に一日だけで、月から金までの 30 時間と、土曜日 4 限プラス LHR となっており、35 単位の 35 時間が守られています。柔道と剣道はどちらか必ずとらなくてはならず、中学では柔道が必修で、高校では家庭科の実習もしています。

日本人はプレゼンが下手だと言われていましたし、発信能力を高める取り組みも必要になってくると思いますが、今のところ学校としての取り組みは特に行っていません。控えめな中に、相手、他人を思いやれる人にもなってほしいと思っています。また、甲陽の生徒は、リーダーシップを取る立場になれば自然にリーダーシップをとれる素質を持っていると考えています。

3) 進学資料室

狭い意味での「進路指導」はしません。生徒本人が進みたい進路、受験したい大学に関して相談があればアドバイスをしますし、また必要な資料を整えることもしますが、反対したり志望を変えさせたりするようなことはありません。

ほぼ全員が国公立志望です。特定の大学や学部を勧めるようなことは一切していません。生徒のために学校があるのであって、学校のために生徒がいるわけではありませんから。生徒一人ひとりが心から学びたいと思う大学に入れるように、最大限のサポートをしたいと思っています。

近年近畿圏の医学部志向が非常に強くなりました。医師の子弟も少なくないですがそれだけではなく、理系の上位層も文系の上位層も、成績が優秀だったら文系よりも医学部に

進学しようという風潮があります。その結果文系が激減しており、文系 40 名弱しかいないのに、その人数の約 2 倍近くが医学部を志望しています。以前は 1 学年に 60～70 名くらいは文系志望がいたのですが、現在は 40 名を切るほどの人数になってきています。ここ数年は医学部志望が 70 名程度で、理系が 160 名程度です。私たちは医学部志望が増えるのは良いこととは考えていません。是非文系にも進んでほしい。理系でも基礎科学系や工学部へも行ってほしい。しかし最近の生徒や保護者は安定志向・資格志向が強いので、医学部を目指す生徒が多いようです。

特にリーマンショックのあとですが、関西圏に多い電機メーカーのような一般企業は将来どうなるかわからないというイメージが定着しており、ビジネスマンになるのが不安という生徒が多いようです。ソニーやシャープが大きく後退し、終身雇用が崩れた現在、親御さんが特にそう考えており、父親が文系学部出身の場合でも、子供に理系を勧めているのです。

以前から東京大学や京都大学を志望する者が多いですが、最近はその一部が医学部志望に流れ、京大や阪大の医学部が一番人気で、近畿圏を中心に日本全国の医学部を受験しています。そういう面では、地元志向が強いのですが。

今年（2014 年度）は国公立大学の医学部医学科に多数入学しました。現役で 36 名入学しており、京都、大阪、神戸、奈良県立医大、大阪市立大学といった地元の大学進学者が 32 名です。家から通うほうが楽だ、ということでしょう。親の意見を素直に受け入れ、下宿する者も減少している状態です。ちなみに、2015 年度は国公立大学の医学部医学科に現役で合格した生徒が 45 名おりました。既卒生も含めると 67 名です。卒業生 195 名に対して 45 名というのは全国トップの結果でした。

ただ他校と違って、東大見学や京大の先生を呼んで話をしてもらうようなことは、甲陽はしていません。東大、京大への進学者を増やそうとはしていないのです。また、医学部志望でも無理だからやめろ、とか、向いてないよとか言わない。浪人しても、1 年頑張れば、ポテンシャルが高いので、受かることもあるので。最初からあきらめるようなことは言いません。

4) 生徒

生徒の中で修学旅行委員、体育祭実行委員といった委員を決め、その委員が中心となって企画・実施していきます。高校は、約 50 人が一クラスで、4 クラスあります。中学は一クラス 40 人です。行事ごとに委員を募り、一年前からリーダーを中心に準備していきます。立候補なり推薦なりで委員を決めていくのですが、こいつがやるだろう、あるいは体育祭ならこの子、といった感じで選ばれていきます。

高校 2 年から文理選択をしますが、クラス編成は混合にしています。1 学年が 200 人ほどですから、お互いのことをよく知っており、卒業後も関係がずっと続いていくようです。

6年間一緒なので、繋がりも自然に強くなります。小競り合いはあるし、変わった子や不思議な子もいますが、彼はそういうやつだから放っておこう、といった大人の対応を生徒はしています。いじったりしないのです。学校の中にそれぞれの生徒にはそれぞれの居場所があるのです。居場所があるので、それらの個性が残り、生きてくる。生徒たちは、必要以上に干渉し合いません。色々な子がいる。それが大事なことかと思っています。

原則として英・数・国の3教科の担当者が6年間持ち上がりますが、中学が5クラスで、高校は4クラスとなるため、担任が1名減ることになります。高校から新しい担任が学年に入ることもあります。担任団の先生と合わない生徒には気分を変えるきっかけになります。クラス替えもかなり神経を使ってやっています。生徒間でうまくいかなかった生徒は離れたり、一人で難しい生徒にはこの子をつけてやろうとか、一人一人の生徒を十分に知っているのでもうまくやれるのです。教員同士でも助言をしながら、組替えを実施しています。

本校は、もともとかつての神戸一中（現在の神戸高校）の滑り止めの学校だったため、アンチ公立、かつ、公立との差別化を図ろうとした結果、リベラルな雰囲気が受け継がれているように思います。関西学院中学との「甲関戦」（中学の運動部が毎年行っている交歓競技会のこと）は、60年以上続いています。関西学院は大学があって入試がないので、クラブに時間が割けますから、ファミリー的な学校のように思われます。生徒たちも6年たつと、しっかりとし、クラスをまとめ、下級生の面倒をみてやり、大人になります。さすが3年生と思うことが度々です。

中学校と高校で立地を離れていることは、経営面では重複分のコストがかかりますが、メリハリをつけることができます。中三と高三でリーダー、つまり最高学年を2回経験できるのです。上級生に従う役割から指導する役割へと変化し、両方の役割を経験します。

普通は同じ場所に建っているものですが、これまで中学と高校が同じ場所にあったことはなく、場所が離れていることが心理的にも有利となり、独立性を保つことができます。教員もふだんは別々で独立しており、兼務している教員は数名のみです。同じ教科でも別々に研究室を備えているわけですから、贅沢といえるでしょう。クラブ活動は一緒にすることも時々ありますが、普段は別々に活動しています。

5) 6年間を通じてどのような甲陽生を育てるのか

杉山：「個人の自立を促す」ということでしょうか。一人で生きていくための準備、自分で考え、自分で行動できる大人になるための準備ということを中心に心がけています。「指示待ち人間」にならないように、自分のアタマで考え、自分で解決できる人間になってほしい。のびのび過ごしてほしい。我々教師は「愛校心」というようなことを口にしますが、生徒の母校に対する思い入れは強いようです。とにかく、言い過ぎないことが大切だと思います。

石井：生徒達が互いに刺激し合いながら助け合う。ライバルでありながら共に頑張ろうとする精神は大切。我々教員のスタンスは先回りをしない。目は離さないが手はかけない。彼らの中にあるものを刺激して、彼らの中から生まれてくるものを待つ、それが本物なのだから、辛抱しながら待つ。だから彼らには自分の内なるものに目を向けて、それと外のものとのバランスがとれるようになって欲しい。卒業してから、その内なるものを育てて、自分なりのよりどころとなる芯を身につけて欲しい。何かを決めなければならないときに、それをもとに考えられるようなものです。

6) 母校として

変わらないこと、変わらず、ずっと同じでいられることが重要だと考えています。時代とは競わないで敢えて何もしないことも必要です。それがまた伝統であり、伝統に繋がっていく。同じ雰囲気をもった懐かしい場所であり続けたい。「なんや昔と変わらないやないか。」その言葉がうれしい。まさに母“港”のような存在。旅立ったあと、悩んだり傷ついたり、立ち直れなくなった時に帰ってくるのできる場所、エネルギーがもらえる場所でありたいと願っています。

7) 対談を終えて

まず、設立の趣旨である『古人曰く、一年の計は穀を植うるにあり、十年の計は樹を植うるにあり、百年の計は人を植うるにありと』という文言に感銘を受ける。この言は、中国の管子の言葉「一年の計は穀を樹うるに如くは莫く、十年の計は木を樹うるに如くは莫く、終身の計は人を樹うるに如くは莫し。一樹一穫なる者は穀なり、一樹十穫なる者は木なり、一樹百穫なる者は人なり」に由来する。甲陽の設立者は、西宮酒造家 10 代目の辰馬吉左衛門の資本により創設された学校であるが、手間暇かけずして銘酒が生まれぬ様に、長い時間をかけなければ豊かな人間は育っていかないことを熟知している。もちろん、豊かな人間とは金銭的に豊かという意味ではなく、心の豊かさのことで、正直に生き、「是非」を勇気を持って述べ、相手を恐れず、人の言葉に耳を傾けながらも信念を持ち、強きを挫き、弱きを助けられるような人間である。この様な人間であることこそ、人間であることの醍醐味でもあろう。また、この人格の陶冶や他者の自由を尊重する姿勢は、イギリスのパブリック・スクールの姿勢に通ずるものである。ただ、幼い頃から受験勉強や、起業家精神を学ばせようとしている日本の教育の中で、どれだけの日本人がその姿勢を理解するのであろうか。

甲陽では基本的に生徒の自主性を重んじており、灘と同様に校則も制服もない。ゆとり教育の折の指導要領改正に対しても、政府の教育政策に左右されず、動じない態度を取った学校であり、教員も生徒を上から押さえつけるのではなく、物事の本質や物事の良し悪しを、自ら見極める力を育てようと最大限の努力をしている。例えば、生徒たちの悩む姿

に、先生方は思わず手を伸ばそうとしたが、無理やりその気持ちを押し止めたという。生徒たちの成長を望み、あくまでも生徒自らの力や考えで、道を切り拓くことを期待するのである。自ら掴み取らなければ、自分のものにはならないからだ。

また、生徒間の「小競り合いはあるし、変わった子や不思議な子もいますが、彼はそういうやつだから放っておこう、といった大人の対応を生徒はしています。いじったりしないのです。学校の中にそれぞれの生徒にはそれぞれの居場所があるのです。居場所があるので、それらの個性が残り、生きてくる。色々な子がいる。それが大事なことかと思っています」といった姿勢も、パブリック・スクールの生徒の姿勢や教師の考え方と同じで、生徒たちは、必要以上に干渉しあわず、互いの人格を認めあう中で、生涯にわたる友情も芽生える。

イトン・カレッジを念頭にアカデミックな雰囲気のある学校を目指し創設されたと聞く。大学を作ること考えた時代もあったようだが、全国の大学に良い人材を入れることを優先したということであった。

2. 6 東京都立戸山高等学校⁵

(1) 学校概要

東京都新宿区に校舎を持つ公立高校である。以前は、全日制課程・定時制課程の両者が設置されていたが、定時制課程は2004年に募集を停止、2007年度をもって廃止され、現在は全日制普通科の課程のみを擁する。この学校の起源は、1888年創設の旧補充中学校であり、共立中学校、東京府城北中学校、府立第四中学校等を経て、1948年に新制度の下で都立第四高等学校となり、1950年に都立戸山高等学校と改称された。新制高等学校への移行から間もない1949年より、一貫して男女共学である。都立日比谷高等学校や小石川高等学校（現：小石川中等教育学校）と並ぶ、いわゆる東京都の「ナンバースクール」の1つとして、東京大学をはじめ、難関大学入学者を輩出してきた。2001年度より東京都進学指導重点校、2004年度よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH、2015年現在、3期目・指定期間は2019年度まで）の指定を受けている。

(2) ミッション・教育方針

「国際社会に貢献するトップリーダーの育成」をミッションとして掲げている。広い教養と深い専門性に支えられた総合力を重視し、公立進学校では珍しく、文系・理系を分けないクラス編成を実施している。学校案内では、「自己学習力」、「総合力の育成」、「理数重視」の3点が教育理念として掲げられている⁶。学校の方針として、文系・理系に偏らない総合的な教養を身に付けることを求め、文理を問わず難関大学合格者を輩出しているが、「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受けていることも相まって、「突出した理系

人材の育成」にも力を入れている。これは、理系科目における受験指導の強化を意味するのではなく、理数系研究者による講演会、SSH クラスにおける課題研究等を実施し、理数系分野を牽引するトップリーダーとなる人材の育成を目指すものである。

(3) 入学者選考の特徴⁷

進学指導重点校として、高いレベルの授業が展開されているため、これに対応できるよう中学校段階までの学習内容を十分に理解していることが求められる。入学試験は、他の都立高校と同様の枠組の中で行われる⁸。ただし、推薦入試における小論文と一般入試の英語、数学、国語は独自に作成した試験問題を使用している⁹。2013 年度からは、都内の進学指導重点校 7 校によるグループ作成となり、これらの学校の入試において、平均点が 60 点前後になることを目指して作られている。この方式を導入する以前は、特に数学の試験の難易度が高いという特徴があったが、現在、この特徴は弱まっている。

(4) 教育課程・学習指導の特徴

難関国立大学受験に必要とされる数の科目（主として 5 教科 7 科目または 8 科目）をカバーしながら、2 年次までに教科書の内容を一通り終えるため、進度も速い。

先述の通り、「自己学習力」を教育理念の 1 つとして掲げ、教室で授業を聞くだけではなく、自ら学習する姿勢を生徒に求めている。理念上の問題にとどまらず、難関大学に合格できる学力を身に付けられるように高度な内容の授業を理解するためには、予習・復習を中心とする自主学習が不可欠である。実際に、生徒が自主的に教員に質問したり、演習問題の添削を求めたりすることは多い。また、生徒の自主学習用のプリントが教科ごとに用意されており、この活用率も高い。さらに、長期休業期間中の講習も充実しており、教科書を進めるのではなく、各生徒の必要性に応じた自主学習の機会となっている。特に、夏期講習では、各学年向けの多様な講座が開講される。早めに内容を提示して、生徒が自分に必要な講座を選択できるようにするとともに、生徒の要望を講習に反映させることを可能にしている。

教育理念の 1 つである「総合力の育成」のため、学習指導要領上の必修単位数を越えて、全ての生徒が地理歴史科（世界史、日本史、地理）と公民科（政治経済、倫理）、理科（物理、化学、生物、地学）の全科目を学習し¹⁰、実質的に文系・理系を区別しない教育課程がとられている。一部の保護者から、各生徒の志望大学の入試で必要とされる科目を集中的に勉強できるように、早い時期に文理を分けるべきだとの意見もあるが、学校の見解としては、「国際社会に貢献するトップリーダーの育成」というミッションに鑑みて、幅広い知識を身に付けることは、大学入試の先まで見据えた生徒の将来にとって有益である。さらに、試験科目数の少ない私立大学等を受験する生徒に対しても、試験で使用しない科目を中途放棄しないよう勧めている。大学入試の主要科目である英語と数学では、習熟度別

クラスでの学習が実施されているが、上位層の学力を高めるだけでなく、全生徒が授業についていけるよう適宜補習も実施している。

進学指導重点校に指定されているため、力量のある教員が集まりやすい条件下にはあり、この学校の教員には、特に教科指導上の能力が求められる。すなわち、生徒が理解しやすい授業を提供するとどまらず、難関大学受験に向けたレベルの向上が求められる。生徒による授業評価や教員相互の授業参観等、教師の資質向上や授業の改善のための方策も導入されている。同一学年の同一科目を複数の教員が分担して担当する場合、授業内容や進度を揃えるようにし、定期試験は共通の問題で実施される。

(5) 進路指導の特徴

卒業生の進路は、やや理系学部が多い傾向にある（6割程度）。進路指導は、1学年の1学期に開始され、3年間を通して、各段階に応じたきめ細かな指導が行われる¹¹。学年によって進路指導の方向性が大きく異なることを避けるため、進路指導部が中心となって、進路指導部と学年との連携が重視されており、学年にも進路指導担当教員が配置されている。進路指導関係のガイダンスや講演会の開催、大学が実施するオープンキャンパスへの参加に加えて、本校卒業生の大学教員の協力を得て、生徒が大学の授業を見学する機会を設ける等、独自の取り組みを行っている。

(6) 授業外活動

これまで述べた通り、卒業後の進路に向けた勉学が学校生活の中心を占めるが、学校行事や部活動も盛んである。伝統的な行事では、主に運動部が、同じく伝統ある都立名門校である新宿高等学校と対抗試合を行う「戸山・新宿戦」が毎年6月に開催され、60年近い歴史を有する。9月には、文化祭に相当する「戸山祭」が行われ、社会問題や学校生活を扱う展示、生徒が自ら脚本・演出を手掛ける演劇や映画の上映が行われる。学校行事の中には、教科指導や進路指導の一環として行われるものも多く、例えば、地学学習の一部として行われる城ヶ島巡検や1年生を対象としたホームルーム合宿が特徴的である。

部活動も盛んであり、2015年現在、運動系18部、文科系15部、特別系2部（放送部・新聞部）が活動中である¹²。部活動への加入率も高く、兼部も含めると114%にもものぼる。学校の方針として、勉学と両立して部活動や学校行事にも意欲的に取り組み、リーダーとしての資質を生徒に身に付けさせることを目指している。ただし、放課後の自主学習時間を確保し、学業との両立を図るため、部活動の終了時刻が決められ、延長が制限されていたり、課題研究に時間を割かなければならないSSHクラスでは、集団競技・音楽等の部活動との両立が難しいことが周知されたりする等の対応がなされている。

学校行事、部活動に加えて、生徒会活動も盛んである¹³。モンテスキューの提唱した三権分立の仕組みを生徒会にも導入していることが特徴的である。全生徒が参加する「生徒

大会」の下に、国家における立法府に相当する「評議会」、行政府に相当する「執行委員会」、立法府に相当する「監査委員会」が置かれ、権力の分散が図られている。さらに、生徒が校内の各団体・クラブに対する「不服申立て」を行い、これを監査委員会が調査・審議する仕組みが用意されている。

(7) 考察：難関大学入学の先を見据えた進路指導

冒頭で述べた通り、本校は「進学指導重点校」として、教科指導・進路指導を教育活動の中心に置いているが、特筆すべき点として、難関大学合格という眼前の目標だけを見るのではなく、その先にある生徒の長い人生の中に大学入試を位置付けて、指導を行っていることを指摘できる。入学試験科目が多い難関国立大学合格者を増加させるという目標を考慮しても、文系・理系に分けることなく、学習指導要領上は選択必修とすることが可能な地理・歴史3科目、公民2科目、理科4科目の全てを履修させることは、大学受験という目的にとって、一見して効率が悪いように見える。つまり、学習指導要領に準拠するだけでなく、学習指導要領が要求する以上の科目数を生徒に履修させていることになる。しかしながら、学校のミッションや教育理念に掲げられている通り、この学校が提供する教育の真の目的は、大学入試合格そのものではなく、大学に入学しさらに卒業して社会に出た後に、生徒が各分野のトップリーダーとして活躍することにある。その意味で、大学でいかなる分野を学ぶ生徒に対しても、文系・理系双方を含む幅広い教養を身に付ける機会を提供しているといえる。

学校行事・生徒会活動では、学業や進路指導と密接な関係にあるイベントも多いが、概して生徒が中心になって運営しており、生徒にとって、自ら課題を設定・解決する機会となっている。全国的にも珍しい三権分立型の生徒会は、この学校の生徒の自主性を象徴しているといえよう。本校は、全日制普通科の公立学校で、難関大学の入試という制約の下で、受験・進路指導とより広い意味での「リーダーシップ」の育成を両立的に実現している事例として位置付けることができる。

【注】ウェブサイトの最終アクセス日は、いずれも2015年11月19日。

2. 7 灘中学校・灘高等学校

(1) 基礎情報

【灘高校】	
創立年	昭和2（1927）年10月24日、灘五郷の酒造家両嘉納家及び山邑家の篤志を受けて旧制灘中学校として創立。創立時の顧問・嘉納治五郎が唱道した「精力善用・自他共栄」が校是。

学校形態	中高六年間の一貫教育（高校からの入学可）
男女比	男子校
学費	入学手続時：入学金 250,000円 施設費 250,000円 授業料等：420,000円（中） 432,000円（高） 学校維持協力金・冷暖房費・生徒会費等：約169,800円（年額）
学生数	一学年 約 220 名（うち高校からの入学 約 40 名）

【灘高校】教育目標・校風

「自分の価値観、信念」のもと、「物事を判断し行動できる知」と、「勤労を喜び、他者と共に生きる共生の心」とそれを支える「強靱な体」の、「知・徳・体」を備え、豊かな教養に裏付けられた品性を持つ、健全な社会人に育てて欲しい。

創立以来自由で伸び伸びした校風です。勉強でも学校生活でも、強制はせず規則は最小限にとどめ、生徒が自分で判断して行動することを尊重しています。自由な分、生徒には自ら求めていく自主性と、自分の行動に責任を持つ自律性が求められます。

【灘高校】カリキュラム

- 入学とともに、各教科の担任 7～8 人が担任団を組み、卒業まで学年を持ち上がる、六年間を見通したカリキュラム
- 授業の進度は速く、中三で高一の教育内容を終え、高二で高校の教育内容を終了するが、単に速いだけでなく、従来の課程を復習しつつ進むらせん的な学習や、考える力を養う幾何の学習、理科での実験重視など、学びの深さを重視
- 六年間の担任持ち上がり制の優れた点は、こうした教科内容の側面だけでなく、中学から持つことにより、生徒を熟知して、勉学・生活すべての点で、一人一人の個性に合わせたきめ細かい指導が可能となり、さらに、7～8人で一人の生徒をみていく多面的な指導を行う

【灘高校】課外活動

- 生徒会、各部の活動は近年ますます活発化
- 40近い文化・体育各部に 8 割を超える多くの生徒が参加
- 全国大会五連覇の偉業を成し遂げた囲碁部はじめ、生徒たち自身の手によって活発な活動を展開

陸上競技部 水泳部 硬式テニス部 ソフトテニス部 野球部 サッカー部
ラグビー部 バasketボール部 バレーボール部 バドミントン部 柔道部
剣道部 卓球部 ワンダーフォーゲル部 ブラスバンド部 生物研究部 化学研究部 物理研究部 数学研究部 地学研究部 E.S.S. 地歴研究部 鉄道研究部 アマチュア無線研究部 囲碁部 将棋部 パソコン研究部 クラシック研究部 グリー部 ソフトボール同好会 書道同好会 クイズ同好会 マジカル同好会 文藝同好会 少林寺拳法同好会 社会科学部同好会 写真同好会

【灘高校】卒業後の進路¹⁴

- 平成27年度の大学進学先は、東京大学94名、京都大学36名、大阪大学14名、慶應義塾大学17名、早稲田大学34名、など（卒業生は219名）

(2) 和田孫博校長との対談

1) 中学入試

入試問題ですが、小学校でふつうに学んでいては解けない問題だと批判されることが度々あるのですが、小学校で習ったことを応用する力があれば解ける問題です。入試は2日に分けて実施しています。それぞれの科目で気をつけていることは、一つの能力、つまり正確さや計算が早いといった面だけではなく、多面的に能力がみられる試験にしています。問題を読んで、考える力、推論力・推理力を確認し、正解が出せなくても、日本語で説明できているかどうかをチェックします。

二日間の入試ですが、算数の1日目は解答のみを求める問題で、短時間で沢山解いてもらう問題です。というのも、正確さも必要だからですが、2日目は問題数を減らし、どういう過程で答に至ったのかを記述してもらいます。

国語の入試の1日目は、言葉にまつわる問題です。慣用句、言葉の知識、外来語、俳句、知識を重んじるテストで、この問題で国語的素養があるかどうか分かるように作られています。2日目は、かなり長文の読解問題で、読み解いてもらう問題です。最後に毎年詩を出します。詩の問題を出しているのは、灘くらいかな？詩を鑑賞する問題で、筆者に感情移入できるかどうか重要です。

理科は普段から身のまわりの自然現象や科学ニュースに関心を持っていること。また、一見して見たことがないような問題でも考えればわかるように工夫して出題しているので、問題文をよく読んでその場でしっかり考える習慣をつけておくことが大切です。

どのテストを取ってみてもですが、多面的に能力を測るようにしています。単に知識の詰め込みで解けるものではありません。学校に入ってから管理教育ではなく—管理教育はその子のためにはならないと思っているので—自主性を重んじているので、知識の詰め込みが勉強だと思いついて入っている生徒が伸びにくくなっている傾向があるようです。知的好奇心に動かされて灘に入ってきた生徒が灘では伸びていく生徒ですね。

2) 教育 — 担任持ち上がり制による6ヶ年完全一貫教育

学校や校長、理事会は、先生の授業方法には一切口出しせず、各先生に合った教育方法を実践してもらっています。

担当教員ですが、基本的に中学1年のときに、英・数・国・理・社・芸術・体育の各教科からの7～8人でチームを作り、高校3年まで、生活指導も含めて生徒の面倒を見る体制を作っています。ベテランから若い先生までバランスよく配置されているので、教科内で鍛えられるというよりは、学年で鍛えられるとあってよいでしょう。一回り、つまり6年間共に指導していく中で若手教員は多くの事を覚えていってもらふことになります。また、学年持ち上がり制なので、一人一人の生徒の変化に気づきやすく、対応が早くできることにもなるのです。職員室の席も、持ち上がりのチームが一緒に、教科毎に分けられてはいません。そのため、「あの生徒、今日調子が悪そうだったが、次の授業の先生、気を付けてくださいね」と連絡することができます。「担任持ち上がり制」が非常にうまく機能していると考えています。

まだ子供気分が抜けきれていない段階で、初めて担当教師に出会い、多感な時期と一緒に過ごすうちに教員とのつながりも強くなり、そしてその中で生徒は成長して送り出されるのです。

3) カリキュラム・ポリシー

中高一貫の強みを活かし、これは中学校で学ぶもの、これは高校で学ぶものといった区別をしないで6年間を一つの中等教育と捉え、教育を行う、このことが一番のポリシーです。これは、中学校で学ぶことを早く終わらせ、高校の内容を先取りするというのではなく、中学校でやっていることから高校へ繋がっている内容もあるので、例えば、化学の実験を例にとりますと、中学校と高等学校で教えることを分けずに、実験を目の当たりに観察してから、原理を教え、理論を説明し、中学校では普通教えない化学式も教える。つまり、実験と理論をつなげて教え、一連の流れの中で全体像を掴むようにしてもらっています。化学式を分かったうえで、理屈を分かったうえで、実験をする。実験は手品ではないのです。結果的には、6年間でその科目が完了できればよいと考えています。

国語に関しても、古文や漢文ですが、最初は有名な歌を訳をわからないまま暗唱させる。中学校低学年の間は声を揃えて皆で暗唱します。高学年になると次第に恥ずかしくて言えなくなってくるので、高校で実施することでも、中学におろしていくのです。

一つの教科を教えるにも様々な方法があるので、それぞれの先生が独自の教育方法によって教えてもらうことを奨励しています。教科書は検定教科書を使用するのですが、副教材の選択は担当の先生が各学年に対して決めていき、自らの教育方法を実践していく中で教員もまた鍛えられていくようです。

4) 進路指導

灘校（高等学校）では進路「指導」は実施していません。進路の「指導」ではなく、生徒が希望する進路を最大限支援するだけです。昨今、医学部進学希望者が多数となってきた

ていますが、臨床医は基本的に接客業であることを知ってもらいたいと思っています。難関ということで医学部を目指してしまうようですが、医学部は医者になる場所なのだから、自分の適性、特に医者はその適性が必要な職業ですので、その適性を十分に考えるように生徒に教えています。全国ランキングは一応意識していますが、今年の卒業生はどうなんだろう、と一喜一憂することはありません。

6月及び10月の土曜日3日間は、特別授業や総合的学習の一環として「土曜講座」を開催しており、OBをはじめとする外部講師を招聘し、特別講義や通常の授業では教えられない授業を実施しています。勉強に直接関係するものだけではなく、盆栽（音楽の教員が習っている師匠をつれてくる、結構人気がある）、茶道（家元）、田植えもあります。学年の枠を取り払っており、中1と高3はありませんが、中2+中3と高1+高2が一つの括りとして講座を受けています。講座の内容によっては中学校だけのものもあります。また、将来の生徒の進路にかかわらず、文系・理系両方の素養を身につける方が生徒のためによいと考え、もともと理系の強い生徒が集まっている学校なので、文系的講座もたくさん用意しています。

5) 大学入試

灘校の生徒は、難関校をわざわざ選んでチャレンジすることに面白味を感じるようです。挑戦意欲が高く、難易度が上がると逆に、その難易度に惹かれ、また、挑戦しようとする傾向があるように思います。また、東大、医学部、有名旧帝大を目指す傾向が強く、2013年度の東大理IIIの進学者は多かった。基本的に進路指導はしないので、本人と家族の希望で選んでもらっていますが、世の中と同じく医学部は人気です。考えられる理由としては、職業を意識できにくい時代となってきたため、白衣を着ている自分が想像できる医学部が将来の職業として選び易いのではないのでしょうか。ただ、医者という職を選んだ生徒も、金銭というよりはむしろ人助けをしたいという純粋な気持ちから受験しているのが救いです。

テストに関しては、各人の自主性に任せています。高2までは学校の定期テストが唯一の評価基準です。生徒が勝手に学外テストを受けに行くことは自由ですし、塾に行くのも自由ですが、学年全員での模擬試験は高2の夏から受けさせます。定期試験の成績ですが、分布表くらいは公表しますが、順位などは公表しません。勉強面からみれば目立たない生徒だとしても、友達やクラブでの仲間づくりをして、自ら成長し、「何かを持って」卒業してくれているのが嬉しいです。

夏休みも、指名補習はあるが全員とする補習はありません。せつかくの長期休暇なので、個人の個性を伸ばす時間に充てるように奨励しています。つまり、自主性を伸ばす時間で、休暇期間をどのように使うかが個人にかかってくるのです。

6) スポーツや行事

スポーツ（柔道、水泳、ラグビー、バスケット）も音楽も専門の指導者が教えることが基本で、剣道など、県警のトップが指導してくださっています。柔道は正課で、中1～高1の4年間学ぶことになり、胴着を持ち、上手くなくても受け身は一通りできるようになります。体育の授業は基本体力をつけることが主な目的です。

行事は生徒任せなのですが、すごいですよ！文化祭はそれの結実したもので、生徒会の文化委員長が100名を超える文化委員とともに企画運営します。科学研究部の科学マジックや鉄道研究部の鉄道模型など、見どころ満載です。灘の文化祭を見て、灘中を受けたい、灘中に行くと言ってくれるのです。また、高校学芸祭での演劇コンクールでは、生徒自身が監督、脚本、衣装作成をし、演劇を自作自演する。中学の合唱コンクールでは指揮や伴奏もクラスの生徒から出します。

個性豊かな生徒が多く、学業だけでなく、趣味の世界や情操の世界も豊かです。我々の

使命は、その個性をつぶさず、個性を尊重しながら、出来るかぎりその個性を伸ばせる環境作りを行うことです。

表1 地域別生徒数（平成26年度）

		中学	高校	計
兵 庫	神戸	104	136	240
	芦屋	26	22	48
	尼崎	13	9	22
	西宮	53	70	123
	宝塚	17	20	37
	川西	6	7	13
	明石	7	8	15
	伊丹	5	10	15
	三田	1	5	6
	加古川	3	3	6
	姫路	7	8	15
	その他	3	5	8
大 阪	大阪市	58	76	134
	大阪北部	67	70	137
	大阪東部	37	38	75
	大阪南部	34	38	72
そ の 他	奈良	27	31	58
	京都	33	48	81
	滋賀・和歌山	9	19	28
	他府県	41	38	79
計		551	661	1212

2-7) 寮生活

寮はありません。生徒の出身は西日本中心で、保護者の住所で分けたものが表1です。岡山や愛知から通学する生徒は、新幹線通っていますが、四国や九州の生徒は下宿しています。しかし、灘校専門の下宿があるので、学生マンション等に下宿する生徒は少ないですね。中には父親を実家に残し、母親と一緒にマンションで住むといった逆単身赴任型の家庭もあるようです。

7) 対談を終えて

校長室には灘校創立の祖である嘉納治五郎の書である柔道の極意が飾られており、その大きさに圧倒される。治五郎が柔道の本質として唱えた「精力善用」「自他共栄」が校是

で、これら校是に基づく灘の教育方針が以下の5つである。

1. 自他共栄の精神に徹した健全な社会人を育て上げる
2. 自主性を養い強固な信念を育てる
3. 質実剛健をモットーとし勤労をよるこぼ習慣を養う
4. 運動を奨励し強靱な体力と明朗闊達なスポーツマンシップを育成する
5. 豊かな趣味を養い高尚優雅な品性を育成する

現校長の和田氏は8代目の校長で、灘校叩き上げの人材である。非常に温和で柔らかな言葉の節々に聞き逃すことの出来ないメッセージが籠められており、他者を惹きつけてやまない。初めての会見にもかかわらず、校長の人格・人間性に魅了されてしまった。

生徒は灘に於いてどの様に成長していてもらいたいかという問いに対し、和田校長は、自分をしっかりと表現できる力や個性を表現できる力を育ててほしいということであった。ただし、自己を主張するという表現は使いたくないというのである。つまり、他者の声を聞きながら、世の中の流れを俯瞰し、自分を見失わないことが重要とする。ここにも和田校長の人間性が現れているようである。

リーダーシップやノブリス・オブリージについて質問した際に、ノブリス・オブリージは、上に立ったものの見方ではないか、と反論された。ここまで到達したのは、自分一人の力ではないでしょ、ということである。「オリンピックでも、優勝者が感謝の気持ちを述べるが、支えてくれる人がいるからこそ、今の自分がいるのであり」、「周りの人々、友達、ライバル、親がいて、それを忘れず感謝しながら、恩返しをしていく」ことが大切なのだと言う。また、恩返しとは「何かをあげるのではなく、その人が他の人のために、更に立派になっていくこと」である。これが「自他共栄」の意味するところであり、そのことを忘れなければ、それぞれの段階で今自分がしなければならぬことが見えてくるはずだ。そしてその実現に精一杯努力することが「精力善用」なのだというのだ。「優秀な人間は、他者をも思いやれる」人間で、中高一貫の6年間全体を通して、その優秀な人間形成を試みているのが灘だといえる。

ただ、現在和田校長は、日本の政治の在り方や、政治の不透明のみならず学校の外から、即ち、産業界や教育産業からの声が強すぎることに對しても危惧を感じているということであった。灘やその他優れた人間教育を実施している学校を、単に偏差値の高い学校に変えてしまわない為にも、我々は和田校長の言葉を何度も繰り返し咀嚼しつつ、優れた教育を脅かすものに対し反対の声を上げることも必要になるのかもしれない。

恵まれた生徒を持っている灘ではあったが、意外であったのは、挨拶が出来ない生徒＝人見知りする生徒が多いということであった。校長もこれだけは大変気にして、機会あるごとに他者とのコミュニケーションの大切さを生徒たちに訴えているという。

2. 8 東京都立日比谷高等学校

(1) 基礎情報

【日比谷高等学校】	
創立年	1878（明治11）年
学校形態	都立 全日制普通科
男女比	共学
学生数	平成26年度の募集人数は男子167名、女子150名、合計317名

【日比谷高等学校】教育目標

個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間を育成し、普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造をめざすことは、われわれの理想とするところである。生徒はこの理想のもとに、常に向上心と積極的態度をもって次の目標の達成に努めなければならない。

- 1 自立的人格：自律的で個性豊かな、しかも調和のとれた人格を確立し、進んでものごとを実行していく態度を養う。
- 2 学習と教養：自主的・自発的な学習活動と教科外活動を通して、知性と情操を磨き、将来社会の有為な形成者となるための豊かな教養を身につける。
- 3 責任と協調：日比谷高校の一員として自己の責任を果たすとともに、互いの立場を考え、協力していく態度を養う。
- 4 心身の健康：清潔で健康な生活を心がけるとともに、進んで心身を鍛え、困難にあってもくじけない強い気力を養う。
- 5 文化と平和：わが国ならびに世界各国の文化と伝統の理解を深めるとともに、国際協調の心構えを養う。

【日比谷高等学校】期待する生徒の姿

- 1 自律的人格を育成し、幅広い教養と高い学力を目指す本校の教育目標の下で、誠実に努力する決意を有する生徒
- 2 将来の進路選択について、明確な目的意識をもって、本校への入学を志望する生徒
- 3 学習成績が優秀で、自主的な学習、学校行事、生徒会活動、部活動等に積極的に取り組んだ実績を有する生徒
 - (1) 9教科の観点別学習状況評価が特に優れていること
 - (2) 教科学習に関連する分野で、英語検定準2級、その他同等の資格・能力を有すること
 - (3) 学校行事、生徒会活動、部活動等において、中心的な役割をになった実績を有すること
 - (4) 学校内外の諸活動で、都大会又はそれに準ずるコンクール等に出場し、優秀な成果を収めた実績を有すること
 - (5) 論理的な思考力や考察力、自分の意見を的確に表現する能力を有すること

【日比谷高等学校】課外活動

- 部活動加入率は95%を越え、部活動の中でも自分を磨き、個人、団体ともに高い目標の

達成を目指し、実績を上げている。

- 全人教育に取り組む本校は、学習と部活動を両立させていく中で、優れた人格と21世紀を逞しく切り拓くリーダーを目指し、バランスの取れた「強い力」を養う。

運動部：弓道 剣道 柔道 硬式野球 サッカー ラグビー 陸上競技 軟式テニス ソフトテニス 水泳 男子バスケットボール 女子バスケットボール 男子バレーボール 女子バレーボール 卓球 バドミントン ダンス

文化部：生物研究 天文 音楽（合唱） 音楽（オーケストラ） 方角 軽音楽 作動 美術研究 棋道 演劇 化学探求 雑草研究 物理地学研究 漫画文芸 ESS同好会 フットサル同好会 写真同好会

【日比谷高等学校】その他の活動

- 土曜講習
- 5月の体育大会、6月の合唱祭、9月の星陵祭は「三大行事」は、生徒自らが考え、主体的に作り上げる伝統的な行事

【日比谷高等学校】卒業後の進路

- 2015年度の大学合格者数は、東京大学37名、京都大学4名、慶應義塾大学131名、早稲田大学154名、海外の大学1名

（2）武内彰校長との対談

1) カリキュラム

公立高校として、学習指導要領に則って教育を実施しています。しかし、たとえ学習指導要領が改変されたとしても、基本的ポリシーとしては、本校ではあらゆる科目を履修してもらうことにしています。高校生活の中で教養の土台を作る最後の期間となるでしょうから、2年生から理系または文系に特化し、受験のために準備するといったことはしません。カリキュラム作成において136年間の歴史の中でも、そのようなことはしませんでした。一貫して、文系、理系にかかわらず、共通のカリキュラムであり、3年生で文・理に分けています。それに関しては、卒業生からの意見や評価も肯定的評価が多いといえます。学びは学際的であるべきで、職業にしても文理融合の場所が多いと考えていますから、文系も理系の基礎が必要なように、理系も文系の基礎が必要でしょう。

クラスはレベル分けしており、2年生の数学II・Bは、1クラスが「発展クラス」、もう1クラスは「標準クラス」とレベル分けのクラスを設けています。ただ、一クラスが上位1番から30番というように、トップ層、上位層だけが集まっているということではありません。特定の学科だけは、習熟度別クラスにしています。

主要5教科以外にも重視しており、1, 2, 3年で学ぶ「家庭、保健体育、芸術」ですが、そのどれも大切にしています。

2) 医学部志望の生徒

本校の生徒は、東大志望が圧倒的多数を占めており、1 学年 320 名いるが、120 から 130 名は東大を第一志望としています。つまり、東大を目指す子弟が多い学校となっていますね。その中でも医学部志望が年々増加しており、理 III に関しては 2013 年度は一学年一人しか入らなかったが、他大学の地方も含めて国立大学医学部志望者が多く、30 から 50 人、70 人と年々増えてきている。

学校としては、子供たちの希望を叶えるということを目的としていますが、特定の大学に行けという指導はしていません。生徒たちを支えるのだ、ということを教職員には話しています。一旦、校長という立場の者が、言明しますと一斉にその方向に向いてしまし、そういう学校になってしまうので注意しています。

進学率は結果であって、基本線は生徒の希望を叶えることを優先しています。結果をどうとらえるかについては道半ばだと思っています。毎年生徒は東大進学者が 120 名から 130 名いますが、結果としてはこの春の現役生が 20 名ですから、全員の希望を叶えているわけではありません。早稲田・慶應にいく生徒や、翌年再度チャレンジするため浪人になったりしています。現役の進学率は 54% です。

3) 課外活動

部活動や定期演奏会、合唱、文化祭である「星陵祭」も実施しています。ただ、「星陵際」は劇だけで、全クラス劇のみ各教室で実施しています。1 日中、5 公演から 6 公演実施するというのが我が校の伝統です。3 年などは、受験も控え大変ですが、劇団四季のものをトライなどしています。

体育大会の特徴は、派手さはありませんが、ただひたすら種目をこなしていくことが特徴でしょうか。担当教員はつきますが、基本的に生徒が実施します。実行委員会、企画立案も生徒が中心に行い、様々な場面で彼らは自主性を発揮するわけです。

生徒会と役員会を 2006 年度に新設しました。2006 年まで存在していなかったこと自体が異常であって、生徒会組織は学校にとって必要な組織であると思っています。興味深いのは目安箱を設置し、生徒の意見を収集していることです。生徒の意見を学校生活に反映することで、学校を過ごしやすい場所にしようと試みているのです。

生徒は他の生徒を引っ張っていくような形ではなく、CD を回収して被災地に送るとか、みんな裏方的仕事をしています。基本的に多くの生徒は中学生時代にはリーダー格で、一クラスに 5 人は生徒会長を経験した生徒がいます。8 クラスだから、40 人は居る。一学年にすると、生徒会長経験者は 100 人を超えます。そのため、本校で初めて裏方経験をする子供たちも多く、初めて裏方の役割、つまり地味だが支える側の存在とその必要性に気付くのです。

4) 入試

一学年 320 名の中の約 20%が推薦で入学しますが、推薦では面接があります。今年度は 63 名が推薦で入学しました。残りの 80%は学力検査のみで入学します。学力検査による合格者の 9 割は得点と調査書で入学が決定され、1 割は当日の得点のみで決まり、調査書は考慮されません。今年 2015 年度は、受験者 501 名中学力検査での合格者は 283 名でした。

5) 教員

進学指導重点校であることを活かしています。進学指導重点校は、経営上の利点があります。教員の獲得方法なのですが、進学指導重点校 7 校と進学指導特別推進校 3 校の合計 10 校での教員を希望する志願者は、東京都教育委員会の公募に応募してきますが、そこで書類選考と面接を実施し、配置先が決定されることとなります。面接で行きたい学校の意思表示はしますが、どの学校に行くかはわかりません。日比谷を希望しても西高校に行くかもしれません。

選考では、10 校の校長が相当深く関わっており、書類選考も面接もしますが、最終的に話し合いで決定します。学校同士が競合するのですが、日比谷が欲しいから受けてくれ、と言っても他の学校に行くこともあります。教科教育、教科指導（5 教科）に優れた教員を、通常なら 6 年で異動するのですが、優秀な教員をさらに 5 年間長く残すことも可能です。この仕組みは非常に重要で、ありがたいものです。公募のメッセージ、うちはこういう教員が欲しいというメッセージを出し、手を挙げてもらうのです。

教員の異動ですが、通常 3 年から対象になり、現在教員の中で 6 年以上の在職の者も 6 年以内の者もおります。平均在職年数は、5.9 年です。力のある教員は、昇任選考を受けさせるようにしています。主幹教諭と指導教諭の二つのコースを受験させ、学校に引き留める手立てもあります。主幹教諭はいわゆる校務分掌、進路、教務、生活指導で、4 級職です。指導教諭は教科指導です。つまり、6 年+5 年、更に 5 年間残せるので最長 16 年間学校に留まってもらうことが出来るわけです。

教員は、教育委員会の研修や学校独自の研修に参加します、校内研修は、年に 2 回ですが、教科を越えて互いの授業参観を実施し、授業実施者にコメントをしています。管理職にもコメントを提出します。授業参観することは有益であると考えています。

校長に関しては、教育委員会が校長を選考しますが、在職期間は 3 年から 5 年で、私の前任校は八王子にある都立翔陽高校の校長でした。

教員の役割と使命ですが、基本的に生徒の希望を叶えることだと思っています。本校は、人間育成、リーダーを育てる学校だと思っており、教員には質の高い授業を作り出せる人、子供の人間的成長をきちんと支えられる人を希望しています。

校長が掲げるミッションを中心に策定した学校経営計画を毎年立てているので、その計

画の実現に向けて、個々の教員が目標設定をしてもらっています。明示することで全員が同じ目標に向かって進むようになりますし、教員間、及び教員と校長との意思疎通を図る試みは、教員とは年3回面談するので、その面談の中でも確認していています。

6) 進学指導重点校と進学指導特別推進校

これらの学校同士の繋がりを持っており、進学率を上げることについても色々話し合っています。例えば、青山が条件付きで進学指導重点校から外れるかもしれないという話が出てきたときには、小山校長が難関大学に15名合格させる努力を応援しました。過去には十分に支え合うことができない時期もあったようですが、今では情報を共有したり、ノウハウを教え合うことは非常に重要で、協力することで私学に対抗できます。絆が出来てきていると感じています。

年3回、1、2、3年生と各学年で模擬試験を受けさせる、それをデータベース化しています。全成績がデータとして残っており、必要な場合にはチェックでき、データを使って各生徒を励ます材料としています。データ内容は、入学の時点で、推薦での入学か学力検査での入学か、上位、中位、下位での入学か、模試の各教科の得点や偏差値、希望進路、希望大学、学部、所属の部活動、センター試験結果、学校の評定平均値、前期の中間・期末テストの成績、後期の中間・期末テスト成績、出欠も詳しく、遅刻回数、早退・欠席回数も入力しています。私が着任してからこれらデータを揃えてもらうようにしました。

7) 自主自律の精神

日比谷に居る早い時期に、「やらされる勉強から、自らやる勉強」への転換を学ぶべきだと考えています。8割の生徒が塾で学びながら、日比谷に入ってくるので、2割くらいはそのまま塾に行き続けているようです。それを自主的な学びに変えてほしいですね。塾・予備校はわからない教科だけ活用するような仕方をしている生徒が多いです。3年生になると6割が塾・予備校に通っていますが、科目を選んでいきます。生徒たちには入学時から手を掛けて、学校の学習だけでも進路実現が果たせるようにきめ細かく指導しています。

部活動や生徒会活動も同じで、自らが実施していくことを学んでほしいと思っています。文武両道で全人教育を実施することが日比谷の教育の考え方で、教養を有しながら基礎となる教育を日比谷で受けてもらいたいのです。豊かな人間性も持ってほしい。人生で学ぶことは、勉強だけではありません。OBは、日比谷が変わってなくて良かったと口にしますが、生徒たちには、自分たち教員を乗り越えてほしいと考えています。

私はバドミントン部を指導しているが、管理職になってからも着任した学校で顧問をしています。僕が異常なのかも(笑)。しかし、顧問として生徒と面談し、文武両道できているかチェックできるので、生徒たちの意識を高めるよう努めています。ほったらかしでは、

けしてうまくいきません。きめ細かく寄り添って面倒を見ながら、自律を進めてやる必要があります。

8) 日比谷で育ってほしい生徒像

送り続けるメッセージは、大学入学ではなく、もっと先を見据えて、社会に出ていくときを考え、日比谷で学んでほしいということです。「仲間と一緒に解を見つける」、「課題を解きながら、自己実現を果たしていく」といったことです。学力検査の国・数・英は、一部の問題を本校で作成していますが、つまり、自校作成問題にもそのメッセージが反映されているのです。

卒業生には目に見える成果があります。スーパーサイエンスハイスクールの取り組みをやった生徒が現在大学4年生となっていますが、彼は海外派遣経験者で、ハワイ島へ行ってすばる望遠鏡を見てきた生徒です。そこで、すばる会という卒業生の組織を作り、在校生に今どんな研究をしているか文化祭の時に学校に来て発表や講演をしてくれるのです。他に、琵琶湖の鳥人間コンテストで優勝した卒業生や、アメリカでの人工衛星を上げるコンテストで優勝した卒業生がいますね。NPOの一員となってアジアでボランティア活動をしたりもしています。

授業体験活動の中に、奉仕科目があるのですが、千代田区のボランティアセンターの方に来てもらい、どんな活動があるかを教えてもらいながら、手話を教えてもらったり、清掃活動を実施したり、古い切手を活用してボランティアに役立てたりしています。

知的好奇心は旺盛だが、真面目なタイプが多いようです。男女比は、40数名男子が多いですが、ほぼ半々ですね。女の子の話は、何故か極端に少ないです。

校内の成績上位者や東大の現役合格者は部活動に所属した生徒です。まあ、部活動加入者が95%だからでもあるのですが。

2. 9 ラ・サール高等学校・中学校

(1) 基礎情報

【ラ・サール高等学校・中学校】基本情報	
	高等学校：昭和25年（1950年） 中学校：同31年（1956年） ラ・サール高等学校とラ・サール中学校とから成り立ち、高等学校は昭和25年に、中学校は同31年にカトリックの教育修道会ラ・サール会（カトリック ラ・サール修道会）によって現所在地鹿児島市小松原に設立。本学園の名称は1651年にフランスに生まれた聖ジャン・バティスト・ド・ラ・サール師に由来しており、師は学校教育による社会の改革を志し、家財や栄職を捨て、その生涯を青少年の教育に捧げた。ラ・サール師の遺志を継ぎ、師にならって天職として教育に従事する人々の集まりがラ・サール会である。現在ではこの会によって世界80カ国にわたり、1,000余の各種の

	学校が経営され、修道士の総数は 8,00 人を超えている。日本では本学園のほかに函館ラ・サール高等学校（昭和 35 年設立）、函館ラ・サール中学校（平成 11 年設立）がある。（理事長：ロドリゴ・テレビニョ、校長：ホセ・デルコス）
学校形態	中高六年間の一貫教育（高校からの入学あり）
男女比	男子校
学費	授業料 月額 37,500 円
学生数	中学校：480 名（12 学級） 募集 160 名 高等学校：720 名（18 学級） 募集 240 名（内部進学者を含む） （高 2、高 3 で文系 1 学級が 2 年続いたが、現在文系 2、理系 4 の 6 学級に戻った）

【ラ・サール高等学校・中学校】教育方針

教育基本法に基づき、カトリックの教育修道会ラ・サール会によって創設、維持

1. キリスト教の広く豊かな隣人愛の精神を養います。
2. 新時代の人間としての世界への広く正しい認識を培います。
3. 心と体と頭の調和のとれた、社会に役立つ人間を育てます。
4. ひとりひとりの能力を最大限に伸ばします。

【ラ・サール高等学校・中学校】特徴

- 多数の志願者の中から選ばれた能力のある生徒の集まりで、学力の差が少ないために能率的な学習指導を進める
- 6 ヶ年を通ずる特色のある教育課程を組むことによって、むだのない効率的な学習
- 記憶力が高く心身ともに伸び盛りの中学 3 年間に基礎力を充実させるとともに、高校の課程と有機的に関連させて学習効果をあげる
- 教諭陣には中学・高校の区別はなし
- 高校から入学した生徒に対しては、1 年間で、中学から進んだ生徒との進度の差をなくすようにし、2 年生で両者まぜてクラス編成
- したがって高校から入学した生徒たちも、絶好の環境で、自信と意欲をもって学び、学力を大いに伸ばす
- 教育課程の特色あるものとして、外国人教師による英語の指導を行い、クラスを 2 つに分けて少人数にして、別々の教室で行う
- 知識を得るためだけの教科ではなく、りっぱな人間を作るための土台となるよう指導
- 中学の「倫理」、高校の「人間学」の教科は独自の教科で、正しい社会生活のありかたの標準を示し、生徒が神・隣人・自分に対する義務を知り、それをよく実行するように教育するという目的をもつ

（2）谷口哲生副校長との対談

ホセ校長が、ラ・サール会の仕事で海外に出張し、不在のことが多いため、副校長（教頭とは異なる）が校長代理を務める。

1) 男子校たる目的

鹿児島に女子のためのキリスト教教育施設は存在したが、男子向け施設がなかったため、創設の要請があり、創設されることになりました。わたくしとしては、男子のみの方がのびのびと学ぶことができるのではないかと考えています。

2) キリスト教の理念について

校長は修道士ですが、日々の学校生活の中ではあまり意識されていないでしょう。ただ、「ラ・サール生のつとめ」として、「倫理」(中学校)と「人間学」(高校)を受講しなければなりません。高校の「人間学」は、以前はカナダから派遣された brother が「聖書史」として担当していましたが、その後、管区が変わりメキシコから派遣される brother が担当になり、現在は日本人教員がこれらの授業を担当しています。

「倫理」では、校長と brother がラ・サールの人物像やキリスト教について、「人間学」では青年期の自我の確立を教えています。校内のお御堂(チャペル)で金曜5時からミサが行われており、希望者が参加することになっています。教員はクリスチャンである必要はありませんが、宿泊研修ではキリスト教精神を反映した内容の校長主催プログラムが行われ、クリスチャン倫理に反する行動は避けるようにとのアドバイスがあります。講話や談話では、校長が聖書に言及することはあるのですよ。

3) カリキュラム・ポリシー

指導要領に準拠しつつ、大学入試合格を目指しています。理科3科目を要求する学部(一部の国立医学部)受験者は、理科1科目を補講で対応しますが、これを除けば、どの大学を受験する場合でも、正規カリキュラムの中で全ての必要科目がカバーされるように授業を組み立てています。

4) 学校生活と進路

幼少期からピアノやバイオリンを習う生徒が多い。ピアノ練習室は5室もあります。保護者が医師である生徒が多くなってきているせいか、近年の傾向として東大志望者が減り、(他大学を含む)医学部志望者が増加している。卒業生は医師や研究者が多く(エコノミスト調査)、水俣病研究の原田正純氏も本学卒業生です。

学費は高いのですが、交通費や塾・予備校の費用が不要なため、実質的には安いのではないのでしょうか。学寮においては、高校生には求められていなかったが、中学生は毎日3時間の義務自習が求められています。しかし、近年、高校生にも義務自習が導入されました。寮に自習室があり、それぞれ個人の机が置かれています。高校生用の自習室はないため、高校生は食堂で自習をしています。現在、建設中の寮には自習室が設置される予定です。

す。義務自習の時間に勉強する内容は、各生徒が決めるのですが、宿題や予習をする生徒が多いですね。

寮や部活動を中心に、上級生が下級生を指導することが一般的に行われています。部活動は義務ではありませんが、学校側は入部を勧めています。卒業生は、卒業後も定期的に同期で集まっており、5年から10年ごとに鹿児島に集まる習慣があります。各地（東京・名古屋・大阪・福岡・鹿児島）に同窓会支部があり毎年支部総会と懇親会をやっています。

中学校から高校への内部進学希望者は、中2末の判定会議により可否が判断されます。成績不振者には保護者を伴う面談を行い、転校を勧めることもありますが、ごく少数で年に2・3名です。ただし、本人の強い意志がある限り、転校は強制しません。テストに関しては、月1回テストを実施しますが、1回当たりの試験範囲は狭いですね。高校では朝テスト、高2の後半からは週テストも実施されます。

5) 教員

教員に中学校・高校の区別はなく、両方で授業を担当する。常勤教員は約70、非常勤13名（中高あわせて1,213名在学）です。教員は、旧帝大、広島、神戸大学が多く、科目によっては東工大・東外大等を中心に求人しています。

選考作業は各教科で行い、教科によっては模擬授業や試験を行います。専修免許は求められておらず、同一科目で中・高双方の免許を有することが望ましいですが、一方だけでも採用されることはあります。この場合、採用後に取得を促してはいますが。

一学期に最低1回の各教科研究会、また、年2回の各学年の授業担当者会議を行っています。いじめ・問題行動も考慮し、中学生の担任と副担任による中学部会の会議が毎月行われています。2学期後半から12月には入試問題検討会議が開かれます。

6) 学校行事について

体育祭では、出身地で紅白を分けており、体育祭後1週間程度で、翌年の応援団長や幹部を決めるのです。紅軍は鹿児島を中心に近隣の各県が組みます。白軍は福岡を中心に九州以外の各都道府県が組むこととなります。福岡に近い佐賀や熊本、大分あたりは学年毎の人数調整のために紅軍になったり白軍になったりします。さらに、参謀、学欄隊、袴隊、麗楽隊、彩雅隊など応援団（クラスマッチ）の役割を決めていきます。1週間前から朝練習が始まり、夜は8時まで、体育祭の前に代休が設定されており、これを利用して応援団の熱心な練習が行われます。物故者追悼式は年に1度開催しますが、この追悼式は生徒が死について考える機会になっていますし、バザーではボランティア精神を学びます。収益は全て寄付しており、寄付先も生徒が決めるのです。夏休みには高1の希望者が参加する短期語学研修（サンフランシスコ郊外・ホームステイ2週間）とイギリス（イートン・カレッジ・サマースクール19日間）があります。

7) 対談を終えて

a. キリスト教の理念

谷口副校長の言葉では、キリスト教の教えは、日々の学校生活の中では余り意識されていないということであった。また、生徒も、「キリスト教の理念は生きていると思うが、あまり意識はしていない」ということであったが、ラ・サールの授業の「倫理」では、ラ・サールの人物像やキリスト教の教えや世界観について、また、「人間学」では青年期の自我の確立について学ぶ中で、また、恒例のバザーでは、他者と富を分け合うということ学ぶ中で、人生の最高の目的は幸福な生活であり、現世の富や名声の追求にはないこと、また、この幸福な生活にいたる途は徳 (Virtues) にあることを、知らず知らずに生徒たちは体得していつていると思われる。何故ならば、確かに他の名門中高一貫校と同じく、医学部新学希望者が多いのであるが、彼らにその進学の間意図を聞くと、病に冒されている人々を救いたい、という言葉であった。世俗での成功を望むのではなく、広く人々を救済するという意味は、キリストの教えの体現である。

古く歴史を紐解くと、古代ギリシャ教育の陶冶理想は人文主義であり、その人文主義の根底には主知主義が存在していた。この古代ギリシャ文化を支配していた過度な知性尊重の後訪れたギリシャの没落、ローマの退廃に対し、全世界の人々に平等と安寧をもたらすことができたのはキリスト教であり、その根底には気高い道徳性があったことを顧みると、ラ・サール学園で学ぶことの重要性がひしひしと感じられる。

ラ・サールの特色として、学校で学ぶ教科は「知識を得るためだけではなく、りっぱな人間を作るための土台となる」ものとして選択されており、中学の「倫理」、高校の「人間学」の教科はラ・サール独自の教科である。それら授業の中で、「正しい社会生活のありかた」を示し、生徒が「神・隣人・自分に対する義務を知り、それをよく実行する」ように教育するとしているという。キリスト教そのものは、日本の宗教とは異質な点が多々あるが、人間としてあるべき姿やなすべき事柄に違いがあるはずはなく、隣人愛は地域での共存に不可欠である。ラ・サールの4つの教育方針は、今回調査してきたイギリスのパブリック・スクールと等しい方針である。

b. 男子校であること

副校長の見解では、男子のみの方が女子を意識せず、委縮せずに学ぶことができる、ということであったが、これはイギリスの男子のみのパブリック・スクールの校長からもしばしば耳にする意見であった。幼いころは男子と女子の成長の速度が異なり、女子のほうが全般に大人びている。その中で、プライドと性差への意識、負けることへの恐れ等が入り交じり、本来の真っ直ぐな成長を阻害することが考えられるという側面から考えると、十分に理解しうる理由であろう。

また、ラ・サールの卒業生に医師や研究者が多いことや保護者が医師である生徒が多いため必然的に医学部進学志望者が増加しており、また、職業としての医師を選択する生徒も多く、東大志望者が減り、国・公・私医学部志望者が増加しているということである。終身雇用制が崩壊し、大企業であろうと雇用が不安定化している昨今、高収入で安定していると考えられる医者、歯科医、獣医といった職業を目指す生徒が増えている。

c. 寮生活の素晴らしさ

寮は、生徒全員が入るのではなく希望者のみ入寮し、生活している（高3は除く）。寮以外にもラ・サール生専用の下宿があり、学校が紹介しているが、寮生の多くは自宅通学できない生徒たちである。

寮の目的は、学年を越えた結びつきを強めるとともに、規則正しい生活と学習習慣を身につけることで、「郷中（ごじゅう）教育」¹⁵（薩摩藩伝統の縦割り教育で、「方限（ほうぎり）」と呼ばれる縦割を単位とする自治組織の中での、年長者から年少者への指導）の実践の場だとも言われている。鹿児島県内の神社には、「負けるな、嘘をつくな、弱い者をいじめな」と書かれた文字が掲げられていることに気付くが、ラ・サールの寮生活はイギリスのグレイト・ナインと同じく、優れたリーダーを育てるべく、優れた教えの中で人が大切に育てられている。各部屋の3年生の中から室長、階ごとに寮長が選ばれるが（1つの階に70名前後）、寮長は中学生と高校生（今回インタビューを受けてくれた平野君と貝原君）共に居り、中学生は8人部屋、高校生は個室である。寮教諭（寮の先生）は中学校寮に9人、高校寮6人おり、交代で夜間も常駐する。新設された寮では、2階から4階に生徒の部屋と自習室があり、各階に中学生が約110名、高校生が約80名寮生活をしている。

寮や部活動を中心に、上級生が下級生を指導することが一般的に行われており、寮生活や学校行事の運営が、人間関係や他者への思いやり、リーダーシップの涵養につながっているのである。

また、保護者や兄弟、親戚縁者にラ・サール出身者がいる生徒が少なくない、つまりラ・サールのリピーターが多いということは、ラ・サールの教育が生徒自身にもまた、生徒を囲む周囲の者にも賛同され、他校の教育よりも遥かに優れていると考えられていることを意味する。つまり、歴史の中で受け継がれてきたラ・サールの教育が、今もなお広く受け入れられているのである。

また、寮には、イギリスオックスフォード大学のカレッジのように、建物に囲まれた中庭（quadrant）が作られている。

d. 高1の希望者が参加するイトン・カレッジ・サマースクール

19日間のイトン・カレッジでの生活であるが、今年度から始まったという。イトン

と同じく寮生活を送っているラ・サール学園の生徒が、両校の生徒が互いに成長すべく、引き続き交流が深まることを期待している。灘校もハロウやセント・ポールズとの交流が実施されている。

2. 10 早稲田中学校・高等学校

(1) はじめに¹⁶

早稲田中学校・高等学校（以下早稲田中高）は、1895（明治 28）年に、早稲田大学の創立者である大隈重信の教育理念に基づいて、坪内逍遙らが中心となって創立した旧制早稲田中学校が前身である。戦後の新制学校制度への移行に伴って高等学校を新設し、中高一貫教育を進めてきた。1979（昭和 54）年には、早稲田大学の「系属校¹⁷」となって、現在に至っている。現在の教職員数は約 140 名、生徒数（男子のみ）が約 1,800 名（学年定員 300 名）、中高 6 学年全てが 7 クラスで計 42 クラスが置かれている。学校長は、早稲田大学の教員が兼任する体制が採られている。

早稲田大学が建学の精神に「学問の独立」を掲げている一方で、早稲田中高は「人格の独立」を建学の精神に掲げている。その意味するところは、「自ら信じ自ら恃（たの）む自立心を生徒に要求し、「逆境に処して益々雄壮」な人間の育成を理想とするもの」である。その基盤となる教育目標として「誠」「個性」「有為の人材」の 3 つが掲げられている。「誠」は「言行の一致に基づく、誠意・真剣さなどとして発現される」ものであり、「個性」は、その「立つべき根幹を、独立・自主・剛健において」いるとされ、「有為の人材」がいう「有為」とは、人間の資質は個人のためだけにとどまらず「他を活かし人類を益する」の意味を持つ。そのような人材の育成を、目標に掲げている。これらは、大隈重信や坪内逍遙などの理念を反映させたものとなっている。

早稲田中高の教育について、さらなる詳細を直接うかがうため、2014 年 9 月 9 日（火）に、古阪肇氏（早稲田大学助手・当時）と筆者とで同校を訪問し、菱山康雄副校長、金子一郎教頭、白崎祥一教頭にヒアリングを行った。同校からいただいた資料とヒアリング内容から、以下の内容は基本的に構成されている。なお、当初の予定を大幅に超える 3 時間半のヒアリングに快くご対応いただき、多くの興味深い話をうかがうことができたが、紙幅の都合により本稿でご紹介できない、もしくは簡略化せざるを得ないことも多いのが残念である。この場を借りて調査へのご協力に感謝申し上げますと共にお詫び申し上げたい。¹⁸

結論的なことを先に提示すると、早稲田中高の教育に通底している「幅広くバランス良く」は、生徒の「リーダーシップ」の涵養にそのままつながる思想でもあると推察される。その考察は最後に行うとして、まずはその思想に裏打ちされた教育内容をみていきたい。

(2) 正課活動にみる「幅広くバランス良く」

まず、いわゆる正課活動であるが、2014年度入学生の教育課程をみると、中学では全教科・科目が共通履修であり、高校でも、芸術（高1）、歴史（高3文系）、地理・公民（高3理系）に必修選択科目があるだけで、その他の教科・科目は共通履修となっている。たとえ文系の生徒でも、数学も物理・化学・生物・地学もすべて必修である。とにかく「ぜんぶやらせる」方針で臨んでいるのである。この考え方は、進学先の専門分野やその先の就職その他望むように将来を切り拓きたいと思ったときに、何が必要になるか分からないとの考えによる。将来大学での勉学で必要になることが想定される内容から逆算してカリキュラム編成も行っている（例：経済学部の内容から逆算し数学科の内容を組み立てる）。授業の進度は速く、内容も高度である。例えば、国語は中1で中3の教科書、数学は中2の3学期からは高校の内容に進み、生物・地学は中学で高校の内容が入ってくる。また、グローバル化への対応で英語強化が政策的に求められる中で、早稲田中高は英語教育においても読む・書く・聴く・話すの4つの能力にバランス良く対応し、メルボルン・グラマール・スクールとの交換留学（18日間）も高1・2対象に実施しているが、話す能力が高くても、内容の中味が薄いと国際的には相手にしてもらえない、だからそれこそ「幅広くバランス良く」「ぜんぶやらせる」ことが大切になってくる、との説明を受けた。

大学受験で問われる科目以外にも総じて力を入れている点も特徴的であるので、いくつか例を紹介する。まず家庭科では、調理実習においては例えば未調理のアジからアジフライをつくる、和・洋・中・伊をすべてこなす。中学段階から別の授業ですでに活用しているエクセルやパワポを用いて栄養計算をさせてプレゼンを行う課題もある。裁縫実習では、例えばYシャツのボタン縫いのテストもあり、基準を達成しないと追試になるそうである。だが、家庭科を一生懸命やっている生徒の方が全体的な成績も良いとのことである。

音楽科では、専用教室にひとり1台の電子ピアノが確保されている。だれでも知っている曲をテーマ曲に指定し、アレンジ自由で伴奏を付ける課題がある。最後は自分で弾いて演奏する試験がある。また、一般のオペラ鑑賞のコンサートに一般席を確保して全員を参加させる取り組みもある。事前に、鑑賞の作法や作品の時代背景などを徹底指導しておく。

体育科に関しては、特に入学時は、体育を苦手とする生徒が多く、最初はボールを投げる・受けることから始めるそうである。徐々に体を動かすことに慣れて、高校ではテニスにも取り組むなど、さらに様々な競技に触れる機会を持っているため、それまで見いだせなかった得意な部分などの発見につながられることもあるとのことだ。まず体を動かすことの楽しさを知ってもらいたいとのことであった。

（3）課外活動にみる「幅広くバランス良く」

クラブ活動も盛んで、強制でないにもかかわらずほぼ100%の生徒が参加しており、約3分の2程度が運動部に所属している。そうでない生徒も、ほとんどが委員会活動や文化祭や体育大会の実行委員会などに関わっている。これらの活動は総じて多忙で、クラブ活動

に参加する余裕がないと同時に、それ自体がクラブ活動のような効果を及ぼしている側面がある。人間関係の特性として本物の兄弟より仲がよく、困ったことも先輩に相談することで解決することが多いそうである。まれに、保護者の意向で塾や予備校に通わせるためにクラブ活動への参加を認めてもらえない生徒が出てくることがあるが、結果的に進路などがうまくいかないことが多いそうである。

とにかく好きなクラブに入りそこで楽しむことを前提としている（活動も週4日までに制限されている）。よって、よく耳にする勝利至上主義や学校の知名度向上への貢献とは完全に一線を画した考え方があがるが、大会などでもかなり勝ち進む生徒やクラブがでてくるとも少なくない。しかし、仮に勝ち進んでも、生徒自身の判断で、予定を優先して辞退したり、補欠選手をおもんばかって（戦力ダウンと知りながら）出場させたりすることもあったそうだ。そしてそのことを教師は基本的にはとがめない。よい成績を上げた場合には表彰も行うが、まず楽しむことができればそれでよいとの考えである。クラブの指導は、卒業して間もない大学生のOBや、退職後の60代のOBが来ることもある。

その他、クラブ活動に関しては、「折り紙同好会」の設立希望申請の際のエピソードが興味深い。男子校なのになぜ折り紙なのか？という疑問が一部教員間で挙がったが、実際には芸術性だけではなく数学の理論ともつながるものであることがわかり、教師たちが脱帽したような例もある。現在では人気クラブのひとつとなっている。

クラブや生徒会関係の活動が、進学実績や将来就く職業に直接のインパクトを与えているわけでもないとのことである。むしろ、そうした環境の下で、クラス以外に友達や先輩後輩の良き人間関係ができるかどうかで、ふんばりがきくかどうかが変わってくるそうだ。

(4)「幅広くバランス良く」人間関係をつくるためのクラス・班

学校における生活の基本単位はクラスであるが、早稲田中高では、クラスに限らず習熟度や属性などの基準によって生徒を分けることを基本的に一切やっていない。クラス分けは、成績順位をもとに、各クラスの学力を均等にわけている。また、毎年クラス替えを行うが、その学年を担当する教員はほぼ持ち上がる。ただし、なるべく生徒にとって担任が偏らないように、各学年で編成を工夫し学年の全教員で学年の全生徒を指導している。

早稲田中高では、伝統的に様々な場面で「班」がつけられて行動の単位になる。各クラス（45人程度）には8つの班が置かれる。クラスでの班は、担任が生徒の意見にも耳を傾けながら分け方を決めていく。班長は、なるべく多くの生徒に回るような指導を行っている。班長以外にも、クラスの中に、HR、学習、保健、庶務、図書、興風（校内雑誌）、生活、学実、体実など全員が何かしらの委員や役割を持つようになっている。いずれも概して任される内容が多く責任も大きいため、実際にこなすのは大変だそうだ。最初は楽そうな役割を選びたがる生徒もいるが、どれをやっても大変なので次第に役割が大変なのが当たり前という感覚になっていくそうである。

課外活動でも班がつくられる。例えば林間学校（中1の夏休み）では、2クラスに対して14名の教員がつく。テント設営から火起こしに至るまで、教師は最初に説明はするが、あとはすべて、生徒たちが班で協力して試行錯誤しながら進めていく。班長の生徒はつねに班員を見ていて指示を出さなければならない。どうしてもやむを得ない場合のみ教師が止めることもある。関西研修でも、班ごとに調査を綿密に行ってコースを決めるようにしており、教員が計画をチェックし指導している。

とにかくどの生徒も、必ず何かしら役割を担う仕組みになっている。その役割を果たそうとする中で、自信を付け、人間関係を深め、成長する効果が出てくるそうである。例えば、おとなしい生徒ばかりが集まって班が構成されてしまうケースもあるが、その中で一念発起して変貌を遂げることもある。大人が「引込み思案」などと決めつけるのではなく、機会を与える中で成長する可能性に期待している側面があり、実際そういう経験を多少なりともしていれば、それが将来生きていく糧の一つになると考えられている。

(5)「幅広くバランス良」い教育を提供する教師たちと生徒指導・進路指導

教員採用は、現在は原則的に公募である。ある教員は先輩から「中高の教員は「おでん」でよい」といわれていた。教員は生徒から見れば大人の見本であり、同じような大人しかいない環境では将来大人観が偏ることになる。だからいろんなタイプを採用する。「ちくわぶからゆで卵までいろんな具材がある方がいろんな味が出ておいしくなる」とのことだ。ネームバリューで応募が多く優秀な方も多いそうだ。特に能力開発に当たることはしていないが、個々の教師が自らよく勉強しており、授業などの準備も徹底して行う環境にある。教科ごとに6年間のシラバスをしっかりと揃えて、試験問題も教科の教員間でもみあう。学校主催の長期休み中の講習会は、各教員が講座を個別に企画するが、基準数以上の受講生がいないと講座が成立しない。厳しい現実として、教員間で講習の人気の差がかなり生ずるそうだ。教師は総じて教育熱心であり、時間があれば、生徒の質問・相談・指導などにもいくらでも対応する風土がある。男子校であるが、女性教員は全体の1割程度である。ただ、かつては女性教員がゼロであったが、公募による採用を始めてからは増えていて女性の採用率は高いと考えられ、女性も非常に優秀な方が応募しているとのことである。

生徒指導に関しては、学習指導の場面では「その場ではいやがってもいずれ必要性が分かる」との考え方から基本的に妥協はしないが、一方でおおらかに生徒たちを見守る側面もある。例えば、問題を起こして処分があった生徒に対しては、「その失敗をどう活かすか」との観点からいわば激励会のようになることもあるのだそうだ。

進路指導に対する考え方は非常にシンプルで、基本的には、生徒がどうしたいかを自分で調べて考えて結論を出すための助言や支援を行うのが学校や教師の役割と考えられており、進学実績そのものには、特に大きなこだわりはないとしている。

早稲田大学への推薦は高校3年の12月に内定する。属性によるクラス分けも一切して

いないため、つねに多様な進路意識が混在する環境にあることから、推薦決定のぎりぎりまで生徒は進路に迷うこともある。そして、早稲田大学への推薦枠は、各学部合計で早稲田中高の学年定員の半分にあたる枠が用意されているものの、例年のように一部余る。あくまで個々の生徒の考えや希望を確認、相談、助言をしながら、最終的には各自の判断に任せている（ポジティブな理由でいきなり就職したケースもわずかだが過去にはある）。

（6）考察～早稲田中高の教育と「リーダーシップ教育」とはいかにつながるか～

最後に、早稲田中高の教育が「リーダーシップ教育」とどう関連し得るかを考察して稿を閉じたい。「幅広くバランス良く」「ぜんぶやらせる」教育を正課の内外を問わず提供し、かつ生徒にも教員にもかなり雑多な社会性をもたせている点が早稲田中高の教育の最大の特徴として捉えられる。そしてそれは、建学の精神や教育理念に本質的なところでしっかりとリアリティを兼ね備えて通底している。場面や状況に応じる判断力、そしてそれを支える見識と経験に、大きな欠損や偏りがある場合は、自分の信じる道を切り開かず、逆境を跳ね返せないことにつながりかねない。本当に「自ら信じ自ら恃む自立心」を武器に、将来の道を自分が望むままに切り拓き、その先でも「逆境に処して益々雄壮」としていかなる場面や状況にもオールマイティに対処できる「人格の独立」をめざしているのである。もちろん、こうした環境を支えている要因は他にもある。厳しい受験勉強を経てハードな学習に耐えられる学力的素地を身につけた子どもたちがいることが、ある程度の前提にはなるだろうし、教員もこの生徒たちに応えるために猛烈に勉強している。¹⁹

ヒアリングの内容から解釈をすると、早稲田中高では「リーダーシップ」の語は直接使っていないが、リーダーシップは単に形式的にリーダーとして位置づけられる者だけに関係するのではなく、社会生活・職業生活・学生生活など、人生のさまざまな場面で、それぞれの立場において、誰であっても求められる。それを支える基盤となるのが「人格の独立」であり「自ら信じ自ら恃む自立心」なのではないか。我流の言い回しで恐縮だが、同じリーダーでも、形式的にリーダーに位置づけられる存在である"King"を育てるのではなく、誰でもどんな場面でも周囲に対してそして他ならぬ自分自身に対してもオールマイティにリーダーシップを発揮できるだけの人間性を兼ね備えた、いわば"Joker"を育てようとしていると捉えることは、果たして大げさな解釈だろうか。

1 肩書きはいずれもヒアリング当時のもの。

2 学校案内パンフ 2014 年版、週刊朝日掲載（2014.3.28、4.4、4.11 の各号）「女子教育の先駆者たち」抜刷、学内通信「鷗友通信」80、82、84 号（2014.3.20、4.9、5.24）。

3 肩書きはヒアリング当時のもの。

4 学校案内パンフ、「開成学園の概要」、ヒアリングの際のスライドハンドアウト、パンフ「受験生の君へ」、「カレッジフェア 2014」、「『ペンと剣の旗の下』の抜粋コピー。

- 5 筆者は、2014年8月22日に本校を訪問し、インタビュー調査を実施した。調査に応じてくださった校長、副校長はじめ、関係者に感謝申し上げる。
- 6 学校案内「知の探究」平成28年度版
(<http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/gakkouannnai/annai.pdf>)、特に2頁を参照。
- 7 特に断りのない限り、インタビュー調査で得られた回答による。
- 8 都立高校の入試の概要について、差し当たり以下を参照：東京都教育委員会「平成28年度東京都立高等学校に入学を希望する皆さんへ（日本語版）」
(http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/p_gakko/28pamphlet_j.html)
- 9 学校のウェブサイト上で、自校作成問題が公表されている：「自校作成問題過去問・解答例」(<http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/>)
- 10 教育課程について、戸山高等学校「教育課程」
(<http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/>)。
- 11 進路指導計画に関して、学校案内、6頁、近年の大学入試合格実績について、「過去5年間の大学合格数推移」(<http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/singaku/goukaku.pdf>)を参照。
- 12 詳しくは以下を参照：「戸山高校クラブ活動」(<http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/>)
- 13 参照：戸山高校生徒会 (<http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/>)
- 14 平成27年度 大学合格者数 <http://www.moon.sphere.ne.jp/nada-h/2015goukaku.pdf>
- 15 松本彦三郎著『郷中教育の研究：薩摩精神の真髄』尚古集成館、2007年。
- 16 本項は早稲田中高等学校案内パンフレットの記載をもとに記述した。
- 17 早稲田大学の設置者である学校法人早稲田大学が設置している学校は「附属校」（早稲田大学高等学院など）に位置づけられるが、異なる学校法人が設置している関連の深い学校は「系属校」に位置づけられている。例えば早稲田実業学校も「系属校」のひとつである。
- 18 肩書きはすべてヒアリング当時のもの。
- 19 なお、男子校であることに対する見解が興味深いので触れておく。共学化には現状では否定的で、中高の時期は別学が良いという大隈重信の考え方もあるが、思春期は女子の精神年齢が相対的に高く、男子がそれに従属して発達に影響を与えてしまう、共学にすると、様々な選択の場面でジェンダー的な負の発想が入り込んできてしまう（例：折り紙を男子がやること自体が生徒たちの間で忌避され選択の幅が狭まる）、実際に脳科学の分野でも別学の効用が証明されている事例があるといった声が聞かれた。

3. イギリスの学校

3. 1 ウィンチェスター校

(1) はじめに

ウィンチェスター校は、1382年にウィンチェスター寺院の主教、ウィリアム・オブ・ウィッカムによって創設された。イギリス最古の独立学校（インディペンデントスクール）とされ、現在も完全寄宿制を維持している男子校である。13歳から18歳の生徒が学んでいる。2015年度現在、生徒数は678名であり、学費は年額33,750ポンド（約665万円）である¹。学費については、日本の私立校に比して非常に高額な印象を受けるが、年額3万ポンドという額は、イギリスでは寄宿制学校（ボーディングスクール）では平均的な額であり、英国の通学制独立学校の約倍額となっている²。このような高額の学費は、アメリカやスイスの私立学校と同様、イギリスにおける独立学校の特徴である。また学費の高さは、パブリック・スクールを含む独立学校の存在に対して労働党政権から繰り返し批判を受ける、格好の材料となってきた。

さて報告者は、2013年6月10日ウィンチェスター校を訪問した。報告者単独で訪問し、面接調査を実施した。インタビュー協力者は元教員／元副学長であり、インタビュー当時、教務担当を務めていたA氏である。滞在時間の内訳は、2時間半程度であり、その間にインタビューを実施し、キャンパスの案内を受けた。面会時間終了後にも許可を頂き、校内の写真撮影を行うことができた。キャンパス内の建物は概ね歴史を感じさせる重厚な佇まいを見せており、開校当時の建造物も一部残っている。キャンパス内に屹立する石造りのチャペルは、何世紀にも渡ってこの地にウィンチェスター校が存在した証として、その日も重厚で荘厳な雰囲気漂わせていた。このチャペルは同校のシンボルであり、数世紀にわたる歴史の中で生徒を見守ってきたことを思うと、ウィンチェスターにおける教育の歴史的重みを感じ深く感じ入るばかりであった。

(2) 進学校としてのウィンチェスター校

当該校の最大の特徴は、極めて進学校としての特色の強い学校であるということである。パブリック・スクールにおける従来の役割である、いわゆる「紳士養成校」としての役割を果たしつつ、「進学準備校」としての要素も極めて強い学校であると結論付けられる。ウィンチェスター校が自校のウェブサイトにはリンクを貼付して紹介しているように、2014年度の最新情報によると、同校は英国全体の独立学校の中で第4位の成績を収めている³。この成績は、大学受験に必要なGCE・Aレベル試験において優秀な成績を収めた生徒数を全英の独立学校を対象にランキング化したものである。よりよい大学への入学を目標にし、極めてアカデミックな学問を重視する傾向の強い同校は、「進学準備校」としての役割も大きく、その意味で日本における進学校と類似する特徴を持った中等教育学校であると言える。

面接調査によると、ウィンチェスター校におけるカリキュラムが、ここ数年で変化が見られたということが分かった。カリキュラムポリシーは教務主任 (Director of Studies) と学長 (Headmaster) によって見直されているが、受験形態として、近年では様々な試験の選択肢が出てきた。たとえば Pre-U (Cambridge Pre-U) や IB (International Baccalaureate) が挙げられ、従来の A レベル、AS レベル、GCSE だけではなく、近年新たに出てきた様々な試験にもウィンチェスター校は積極的に対応している。シックスフォームに入る前の、16 歳に受験する公の試験である GCSE も、従来の GCSE に加え、より難易度の高い IGCSE (International GCSSE) も出てきており、同校は対応している。

しかしながら、テスト形式が変化したことで、テスト漬けになっていた学校生活から脱却することができた点について、A 氏は好意的な反応を示している。AS レベル試験や A レベル試験は従来年に 2 回受験することが可能なため、ウィンチェスター校では低学年から何回も受験することを推奨していた。そうすることで、必然的に学校生活がテスト漬けになっていたという。ところが、Cambridge Pre-U に対応するようになったことで、テスト漬けの学校生活がなくなった。Pre-U は一度しか受験できないシステムなので、生徒は 2 年間しっかり勉強したのち、同テストを受験することになると伺った。

A 氏によると、両親にとって息子をウィンチェスター校に入学させる理由は、それが最優秀の大学に入るための最良の方法であると考えているからである。大学進学準備のためだけではなく、もっと広い視野で教育の目的を考えなければならない、と A 氏は主張する。

「ウィンチェスター校に来る生徒のほとんどがオックス・ブリッジ⁴に合格することを目標にしている。したがって彼らに他にも非常に素晴らしい大学があることを説得するのは難しいという現状がある。しかし近年ではアメリカの IVY リーグとの結び付きも強く、1 学年 140 人のうち、数十人の学生をアメリカの大学へ送ろうと学校側は準備している」との内容から分かるように、イギリス国外の大学にも目が向けられるようになってきているようである。しかし現在、同校では、依然としてロンドン大学やいくつかの伝統的な大学、エジンバラ、ダーラム、ブリストルマンチェスター大学など伝統的大学を除いては、オックス・ブリッジへの希望者が多いという。現実にウィンチェスター校の卒業生のうち、3 分の 1 以上は依然オックス・ブリッジに合格している⁵。

このようなアカデミックな側面において強い特徴を持つウィンチェスター校であるが、リーダーシップ教育の側面からスポットを当てると、どのようなことが見えてくるのだろうか。

(3) ウィンチェスター校におけるリーダーシップ育成の考え

ウィンチェスター校においては、リーダーシップを育成する機会が非常に多いということが窺えた。面接調査では、スポーツ、音楽や美術などの情操教育、宗教、住環境に至るまで、リーダーシップと関連付けて話を訊くことができた。非常に学力増進や大学進学に

力点を置く学校でありながら、他の多くの独立学校と同様に、アカデミックな科目のみならず、スポーツにも積極的に取り組むことを推奨している。実際に、ウィンチェスター校の生徒は、どんなスポーツでもひとつ行う必要がある。人気があるスポーツは、夏はクリケットかテニス、冬はフットボールかラグビーであるが、必ずしもいわゆるリーダーシップ育成に資すると言われるチームスポーツを行う必要はない。なお、同校独自のウィンチェスターフットボールという競技もある。また、音楽も、スポーツ同様重要視しており、どちらがより大切かということはない、多くのスポーツ好きの生徒と同様、音楽の才能がある生徒も大勢いる、とのことである。⁶

音楽もスポーツも、リーダーシップと結び付けて考える際、ウィンチェスター校では、寄宿制であることが強調された。すなわち、いわゆるハウス・システム⁷がスポーツとリーダーシップになくしてはならない役割を果たしている。「1週間7日間、生徒・先生・寮長・寮母・チューター・チャプレン（牧師）が皆、学校内または学校周辺に住んでおり、そのような環境からメンバー全体で一丸となって非常に強固な結束が生まれてくるのが、リーダーシップと関係している。このような連帯感は、2時半に授業が終わる通学制の学校では到底養えないことでしょう」とA氏は強調した。

インタビューの中で改めて指摘されたことであるが、「学校生活にはハウス対抗の行事が多く、スポーツその他のイベントではハウス同士で対抗意識を燃やし、ハウス内の結束を高めています。このような環境からリーダーシップが発揮されていきます。学校外での対抗、すなわちウィンチェスター校代表の生徒として、あるいはイギリス代表の生徒として臨む大規模な競技の場合、たとえば科学オリンピックのような場合においても、賞の獲得は自然にハウス対抗になり、どのハウスの生徒が賞を獲ったから我々のハウスも頑張らなければならない、という思いにめいめいが駆られるのです」という回答があった。

一方、ハウスにおけるリーダーシップの育成には、上級生が下級生に指示し、上級生のリーダーシップと下級生のフォロアーシップを養うという構図ではなく、上級生がお手本を示すことによって下級生がその態度を自然に見習うという姿勢が大事である、という点についても指摘された。上級生が下級生にあれこれ命令を下すことがハウス・システムなのではなく、まず上級生が学習に対する姿勢にしても、スポーツにしてもお手本を示すことによって下級生がそれを真似していく。それによって下級生等を牽引していくリーダーシップが育成されていくことになるのである、との説明を受けた。すなわち、リーダーシップとは「ハウス間」のみならず「ハウス内」でも育成されていく2重構造になっていることがインタビューから把握した。

さらに、昨今における寄宿制独立学校における住環境の変化は、求められるリーダー像が異なることと関連している、との指摘もあった。すなわち、第二次世界大戦前では、当該校の特徴として粗食や冷たいシャワー、あるいは粗末なハウスの設備が挙げられ、そのような環境が生徒の人格やリーダーシップを養うという考え方があった⁸。しかし、現在で

は福利が行き届きた大変快適な生活に変化しているという。これはリーダーに求められる要素が変化したからであると考えられる、と A 氏は説明している。「19 世紀初頭から 20 世紀前半までの時代、英国独立学校は世界中の野蛮な地に、リーダーとなる生徒らを送り出してたため、精神的にも肉体的にも文字通り強靱で鍛錬され、大英帝国のために活躍できる人材育成が必要でした。しかし現代においては、そのころとはリーダーシップに求められるものが変化してきました。学校は快適な環境作りが求められており、施設・設備も改良され、変化しています。また、生徒自身は住環境の変化に無頓着かもしれませんが、母親が心配するために、学校はハウスの部屋の装飾等にも注意を払う必要が出てきているのです。21 世紀を生きる生徒らに望むことは、生涯教育の大切さや『美しさ』、『真実』といったものに反応していく力です。それらを育むには、やはりハウスでの生活がよいです。ハウスで共同生活する人間を尊重し合い、信頼し合う環境を育むべきであると考えます」と語られた。

このような A 氏の発言から、時代によって求められるものが異なるため、リーダーシップの育成も時代によって異なっているということが窺える。

さらに、宗教を学ぶことがリーダーシップ育成にとって重要かどうかという質問には、「全ての人間にとって、精神的成長（spiritual development）が必要であり、全ての人間が他人のことを考える時間が必要であるという考え方を持っています。素晴らしいリーダーというものは同時に素晴らしい人間性を持つ者であるべきです」との回答があった。キリスト教に限らず、どのような宗教を信じる者であっても必ず宗教の時間には参加しなければならないのが同校の方針である。これは神の存在について考えるということもあるが、他人を思いやる機会を作るという意味で非常に大切な時間として捉えられている。そしてそのコンセプトがリーダーシップを涵養することに関連づけられていると理解できた。

(4) おわりに

総じて、インタビューの中から、「学校生活で得られる全ての要素からリーダーシップの育成というものが可能であろう」との意見を頂いた。それは、たとえば前項で言及したような、スポーツや非アカデミックな科目、あるいはハウス・システムや宗教という点からリーダーシップが捉えられている点に反映されていると考えられる。しかし、より具体的にはウィンチェスターとリーダーシップの育成を結びつけるものとして、特に全寮制という学校形態から得られる密接な人間関係を強調されていた点が特徴的である。「ウィンチェスター校に学ぶことで何がリーダーシップの育成を助長するのか」という問いに対しては、「連帯感、生徒との結束、大人と生徒の結束、大人同士の結束、結束の固い人間関係」が挙げられた。完全寄宿制という性質上人間関係が密になるが、それは生徒間だけではなく、教職員を含む全体の結束力としてとらえられていた。ハウスマスターやアシスタントハウスマスター、チューター、寮母たちは家族単位で近所に住んでおり、家族ぐるみで生徒た

ちと交流があること、そして1週間7日間継続して接していること、このような生活自体がリーダーシップを育成していく要素として大きいものがある。

アカデミックな側面の強みや大学の進学先に注目が集まるウィンチェスター校であるが、リーダーシップ教育の側面から同校を捉えなおすと、アカデミックな科目から離れたバラエティに富むカリキュラムやアクティビティと、ボーディングスクールの特性を生かした強固な人間関係、結束力がリーダーシップの育成に首尾よく作用していることが分かった。

【引用文献】

古阪肇 (2014) 「英国独立学校と大学進学—「グレート・スクールズ」を中心に—

『早稲田教育評論第28巻第1号』早稲田大学教育総合研究所, 176頁。

Independent Schools Council, *Fees*, ISC Annual Census 2015, p.22.

Best Schools co uk (<http://www.best-schools.co.uk/>) <2015年11月15日>

Independent Schools Council (<http://www.isc.co.uk/search/?q=winchester+college>)

<2015年11月15日>

Winchester College (<http://www.winchestercollege.org/>) <2015年11月15日>

3. 2 イートン校 (Eton College)

(1) 基礎情報

【イートン校】	
創立年	1440年、彼らは1441年に創設されたケンブリッジ大学の King's College に進学
学校形態	完全寄宿制
男女比	男子校
学費	10,689ポンド (1学期あたり)、3学期制
学生数	1190人 (1961年度)、1320人 (2013年度)
卒業生	デヴィッド・キャメロン、カンタベリー司教、ケンブリッジ公ウィリアム

【イートン校】 ミッション	学校のモットー : May Eton Flourish
<ul style="list-style-type: none"> - 卓越性を追求する中で、最適な独立した考え方や学びの習慣を促進する - 全ての生徒が自分の強みを発見し、その才能をイートンの内外で活かすことを可能にする広範囲に渡る教育を提供する - 個性やちがいが、チームワークの重要性、全ての生徒が学校とコミュニティー生活に貢献することへの尊重を養う - 身体の健康、情緒面の成熟、豊かな精神を育てるパストラルケアを支援する 	

- 生徒の自信、熱意、根気、忍耐、として人格を育成する

【イートン校】入試方法

- 大多数の生徒が、13歳時点で入学し、イートン校で5年間を過ごす
- 11歳時点で、予備試験（pre-assessment）：面接、論理的思考に関する試験、小学校からの成績報告書
- 予備試験を受験し、条件付き入学許可を得た生徒は、13歳でパブリック・スクール共通入学試験（Common Entrance）を受験し、合格を経て入学
- 16歳時点（Sixth form）からの入学は可能ではあるが、限定的

【イートン校】音楽・芸術・演劇・スポーツ

音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・ 122名の音楽教員と音楽家が学校に所属（2015年現在） ・ 週に1000を超える音楽に関する授業 ・ 50%の生徒が楽器演奏を学び、3つの交響楽団、4つの聖歌隊、2つの楽団、ジャズバンド等がある。 ・ 生徒は「国家青少年楽団」（National Youth Orchestra）に頻繁に参加
演劇	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎年20以上の演劇を鑑賞する機会が提供される ・ AS/A level のTheater Study（カリキュラム内で、Fブロックの生徒は演劇の入門クラスを受け、E・Dブロックでは演劇のGCSEを選択が可能。演劇を専攻する生徒は、英文学と演劇の合同授業を選択し、Aレベルに到達することが可能） ・ 12名ほどの生徒は有名な演劇学校にも所属し、著名なエディンバラ・フリンジ・カンパニーには卒業生、在学生在が参画
芸術	<ul style="list-style-type: none"> ・ Drawing Schoolsにおいて、絵画制作・版画制作・コンピューターグラフィックス製作・デジタル写真製作の設備 ・ 毎年、芸術の旅が行われ、生徒が芸術に触れる機会を与える。その成果として、生徒は日記と写真・絵画製作を行う
スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ラグビー、サッカー、クリケット、テニス、アスレチックといった野外競技は新入生の必修活動 ・ 水泳やポロ、空手といった15のオプションが提供される

（2）ルイス校長との対談（John Lewis（1994～2002））

1) 概要

我校イートンは大変優れた学校です。1440年にヘンリー6世が70人の王の為の学者養成学校として設立しました。小規模の学校ですが大きな教会が付随しており、少しずつ規模が大きくなり、現在では1,280人の学生がいます。女生徒はいません。全員が寄宿生で、13歳で入学し18歳で卒業します。今日では殆ど全員が大学に進学し、多くはありませんが米国の大学に進学する生徒もいます。毎年卒業生250人の内60人から70人の学生がオ

ックス・ブリッジに進学しますが、他にも多くの優れたイギリスの大学がありますので、オックス・ブリッジが絶対だということではありません。60人、70人の生徒の保護者は外国在住ですが、その約半数は英国人の外国居住者です。イートンはこれら1,280人の生徒の教育以外に慈善財団でもあり、慈善目的の活動も行います。

ジョージ3世の時代に学校は大いに繁栄し、国王はウィンザー城で過ごすことも多く、イートンにも頻りに訪れ、城にも少年たちを招きました。学校はまたジョージ3世の誕生日の6月4日を休日にしていましたが、現在では、選ばれたシックスフォーム生のスピーチ、クリケットやボート、ピクニックの日となっています。

2) ハウス

寄宿舎での規律は厳しく、寄宿舎は25棟ありますが1棟に50人の生徒が寄宿しています。寄宿舎は小さな地域社会で、舎監がおり、軍隊のような経験をすることになります。規則はどのハウスも共通で、彼らは入寮日から寝室兼用の小さな個室を持ち、自分の生活は自分の責任で行うようになります。生徒たちは寮が自分の家（ハウス）であると教えられますが、然し各ハウスの舎監が独自のやり方で運営するため、独特の気風を各ハウスが醸し出しています。普通全寮制の学校では舎監1人と数名のチューターがいるのですが、他にここイートンでは「デーム」、他の学校では「メイトロン」と呼ばれている女性がアシスタントとして住んでいます。

3) 大学ではないのに、カレッジと呼ばれている

他の寮はみなハウスと呼ばれていて50人の生徒が住んでいますが、歴史的経緯により国王の教育用の70人の学者を育成するために設立されたハウスをここでは「カレッジ」と呼んでおり、これら最優秀の生徒から成るカレッジは、他のハウスとは雰囲気も異なりますね。

4) カリキュラム

イートンの生徒は他校と同じく、GCSE コースを3年間、A レベルを3年間勉強します。我々には選択の自由がありますが、国の統一カリキュラムに則り教えています。ウインチェスターでは国際的バカロレアを教えていますが、イートンでは教えていません。我々は良くも悪くも英国基準で教えています。

イートンの教育の特徴は、教室での厳しい授業以外に、公立学校と比較してかなり多くの可能性が生徒に開かれているということです。多様なスポーツ、音楽、演劇、同好会やクラブなどです。さらに家族から離れ自立し、他者との、あるいは、地域社会での生活を体験するということが特徴です。他人を理解することの重要性、共に行動することの重要性を体験することが彼らの人生の中で大きな意味を持つことになるのです。

学校ランキングが毎年出されますが、我々是我々の生徒のために良い仕事をしようとするだけで、他校と比較したくはありません。

5) イートン入学のための資格

イートン入学志願者は 11 歳時に試験と面接を受けます。合格すると生徒は「コンディショナル（条件付）」と呼ばれる位置に置かれ、13 歳で英国の他校と同じ様に共通試験を受けなければなりません。また筆記試験だけではなく、私（校長）はしませんが、ハウスマスターと教員が生徒の面接を行います。両親とは面接しませんよ。それらの過程で優秀であると判断されれば合格です。我々はイートンでの生徒の学業が成功することを願うと同時に、スポーツや音楽、演劇、あるいは良識ある人間として学校に貢献してくれることを期待しています。

社会階層に影響されることは全くありませんが、然しお金は重要ですね。誰かが学費を出さなければなりませんので。イートンでは、保護者が行き詰まった時には援助をしてきましたが、学費は必要条件です。

6) A レベル試験

A レベル試験の準備のために生徒は多忙を極め、そのため試験科目以外のことが出来なくなります。A レベル試験の改革は学業の幅を広げるためのものでしたが、結果として余り広がりませんでした。イギリスの生徒は結局のところ、3 科目か 4 科目しか中等教育では学びません。もし本当に幅を広げたいのであればもっと大幅な改革が必要ですが、然し難しいでしょう。英国の大学は非常に専門化されていますから。

7) 学校運営資金

授業料と生活費等は生徒の親が払います。他に、我々は投資をしており、それで奨学金などを賄っています。両親が払うものと長年の間に蓄積されたチャリティーでの資金を運用することで運営資金を賄っているのです。

(3) ハウスマスター・コリン・クックとの対談

1) イートンの目的

子息の入寮のときに来る両親に私が話すことは、「我々はお子さんの能力と興味を十分に評価し、出来るだけその能力を発揮できるように支援します」。さらに、「卒業時には自立した心と、他人を思いやる心を持つことが出来るようになること、そして、骨のある人間になることを願っています」とも伝えます。「骨」とは、「モラル」のことです。つまり、「悪いことは悪いといえること」です。あるいは「正しいことを正しい」と。しかし、ご両親が息子さんを連れてきた時に、「彼がリーダーになることを願っています」とはいいま

せん。リーダーになるべき人はイートンに沢山入ってくるし、また事実リーダーになります。しかし、社会には音楽家になる人、芸術家になる人、小説家、医者、教師などになる人がいなければなりません。

2) ハウスマスターの役割

平日の午前8時10分から8時30分まで毎日オフィス・アワーがあります。生徒は進んで来るとありますが、入学した年には様々な問題が出てくるのでできるだけ多くの生徒にアワーには来るようにと言っています。問題とは、他の生徒とうまく付き合えないことです。そこで、我々は静かに学校に同化するようにと非常に注意を払うのですが、それが強制となっていないことを願っていますが。

学校では常に誰かが誰かをいじめるという危険性があります。若者がいるところには常にいじめの問題がありますが、一方で強制は決して受け入れられないことも知っています。もしことが起きたら適切に対処しなければなりません。いじめが起きると、舎監や他の教員たちは素早く対処するようにしています。

(4) リトル校長との対談 (2014年にイートン校にて対談を実施)

リーダーシップ、それは学校の校風、学校の理念の中に組み込まれたものなのです。その要素をひとつだけ取り出して、これがリーダーシップだ、と示せるようなものではありません。そんなに簡単ではないのです。近年の教育で失敗だと思うのは、複雑に絡み合ったアイデアを細分化して簡単に扱えると考える傾向があることです。物事はそんなに上手くいきません。

生徒たちには立派になってほしいと思っていますが、特定の職業に就いてほしいというような具体的なものではありません。生徒たちが自分で決めることです。ですが、何にでも積極的に取り組むことができるという自信を持つことは大事です。

ちょうど毛糸玉と同じような感じで、ぼんやりしているけれど、リーダーシップは存在しているのです。イートンではリーダーシップ教育を行っていますが、この毛糸玉をほどいていく作業は非常に難しい。だからこそオンライン・コースを作ることは私たちにはびったりの作業でした。はっきり掴めなかったものを具体的に意識して言葉で表すという作業をしていくわけですから。これまで何年もやってきて当たり前だと思っていたことを再認識するわけです。

(5) 対談を終えて

「他人を理解することの重要性、共に行動することの重要性を体験することが彼らの人生の中で大きな意味を持つ」という言葉の中で、同情 (sympathy) だけではなく、共感 (empathy) することの重要性は他の PS でも幾度となく耳にしたことである。同情はで

きても、共感することは難しい。相手の立場に自らを置くことによって、相手を思い遣ることに繋がり、平和で安定した市民社会を形成することも可能となる。わたくし達も、忙しさに紛れて、あるいはそれを理由に相手の立場を理解することを忘れていないか。

カレッジは他のハウスと区別された最も優秀な生徒 70 名（各年度に 14 名募集）しか入学が認められない特別なハウスで、彼らは **Colleger** と呼ばれる。カレッジに住まない生徒は、**Oppidan** と呼ばれ、24 の **Oppidan** ハウスがあり、それぞれに約 50 人住んでいる。

校長の語ったように、英国の大学は非常に専門化されており、特定の学科以外の学生は通常 3 年間で卒業する。教養科目の授業はなく、教養は中等教育までで身につけることなのである。だからこそ、**PS** では学業だけではなく多様な経験を生徒に身につけさせるよう留意している。大学の素晴らしいところは、社会学者の **T・Becher** が語るころの、「大学は異なった部族や地域の集まり」であり、大学がその中に学部や学科の多様性を失ってしまえば、多元的見方も比較する視点も衰え、矮小化された人間が育っていかないか恐れるところである。他者を他者として認め、尊重するからこそ、イートンのルイス校長の「我々は我々の生徒のために良い仕事をしようとするだけで、他校と比較したくはありません」という言葉も生まれるのであり、これが学校、そして大学の本来あるべき姿なのだと痛感する。

3. 3 シュルーズベリー校

(1) はじめに

シュルーズベリー校 (**Shrewsbury School**) は 1552 年、国王エドワード 6 世による王室基金をもとにして設立された英国独立学校である⁹。2015 年現在、13 歳から 19 歳の生徒が学んでおり、生徒数は 765 名である¹⁰。寄宿生が 499 名、通学生が 121 名で構成された混合型のボーディングスクールである。学費は寄宿制の場合、年額 32,820 ポンド (約 614 万円)、通学生の場合、年額 22,980 ポンド (約 429 万円) である。同校は 21 世紀を迎え、伝統から革新へと方向を大きく転換させたパブリック・スクールであると言える。元来男子校であったが、創立から約 450 年の時を超えて段階的に女子を受け入れることとなった。2008 年にはシックスフォームで、また 2014 年からは 13 歳からの全学年において女子生徒の受け入れを実現させた。また、2003 年には海外校となるシュルーズベリー・インターナショナル・バンコクが創設され、3 歳から 18 歳までの生徒を受け入れている。

報告者は 2013 年 6 月 6 日、大佐古紀雄氏 (育英短期大学・准教授) とともにシュルーズベリー校を訪問し、インタビューを実施した。インタビュー協力者は校長 A 氏とフランス語主任 B 氏である。訪問時間の内訳は、前半が両氏へのインタビュー、後半はシックスフォーム生 3 名の案内で学校見学を行った。同 3 名はキャンパスツアーに加え、インタビューにも応じてくれた。さらに、インタビュー後に立ち寄ったカフェテリアにて、別の日

本人留学生からも学校生活について話を聞くことができた。同校の場合、予めこちらで用意した質問票にインタビュー当日回答文をつけて渡して頂いた。さらにそれを元にインタビューに応じて頂き、詳細については後程回答を精読するというスタイルを取った。

シュルーズベリー校は 1552 年当時からシュルーズベリーの地に創設されていたが、1882 年に、セヴァーン川の外側に位置する現在の立地にキャンパスが移転した。そのため、創立以来立地が変わらず、また正門もないイートン校やハーロウ校とは趣が異なる学校風景が広がっている。豪壮な鉄製の正門を構えており、校内も全体的に近代的な学校の印象を受けた。

(2) 現代事情への対応策が柔軟な伝統校

前項でも言及したが、シュルーズベリー校はパブリック・スクールの伝統校ザ・ナインの中でも、21 世紀になって大きな変革を遂げた学校である。その 2 つが、共学化と海外進出である。

まず、共学化であるが、ザ・ナインの中でも 13 歳から女子を受け入れる学校はラグビー校とシュルーズベリー校のみである。共学化について校長より以下のような見解を聞くことができた。

「第一に、受け入れの背景として、男女平等の時代が来ているということが挙げられます。そこで手始めにシックスフォームで女子を受け入れる取り組みを 2008 年に開始し、順を追って 2014 年にすべての学年で門戸開放する計画を立てたのです。第二に、女子生徒を全面的に受け入れることで数々のメリットが得られる点にも注目しました。具体的には特に、女子を受け入れると必然的に学校全体の学力が上がる点、生徒数が増えることによって構内での競争率も高まる点、さらに学校の経営にも有利であるという点が挙げられます。」

このように、段階的に女子生徒を受け入れる計画が練られ、2008 年度よりシックスフォームに男女共学を導入した。その結果大成功を収めたため、学校全体で共学導入を展開していく流れへと、自然に進むこととなったとのことであった。

ほぼ全てのフィーダー・スクール¹¹は共学であり、全ての大学も共学であり、当然会社に出ると男女共で形成された世界である。したがって、13-18 歳段階の生徒の共学校を提供することは理にかなっているというのが学校の主張である。またこの点は、現在子息同様子女にもシュルーズベリー校の教育を享受させることができる、多くの家族から歓迎されているとのことである。

次に、海外進出であるが、2003 年にタイの首都バンコクにおいて、シュルーズベリーインターナショナルスクールが開校した。非常に伝統的なパブリック・スクールであるザ・ナインの中で海外校を持つのは、2015 年現在、当該校とハーロウ校のみである。

海外進出の理由として次の回答が挙げた。「まず、同校のような他を牽引するような代

表的な独立学校は近年、いずれの学校もますます学費が高くなってきているので、国内だけでその額の支払いに耐えられる保護者を確保するのが難しいです。しかし同時に優秀な生徒を集めなければならないという現実があります。そこで海外へ目を向けることになりました。海外ではその両方、経済的にも裕福で知的にも条件を満たす子弟が多いのです¹²。」

現在、同校には留学生が 17%程度在籍している状況であるが、学長はさらなる増員を目指している。バンコク校校長は本家のシュルーズベリー校の元副校長であり、シュルーズベリーインターナショナルにはイギリス校の人材が幾人か携わっている。

経済的側面、知的人材収集の側面から、伝統的なパブリック・スクールといえども、優秀な人材の確保にはそれぞれ工夫が必要な時代になってきている。伝統的に家族が当該校で学んだから次の世代も自動的に入学できる時代ではなくなっており、生徒個人々の能力も重視されている。ハーロウ校については、より優秀な生徒を集めるためメディアも効果的に活用している¹³。

(3) シュルーズベリー校に見るリーダーシップ育成のカギ

リーダーシップの育成について、同校ではまずスポーツにおいて養われるリーダーシップを挙げている。校長の「シュルーズベリー校はスポーツに価値を置いた学校です。スポーツに従事することによって生徒は体力を増進させ、チームワーク、リーダーシップ、その他個人的資質を伸ばす機会を提供しているのです。在学中に、大学、その後の生涯を通して続けていきたいと思えるようなスポーツに生徒が出会えることを期待しています」という発言から、同校では、何より生徒がシュルーズベリーにおいて、スポーツの楽しさを見出すことが期待されている。その上で、スポーツを通して多くの場面で生徒のリーダーシップが発揮されることをインタビューの中で認識できた。それはキャプテンの役割を通してリーダーシップを涵養するという秩序だった場面で育まれることもある。あるいは試合中の真剣勝負において、強敵を前にした重圧の中で発揮するキャプテンのリーダーシップではなく、より砕けた場面においてチームのメンバーがリーダーシップを示すような場面で発揮されるものもある、との詳説を受けた。

このように、様々なスポーツの場面においてリーダーシップが育成されることをインタビュー中に伺うことができた。以上の見解は、校長自身の経歴とは無関係ではないと思われる。A氏は、オックスフォード大学在学中、ホッケーの大学代表選手であっただけでなく、クリケットとスカッシュ¹⁴の主将を務めていた。

では、スポーツ以外ではどうであろうか。シュルーズベリー校は、スポーツに限らず、生徒のリーダーシップ育成のため、またあらゆることに興味をもつ機会をひろく与えるため、できる限り多くことが学べるような選択肢を設けている。ただし、美術については絵画を課外活動で行うというより必須授業の中で学ぶようである¹⁵。

同校は、生徒が挑戦できるよう幅広い活動機会を提供しているが、多くの場合、それらは生徒がこのような学校でしか参加できないようなものであるという。音楽やその他芸術活動は、スポーツと同様、よりソフトスキル、すなわちチームワーク、リーダーシップ、問題解決能力を促進するものとして学校は捉えている。また音楽や演劇においては、特にハウスにおいて、ハウス対抗の演劇を指揮したり、コンサートを開催したりすることを通して、リーダーシップを養う機会を得ることができることがインタビューの中で語られた。

また、ハウス・システム¹⁶とリーダーシップの関係も深い。同システムは、シュルーズベリー校の根幹を成すものであるが、これがリーダーシップ育成に大きな役割を果たしているとの見解を得た。ハウス・システムはウィンチェスター校においても同様に重視されており、特に、全生徒の80%を占める寄宿生にとり、まさに学期中を通して彼らの住まいとなる。しかし各生徒にとって、所属するハウスは、単に住まいというだけでなく、彼らの重心 (centre of gravity) となる。同校は、約8割の生徒が寄宿生であるが、ハウスは寄宿するためのボーディングハウスの意味合いだけでなく、概念的に各生徒が所属するハウスも存在する。多くのボーディングスクールの場合、寄宿しているハウスと概念上のハウスが同じであるため、混乱を招きやすい存在である。

校長A氏の見解によると「ハウス・システムは、非常に重要なリーダーシップの機会を提供しています。これは年長の生徒がプリフェクト (監督生) の役割を担うことによって成立するものですが、一方、スポーツや討論などのハウス対抗のイベントにおいてチームを組織したり、キャプテンになったりする場合には年少の生徒にも当てはまることです」とのことであった。このように、統制された安全な環境で、できるだけ多くの生徒に対して、意識的にリーダーシップの技能や経験を伸ばしていく機会を提供していることが窺えた。なお、監督生制度 (prefect system)¹⁷は、パブリック・スクールの歴史において非常に特徴的な役割を果たしてきた存在であり、いわばパブリック・スクールの学校文化の一部であると言えるだろう。プリフェクトは現在も存在し、代表生徒の役割を通して、リーダーシップを育成していると考えられる。

リーダーシップについては、フォロアーシップとの関係を対にした見解が得られた。同校の中では、すべての生徒が平等にリーダーシップを発揮できるような機会が与えられているという。しかし必ずしも皆がリーダーシップを発揮できる必要はなく、それぞれ個々の性質に応じてリーダーシップやフォロアーシップを養っていくことが大切だという考え方である¹⁸。「他の生徒を牽引していくリーダータイプの子たちばかりではなく、生徒それぞれが持つ個性や特性は異なっています。特にプリフェクト (監督生) に選出されたり、スポーツのチームキャプテン、CCF (Combined Cadet Force : 軍事教練) のキャプテンに選ばれたりする子は明らかにリーダーシップを発揮することに向いている子たちです。しかし、そうでない生徒たちは、リーダーの意見を聞き、団体の中でチームワークを生かしながら、自分の得意な役割を果たしていくことで、たとえばハウス対抗の催事などに

力を発揮し、リーダーシップに類似する力を養っていくことができるのです」という回答からその点が裏付けられる。ハウスマスター（寮長）、プリフェクトを頂点とするハウス・システムや集団スポーツといった事柄だけでなく、音楽、芸術、演劇で才能を発揮したり、必ずしも社交的でなかったりする控えめなタイプであれば、例えば演劇の裏方を一生懸命に務めることで他の生徒と連帯感をもち、フォロアーシップを養うことができる。

このような理由があるため、それぞれの違った個性を持つ生徒が皆自分の適性を伸ばしていけるように、非常に幅広く用意したカリキュラムを提供することが肝要なのである。そしてそれが可能であるのが、同校のような代表的な独立学校の強みである。シュルーズベリー校の学校生活の中で、すべての生徒が自身の特性を生かしてリーダーシップやフォロアーシップを育成できるように工夫されている。

(4) おわりに

シュルーズベリー校では広範囲にわたる活動を提供し、より多くの生徒にリーダーシップを経験させる機会を意識的に与えているという点が特徴的である。それらの中にはプリフェクトの構造や野外活動、たとえば Duke of Edinburgh Award (エジンバラ公爵賞) の活動や CCF などが含まれる。またリーダーシップの概念のみならず、対になるフォロアーシップの概念も同様に重視されていることが窺えた。さらに、校長自らがハウス・システムを十分に理解し、リーダーシップの育成にうまく活用されていることもインタビューから知り得ることができた。

本校では校長自らに面接調査が実施できた意義は大きい。「リーダーシップというものは測定できる代物ではないが、生徒の卒業後を見越して最大限彼らをサポートしていく重責を担っている」と語った校長の言葉に重みを感じた調査であった。

【引用文献】

Independent Schools Council

(<http://www.isc.co.uk/schools/england/shropshire/shrewsbury/shrewsbury-school>)

<2015年11月15日>

Shrewsbury School (<http://www.shrewsbury.org.uk/page/fees>) <2015年11月15日>

3. 4 ウェストミンスター校

(1) 学校概要

ウェストミンスター校は、1560年に創設された英国独立学校である。現在シックスフォームにのみ女子生徒を受け入れている共学校である。ウェストミンスターの名前の通り、ロンドンの中心、ウェストミンスター地区にあり、キャンパスはウェストミンスター寺院

に隣接している。ウェストミンスター校とウェストミンスター寺院は渡り廊下でつながっており、キャパスから重厚な扉を開けて直接寺院へ入ることができる構造になっている。実際にウェストミンスター校の礼拝堂はウェストミンスター寺院であり、週 2 回の礼拝には生徒全員が同寺院に集合する。またウェストミンスター寺院のチャプレン（聖職者）がウェストミンスター校のパストラル（pastoral）制度の中心的役割を担っており、さらにウェストミンスター校の運営委員会の理事長を務めている。

歴史的にも両者のつながりは深く、ウェストミンスター校の起源はウェストミンスター寺院に所属するベネディクト会修道士によって創設された慈善学校にさかのぼる。1540 年に修道会が解体し、その後ヘンリー 8 世が当校の存続を法律で制定し、1560 年、エリザベス I 世が 1 同校の後援者として新たにウェストミンスター校を開校した¹⁹。

ウェストミンスター校には、2015 年現在 741 名が在籍しており、全体の約 4 分の 3 が通学生である。募集人数は 13 歳入学が男子 120 名程度、16 歳のシックスフォームでの入学が男女で 70 名程度となっている²⁰。学費については、他のザ・ナインと差異はないが、通学生では、奨学生を除く一般学生の場合、シックスフォームの方がそれ以前の学年より若干高額な点が挙げられる。学費については 2015 年現在、寄宿制は年額 35,058 ポンド（年間約 655 万円）、通学生は、それぞれ 13-16 歳が 24,276 ポンド（約 454 万円）、シックスフォーム生が 26,322 ポンド（約 492 万円）である²¹。

報告者は、2014 年 11 月 4 日、秦由美子氏（広島大学・教授）とウェストミンスター校を訪問し、面接調査を実施した。インタビュー協力者は主に教務主任（Director of Studies）の A 氏である。また、上級教員（Senior Master）でフランス語やパストラルケアを担当している B 氏も部分的に同席して頂いた。インタビューは、学校見学、昼食とその後のラウンジでの休憩を、挟んだ前後に A 氏の研究室で行われた。秦氏と筆者は、すべての過程に同行しており、それぞれの場所で適宜両氏にインタビューを実施することができた。

（2）「大学進学準備校」としてのウェストミンスター

ウェストミンスター校は、いわゆる大学受験に強いパブリック・スクールである。ザ・ナインの中でも最もオックスフォード大学あるいはケンブリッジ大学の合格率が高い学校であり、2013 年度現在のデータによると、卒業生の約 45%がいずれかの大学に合格している（古阪、2014）。また英国政府が発表した 2015 年度のリーグテーブル（成績順位表）をテレグラフ紙が分析した結果、GCE・A レベル試験の成績が全英の独立学校の中で第 3 位であった²²。実際に、インタビューにおいても、A 氏から次のような説明があった。

「私たちの学校には 13 歳で男子 120 人入学してきます。その後、16 歳の生徒は GCSE を受験します。16 歳で新たに 70-75 人の生徒が入学してきますが、この時は女子の方が多いです。190-195 人のシックスフォーム生がいるということになります。毎年 20-25 人がアメリカの大学へ行きますが、この数はここ 5 年で伸びてきています。学年 40-50%

の生徒、つまり 80-85 人はオックスフォードかケンブリッジ大学に合格し、その他はラッセルグループを中心とした有名大学、たとえばインペリアル、LSE、UCL、ブリストル、ダーラム等へ進学します。」

上記の発言について、開示されている同校の情報において裏打ちされた数字が、上記内容から確認できる。また、2012 年度の学校案内の付録によると、オックス・ブリッジ以外の英国内の大学への進学者は概ね 1~3 名の少人数である。同じく、アメリカの大学への進学者も、各 1 名程度であるが、Harvard や Yale、MIT を含むアイビーリーグがほとんどである。

しかし、アカデミックな科目の強みや大学進学の結果に対する実績があるからか、インタビューにおいては、スポーツや芸術活動への積極的な取り込みといった、アカデミック以外の部分における要素が強調されていた。この点は現在リニューアルされている当校のウェブサイトにおいても、同傾向が窺える²³。

このようなアカデミックな側面に強みのある学校で気になる点は、大学受験に備えた学問とそれ以外の部分における、いわゆる両立のしくみである。A氏はインタビューの中で次のように発言している。

「週に 2 回はカリキュラムで午後スポーツ (games) を行うことが奨励されていますし、実際生徒はそれをやりたがっています。もちろんテストがあるときはテストを優先させて勉強します。シックスフォーマーはハウス対抗の演劇や学問コンクール (study contest) に参加します。彼らは勉強以外のことをあきらめているわけではありません。」

また、学問とそれ以外における生活バランスや両立の難しさについて質問したところ、以下のような見解を述べられた。

「両立の難しさはあるかもしれませんが。特にシックスフォームの生徒にとっては難しいと思われる。シックスフォームから当校に入学した生徒は、前の学校よりもっと求められることが多いでしょう。しかし求められていることを全てこなしていかなければなりません。(中略) 物事の優先順位のつけ方を学んでいくのです。すべての生徒にはチューターがおり、またハウスマスターがいます。彼らが個別対応をしてくれるので、それぞれの生徒は何をしたいのか、これからどの方向に進んでいくべきかについて話し合うのです。」

このエピソードからは、生徒の生活バランスを図る上で、学校側が万全のサポート体制を整えていることが窺える。本インタビューでは、生徒目線だけではなく、教員目線からどのように生徒のサポートを行っていくか、という視点の重要性について気づかされることが多かった。

(3) 非アカデミックな側面と学校生活を構成する 3 大要素

A 氏への質問に、ウェストミンスター校の主目的は生徒をトップ校へ入学させることかどうかを伺ったところ、そう期待したいと断った上で、大学入学に直接関係のない勉強以

外の側面にも、いかに懸命に取り組んでいるかについて話を聞くことができた。

「座席に座って4科目のAレベルや10-12科目のGCSEの勉強に励む他に、スポーツや音楽も盛んです。非常に多くの生徒が楽器を習っていますし、アンサンブル、オーケストラ、合唱や多くの演劇も行われています。また低学年の生徒は毎週放課後にクラブ活動を3、4種類しています。それらは実に様々でスポーツ、文化部、語学系などあります。学習系のクラブは素晴らしいですよ」という回答であった。

一方、B氏へのインタビューにおいて、ウェストミンスター校における三本柱について伺った。それが、①アカデミック、②課外活動、③パストラル、である。

①については前項で言及したことであるが、②については、文脈上、音楽や演劇、コミュニティサービスと呼ばれる福祉活動・ボランティア活動、そしてクラブ活動等を包含するものである。そして③については、生徒に対する身体的、精神的、宗教的な要素を含むサポートを意味するものである。

この②に当てはまるものが、まさに先にA氏に伺っていた内容と一致している。机上の学問を懸命にこなしているからこそ、ウェストミンスターでは、それ以外の活動も積極的に推進していると解釈することができる。同じくB氏は、当該校がスポーツ、音楽、芸術、コミュニティサービスに注力していることを踏まえた上で、期待する生徒像として「独立した人間、どのようなことも一人で考え、行動できる人間」と回答している。そして、独立した人間を育成するために、ウェストミンスター校の教員が生徒に接する際、**spoon feeding**（自立心を奪うような過保護な接し方）を避けることが必要であるとの見解を示された。この考え方は、結果的に生徒一人ひとりがリーダーシップの涵養を促進することにつながると推察できる。一方的に解決方法を教示するのではなく、まず自ら思考し、試行錯誤し、答えを導くという過程は、自ら考え、自ら行動することを意味するものである。これはすなわち、他人から言われるのを受動的に待つのではなく、能動的に自分自身が行動し、他者を牽引していくという結果につながることである。

では、③で言われている生徒のサポートとはどのようなものであろうか。パストラルで示される英語は、イギリスにおける学校教育の現場では **pastoral care** という用語で親しまれている。ウェストミンスター校においても学校案内やウェブサイトにおいてその重要性が記載されている。しかし、パストラルケアの解釈・範疇はその用語を使用する個人・団体によって異なっており、日本では「青少年がその生活・成長の過程で横道に迷いこむことのないように世話し援助すること」という解釈が代表的であろう（藤田、1997）。

B氏にパストラルケアとはどのような意味で使用され、またその範囲はどこまでかと問うたところ、すぐに明確な回答が得られた。「パストラルケアを考えるにはまず『自分は自分自身のことを今どのように感じるか』を自問することが大切です。幸福かどうか、幸福でないなら何が原因か。親しい人が亡くなったことで悲しいのか、勉強を通して親と確執があるのが悲しいのか、そのようなときにその人に寄り添ってサポートしてあげることが

パストラルケアなのです。だから福祉的 (welfare)、精神的 (mental)、身体的 (physical)、学問的 (academic)、宗教的 (spiritual)、色々な面における範囲がすべて含まれているのです」というものであった。生徒に対する spoon-feeding を行ってしまうと自立心やリーダーシップの涵養に影響が出るが、一方で、教師の生徒に対するケア基盤が非常に強固なものであることが窺える内容であった。

(4) おわりに ～理想的な生徒像からリーダーシップを考える

本報告書では各校へのインタビューから重点的にリーダーシップの育成について取り上げている。しかしながら、筆者が訪問したウィンチェスター校やハロウ校に比して、ウェストミンスター校では、インタビューの中でリーダーシップの育成やリーダーシップ教育について特に強調して伺うことができなかった。また、リーダーシップという言葉を直接的に聞くこともなかった。

だが、ザ・ナインの他校と同様に、生徒にリーダーシップを育成する機会が与えられていることは明白である。その代表例として、代表生徒の存在が挙げられる。本校では、代表生徒の選出方法やどのような生徒が代表生徒としてふさわしいかについて伺うことができた。

また、どのような生徒が代表生徒としてふさわしいかについては、「多才な人」という回答が挙がった。「すなわち、アカデミックだけでなく、スポーツや音楽、演劇にも貢献してきた人です」との説明が続いた。代表生徒として実際に今まで選出されてきた人物の傾向を「多才な人＝多くのことができる人」という言葉で示された。そして能力や行動力といった外面的な要素に加え、「人格がよい人、信頼できる人、責任感が強い人」という内面的な要素も加えられた。これだけの条件を概観すると、端的に「あらゆる要素から理想的な人物」が求められていると推察できる。しかし重要な点は、A氏が次に言ったことに示されている。

「それぞれの生徒が自立し、自分で物事を考えられる人材を育てたいと考えているため、代表生徒は必要です。しかし、それぞれが理想的だとしても、お互いがマネをする必要はないと考えています。各自がそれぞれ自分で考えて行動できることが大切なのです。自信を持ち、他者の立場から多角的に考えられる人、問題解決に向けて討論ができる人がよいのです。」

代表生徒には、Headboy、Headgirl、Monitors、Peer supportersに加えて各ハウスにHouse of Headがいる。またMonitorは20人を擁しており、それぞれが責任ある立場を任せられ、リーダーシップ育成の機会を得ている。だが、当該校では他生徒が真似をすべき模範生を理想とするより、それぞれが独立した人間になることが望ましいと考えられている。リーダーシップを養成する際も他生徒を見て他生徒を牽引するのではなく、自ら考えてリードしていくことが求められていると考察できる。この点にウェストミンスターら

しさが窺える。

最後に、生徒全体に対して言えることとして次の内容を紹介する。インタビューの中で「ウェストミンスター校の生徒を形容する言葉として校長は『Loyal Descent』（「忠実なる血統」）という表現をしています。ウェストミンスター生の一員であることに誇りを持ち、物事を成し遂げようとすることを目標としています」というくだりがあった。この校長の言葉から、代表生徒のみならずウェストミンスター校生全員が、独立心を抱きながらも同校への帰属意識を大切に、アクションを起こすことを期待されていると解釈できる。そしてそのために、やはり各生徒がリーダーシップを育成していくことが肝要である、という結論に至った。

藤田英典（1997）『教育改革』 岩波新書、156 頁。

古阪肇（2014）「英国独立学校と大学進学 —『グレート・スクールズ』を中心に」早稲田教育評論第 28 巻第 1 号、172 頁。

Westminster School; Further information 2013/2014, *Leavers' destinations 2012*, p19. *The Telegraph*, 22 August 2015.

Independent Schools Council

(<http://www.isc.co.uk/schools/england/london-area/westminster/westminster-school/>)

<2015 年 11 月 19 日>

Westminster School (<https://www.westminster.org.uk/>) <2015 年 11 月 19 日>

3. 5 マーチャント・テイラーズ校 (Merchant Taylor's School)

(1) 基礎情報

【マーチャント・テイラーズ校】	
創立年	1561年創立
学校形態	通学制
男女比	男子校
学費	4,998 ポンドから 6,664 ポンド (1 学期あたり)
学生数	600 人 (1961 年度) 872 人 (2013 年度)

【マーチャント・テイラーズ校】 ミッション 学校のモットー : Concordis Parvae Res Crescunt (Small things grow in Harmony)
- 幅広いカリキュラムと多様な経験を通じて、生徒の才能を発見、発展させることを追求
- それによって彼らを、自信を持ち、自発的で高いレベルを備えた学習者として育て、正

しい行動と、他人を尊重する配慮を持った人間、確かな価値観を持ち、急速に変化する21世紀のグローバル社会で活躍するとして育てること

- 学術に焦点を置いた、総合的な学校であるが、学術的な成果目標は、試験に合格することのみではない
- 独立した探究と知的な好奇心、豊かな精神的な覚醒と、身体的な健やかさ、芸術への愛、個性の育成と友人や社会への責任感を促進する

【マーチャント・テイラーズ校】入試方法

- 11歳時での入学が約60から80名、13歳時で約100名、16歳時での入学も定員は決められていないが可能
- 11歳時での入学試験では、英語、数学、論理（Verbal Reasoning）の試験に加え面接試験が課される。13歳時での入学試験では、事前面接と、CE科目（ラテン語に関しては選択）の試験が課される。16歳時での入学試験では、各科目の筆記試験と面接が課される

【マーチャント・テイラーズ校】カリキュラム

A level もしくは AS Level 科目：

美術／デザイン 生物学 科学 コンピューター 装飾・服飾技術 経済 英語 英語と英文学 英文学 フランス語 高等数学 地理学 ドイツ語 政治学 ギリシャ語 歴史 ラテン語 数学 音楽 物理学 体育 心理学 宗教学 スペイン語 演劇 GE
Extended Project Qualification

GCSE もしくは IGCSE 科目：

（必須科目）英語 英語と英文学 英文学 フランス語 数学 物理学 生物学 化学
（選択科目）地理学 政治学 ラテン語 ギリシャ語 ドイツ語 スペイン語 デザイン・テクノロジー 美術／デザイン 歴史 地理 音楽 宗教学 コンピューター ICT 体育 演劇

【マーチャント・テイラーズ校】音楽・芸術・演劇・スポーツ

音楽	<ul style="list-style-type: none"> - カリキュラム外で、多様な音楽活動に参加することができる。22のアンサンブルと28名の音楽教員が在籍 - 学期中は、ほぼ毎週、コンサートもしくは音楽に関連したイベントを開催 - 生徒の約三分の一は楽器を演奏し、他の生徒はコーラス団に入っている
演劇	<ul style="list-style-type: none"> - 生徒は、役者や演出や監督、技術役として演劇に関わることが可能 - 毎年、7から8の演劇が行われる - LAMDA Speechや演劇の授業の提供がある

スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> - スポーツは、人格・モラル教育の手段として、マーチャント・テイラーズ校 (MTS) の教育の中心と捉えられている <p>【学校としてチームがあるスポーツ】</p> <p>陸上、バスケットボール、クリケット、fives、ゴルフ、ホッケー、ラグビー、柔道、ヨット、射撃、サッカー、スカッシュ、水泳、テニス</p> <p>【UK Centre of Excellence としてMTSが認められている種目】</p> <p>ハンドボース、バトミントン、サイクリング、croquet、クロスカントリー等</p>
------	---

【マーチャント・テイラーズ校】卒業後の進路	
-	<p>16%オックス・ブリッジに進学し、25%がギャップイヤーをとる</p> <p>15%医歯薬・獣医学系、20%科学・工学、41%人文社会学（経済学を含む）、10%法学、5%芸術・デザイン・音楽、1%複合学位</p> <p>以下の大学に進学する生徒が多い： Cambridge、Oxford、UCL、Imperial、LSE、Nottingham、Birmingham、Warwick、Durham、Bristol</p>

【マーチャント・テイラーズ校】寮制度	
-	<p>8つのHouseがある。</p> <p>Andrewes、Clive、Hilles、Manoof the Rose、Mulcaster、Spenser、Walter、White</p> <p>【House Tutor 制度】</p> <p>8つのHouseがパストラルケアと、学術指導の中心となっている。生徒の入学時に、教員の中からチューターが選ばれ、学校生活全般においてケアを受ける。チューターは、毎週木曜日の朝に25分間生徒と面談をする。各チューターが受け持つ生徒の数は、最大で14名で、各学年から2名以上の生徒が同じチューターの担当になる。</p>

(教員と担当生徒の比率は、シックスフォーム以上は、約 1 対 14 で、それ以下は 1 対 24)

(2) エヴァーソン校長 (Simon Everson) との対談

1) 日本

日本へはJETプログラムで行きましたよ。妙高高原の中学校で1年間勤務しました。ですので、日本の教育の知識も少しはあります。日本の学校で働いたことはとても良い経験になりました。英国の学校とはとても違いますね。一クラスの生徒数がイギリスよりずっと多いですし、教育に対する姿勢も生徒たちへのアプローチにも文化的な違いを感じましたが、とても楽しかったです。心に残る経験で、私のキャリアにもプラスになったと思っています。日本に行くことは私自身が希望していました。JETスキームに登録し、希望を聞かれた際には「日本でいちばん僻地へ派遣してください」と頼んだのです。日本の実態を

見たかったからです。例えば、東京もいいなと思うし、行ったこともあります。もっと田舎で、日本語を話さざるを得ないような、日本の文化が学べるようなところの方が絶対にいいと思ったからです。

2) マーチャント・テイラーズが育てる生徒

ベンは新たに本校に着任しましたが、彼は私たちが目指しているものを代表していると思います。彼は学ぶことの本質を教えてください、生徒に対しても、また我々に対しても大きな熱意を湧き起こしてくれました。生徒たちには広い範囲で、力の限り最高のレベルを目指してほしいと思っています。生徒たちへの教育を限られた、浅いものにはしたくありません。生徒たちには、スポーツや音楽、演劇、地域での活動など、幅広い様々な経験をしてもらいたいです。そして完成された立派な大人になり、多様な人との強いつながりを形成し、いろんな世界で貢献するような人になってほしいと願っています。生徒たちにとっても高い期待をしていますし、もちろん最高のアカデミック教育を実施しています。

3) 教員

ベンは私立ではなく公立学校出身ですが、教員を選ぶ際には学力面での能力を非常に重視します。それが何より基本的なことですが、同時に子供が好きであること、熱意を持って相手とコミュニケーションをとることが好きであることも重要です。ちょっと突飛な感じの人、面白い人でもいいし、外見はどんな感じでもいいですが、知識が豊富で、意欲的に人とコミュニケーションでき、若い人と一緒に楽しくやっていける人を求めています。それが大事だと思っています。

先生の採用の流れを説明しますと、例えば地理学科の教師の面接をするのであれば、私も面接に立ち会います。ベンも、パストラル関係を担当している副校長も面接に参加します。教科主任も選考に関わります。そして面接に来た教師を見て、人とどのようコミュニケーションするか、模擬授業をさせてクラスではどんな感じなのかを見ます。それが大切なポイントです。

最終段階で、私たちはこの校長室に集まり、それぞれ感想や思ったことを話し合います。もし教科主任がその人を気に入らなかつたら、不採用とする公算が大きいです。しかし、もし反対されても私が「いい」と思った人は、ひとまず推そうと試みます。「いや、この人を採るべきだ」とは言いませんけどね。「不採用ですか、でもこの人のこのクオリティを見ましたか？」という程度のことは言いますね。でもこれまでは大体皆で合意しています。皆に共通の目指すものがあれば、つまり、学校の価値観を共有していれば、教師の採用についても自然に同じ意見をもつことが多いです。採用に関しては意見が割れて困ったことは余りありませんね。

教師は生徒にこうしてほしいという模範となるよう希望していますし、生徒は教師を

慕ってほしいです。生徒も楽しく様々な活動に活発に従事してもらいたいですから。ですので、教師が応募してきた際には、「歴史の先生を希望だそうですが、他には何ができますか？」と尋ねます。面接では、学校に教育以外にどのような貢献ができるのかを探ります。8割の教員がスポーツチームを担当するというのは、他校では見られない割合です。

4) 希望する生徒

どんな生徒にこちらの学校に来てほしいですか？

去年ですが、生徒を募集し始めた時、まず着手したのが先生たちとの相談でした。じっくり話し合っ、それから理事会にその内容を伝えました。できるだけいろんな要素を盛り込んで、その後2つの質問を自分自身に問いました。それは、「良い先生とはどんな先生だろうか？」ということと、「生徒は先生に何を求めるだろうか、クラスではどんなふうに行動したのだろうか？」というものでした。もし先生がうまく教えていたら私たちは何を見るだろうかということ。それから自らに問いかけました。「私たちは生徒たちに何を求めるだろうか?」、「どんな若者を求めているのだろうか?」と。そして最初の本質的な問いに戻るわけです。つまり、クラスで我々が求めている質は何か、理想の若者を求めている時に、今行っている選考方法は果たして妥当なのか、面接のやり方は正しいのだろうか、という疑問が湧いてきたのです。我々には熱意があり、真面目に学習に取り組み、何かに一生懸命で、先生とちゃんとコミュニケーションがとれて、教えやすい生徒を求めています。そこで、生徒たちに、自由に解答ができる質問を、正解も不正解もない質問を出して、状況をいかに把握し、与えられた情報を使って、様々な解釈をし、展開して答えを出させるようにしたのです。私たちが求めているのは、柔軟で、知識をどんどん吸収し、熱意のある生徒、クラスと一緒にいると楽しい子供たちなのです。

例えば、学習面はとても優秀だが、コミュニケーションに問題のある生徒がいた場合には、そういう子どもたちにも彼らが興味あるものを引き出し、能力と興味があるならそれを伸ばしてあげようと考えています。例えば面接の時、何に興味があるかを聞きます。マンガだったら、それを話題にして会話を始めるきっかけにします。とても内向的な子だったら途中で会話が終わってしまいますが、そこで質問を出すのです。教えやすい子かどうか判断できます。教師に自ら寄り沿ってきてくれ、一緒に活動しようとする姿勢の生徒を、我々は求めているのです。

5) 受け身の生徒は要りません (ホラン教師の発言)

私たちは受け身の生徒は要らない、というのは言い過ぎではないと思っています。なんにでも積極的にかわり、スポンジのように知識を吸収してくれればいいと思っています。でもそれよりもっと先の、得た知識や情報をいかに役立てるか、学習したことをどのようにしっかり身につけ、他の人たちと共有し、学んでいくかということを見ることに、とて

も意味があると思うのです。でも内向的な人は人に教えたり与えたりしないので、私たちが求めている生徒像ではありませんね。

6) 仲間とスポーツ

ランチアワーは長く、「アワー」と呼んでいますが、75分です。全生徒を収容できる大きなホールがあり、集会やランチタイムに使用しています。生徒も教員全員揃って一緒に食べます。それから水曜日の午後は全生徒が外に出てスポーツをします。生徒も教員もみんな、スポーツに勤しむのです。一緒に運動することで、教員と生徒のつながりが強くなると思います。水曜日の午後と、月曜日と木曜日の放課後、それから土曜日はチームに入っている子が、スポーツチームで活動します。

また、多くのスポーツクラブが、学校が始まる前に活動しています。トップチームは始業時間前や休憩時間に週2~3回練習します。当校のチームにはトップチームのAチームからレベルの低いEチームまでありますが、どのレベルであろうと積極的に参加して学校を代表してほしいと思っています。スクールカラーのユニフォームを着、学校のために試合に出、一部員として頑張してほしいのです。トップレベルでなくてもいいと考えています。

本校においては、スポーツの役割は非常に重要だと考えています。スポーツの経験を通して、非常に幅広いものを身につけることができます。まずはリーダーシップですが、必ずしもキャプテンだけが身につけるわけではありません。チームのリーダーシップはチーム全体、そしてそれぞれ違う個人が集まって、お互いを高め、それぞれが才能を発揮し、結束するのです。特にラグビーは、メンバーが責任を共有し、リーダーシップを共有しなければならぬスポーツです。ラグビーはお互いをフォローし合わないといけません。サッカーは、試合に勝つためにはもっと個人がそれぞれの能力を発揮しないとイケないスポーツです。でも求められるのはリーダーシップだけではありません。チームの一員として協力する能力、他のメンバーをサポートすることも大事です。お分かりいただけますよね。楽しさを共有できることです。勇気も要ります。勝っても負けても受け入れることができる広い心を持つことが大切です。知的活動と身体的活動をバランスよくこなしていくことは、若い人にとってとても重要なことだと思います。

わたくし個人としては、個人スポーツよりもチームスポーツの方が好きです。でも当校では個人スポーツもやっています。スポーツに関して、私が大切だと思うことは、スポーツをすることによって、いろんな価値観を身につけ、良い経験や思い出を分かち合い、年老いてもずっと仲間としてのつながりを持ち、心に残った試合を思い出し、いろんな出来事を語り合えるということです。スポーツには仲間がいるのです。競技場で生まれた価値観、経験をずっと仲間と共有し続けることは素晴らしいと思います。

また、保護者の協力も大変重要です。毎週土曜日はチームの手伝いに行くのですが、保護者たちもおり、そこで保護者の方々は気軽に私に心配事や質問などしてくれます。生徒

たちの試合を一緒に応援することで、先生と保護者と生徒という関係から次段階のレベルの関係が築けるのです。普段とはちがう先生たちの姿や、得点してジャンプしながら喜ぶ校長の姿を見て親近感を覚えるのです。

スポーツが寄与するところは大きいと思います。スポーツが学校と同窓生の絆を深めます。

3. 6 ラグビー校 (Rugby School)

(1) 基本情報

【ラグビー校】											
創立年	1567年										
学校形態	寄宿制・通学制										
男女比	共学										
学費 (1学期)	寄宿生(学期): £9,725 通学生(学期): £3,570 - £6,060										
学生数	<table border="0"> <tr> <td>全体: 798名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>男子学生</td> <td>女子学生</td> </tr> <tr> <td>寄宿生: 13・18歳(371名)</td> <td>寄宿生: 13・18歳(277名)</td> </tr> <tr> <td>通学生: 11・18歳(80名)</td> <td>通学生: 11・18歳(70名)</td> </tr> <tr> <td>Sixth form: 190名</td> <td>Sixth form: 164名</td> </tr> </table>	全体: 798名		男子学生	女子学生	寄宿生: 13・18歳(371名)	寄宿生: 13・18歳(277名)	通学生: 11・18歳(80名)	通学生: 11・18歳(70名)	Sixth form: 190名	Sixth form: 164名
全体: 798名											
男子学生	女子学生										
寄宿生: 13・18歳(371名)	寄宿生: 13・18歳(277名)										
通学生: 11・18歳(80名)	通学生: 11・18歳(70名)										
Sixth form: 190名	Sixth form: 164名										

【ラグビー校】 ミッション
<p>By praying, by working</p> <ul style="list-style-type: none"> 学術的な卓越性への挑戦、責任感とリーダーシップ、精神的な自覚、幅広い活動への参加を推進する教育コミュニティである。 学術的な卓越性は重要であるが、共にある価値観は更に重要と考える。 ラグビー校で、少年少女は、彼らのアイデンティティと強みを探究し、彼らが個々の才能を成果へとつなげるために役立つ手助けを得る。その成果は、急速に複雑化する社会で彼らを尊重され、尊敬される存在にする。

【ラグビー校】 入試方法
<p>Year 7 (11+) では通学生の生徒のみを受け入れ、また、Year 9 (13+) と Year 12 (16+) からの入学が可能</p> <ul style="list-style-type: none"> Year 7 (11+) では、筆記試験(国語と算数)に加え、与えられたテーマに対する300語の作文(creative writing)が課される。また、面接試験も行われる。 Year 9 (13+) では、学校の成績表とverbal reasoning test (VRT) 試験結果による選抜後、面接による選抜が行われる。 Year 12 (16+) では、GCSEの得点、もしくは、それに相当する海外の試験結果が評価の対象(6のGCSEにおいて、少なくとも3のA評価、3のB評価が必須)

【ラグビー校】 カリキュラム	
クリエイティブアート／デザイン 古典 演劇 経済／ビジネス 英語 Extended Project 地理学 政治学 IT 数学 フランス語 ドイツ語 スペイン語 音楽 体育 PSHEe (Personal, Social, Health & Economic Education) 宗教学 生物学 化学 物理学 政治や自然科学等に関して。多数の学会（ソサイエティ）が開催される	

【ラグビー校】 音楽・芸術・演劇・スポーツ	
音楽	器楽や声楽、聴覚や理論の指導、Sight-reading and sight-singingの技術、室内楽団、オーケストラ、合唱、ジャズやロック、演劇音楽、作曲、学問としての音楽、chapel tradition、オルガン、コーラスの奨学金を目指す生徒のための設備がある。
演劇	毎年、Trinity termの最終週に3日間の芸術祭 - Rugby School Arts Festival を開催し、多数の生徒が参加する。
芸術	記載なし
スポーツ	主なスポーツの試合は、火曜日と土曜日に行われるが、平日の午後にはコーチによるスポーツの指導が行われる。学期毎に提供されるスポーツから選択 第一種目 (Major games) 男子生徒：ラグビー、ホッケー、サッカー、クリケット、テニス、陸上 女子生徒：ホッケー、ネットボール、テニス、ラウンダーズ、陸上 第二種目 (Option Stations) バトミントン、バスケットボール、クロスカントリー、fives、ゴルフ、ポロ、ラケットボール、ラグビー7's、ヨット、スカッシュ、水泳、水上ポロ

(2) グリーン校長の言葉

「ラグビー校の偉大なる校長、トマス・アーノルドの教えを継承していくことが重要である。アーノルド博士は、「教育」こそが人生を変えることができることを認識しており、その「教育」とは、「第一に宗教とモラル、第二にジェントルマンとしての振る舞い、第三に学業である」と語っている。つまり、教育は学業成績の結果以上のもので、人格を形作るものなのだ。最も重要な事は、学究的卓越性を育成することと個々人の才能を養成することである。つまり、生徒は教育によって、自己の潜在能力を最大限にする術を備え、自己の特異な才能を開花させることができるのである。アーノルド博士は「思いやりのある知恵 (humane wisdom)」を信頼していたが、この知恵こそが今日においてもラグビー校を特徴づけているのである (校長の言葉、ラグビー校 HP より)」

(3) ハンプトン副校長 (Neil Hampton)

1) ハウス

9歳から11歳までの生徒が通う学校を Lower school と呼んでおり、Upper school は12歳と13歳の生徒から構成されています。11歳の終わりに GCSE の試験を受けます。国際

バカロレア試験は 10 歳か 11 歳で受験します。

ラグビーは他の大半のグレイト・ナインと異なり、男女共学であり、また、大半の生徒は寄宿寮ですが、通学生用のハウスも用意しています。女子は 1975 年にシックスフォームの入学だけでしたが、1995 年には完全な男女共学となりました。

13 のハウス（寄宿寮）があり、他に通学生（Day student）のための寮が 3 つありますが、教職員はいずれかのハウスに属しています。合計ハウスは 16 です。

ハウス間での格差はありません。というのも、ハウス間で平等になるように生徒を調整しますし、どのハウスもいずれかの分野で独占的にならないように注意しています。ですので、一番素晴らしいハウスはどこですか、と生徒に問うと、生徒は自分の所属するハウスだと言います。しかし、ハウスマスターの影響は大きい。スポーツでハウス対抗競技を実施しますが、ホッケー、ラグビー、女子はネットボールですが、は一年生で必修です。他に、バドミントンやスカッシュ、水泳、サッカー等があります。

通学生のためのハウスは、生徒が朝登校した際登録し、ハウスで勉強や宿題ができ、夕方、7～9 時には自宅に帰ります。通学生も寮の生徒と同じエートスに組み込まれていますので、週末土曜日、日曜日でもハウスに来ることが期待されています。

ハウス名	設立年	女子用	設立年
男子用		女子用	
Cotton	1836	Bradley	1830
Kilbracken	1841	Dean	1832
Michell	1882	Griffin	2000
School Field	1852	Rupert Brooke	1860
School House	1750	Southfield (Day)	2005
Sheriff	1881	Stanley (6th form)	1828
Town House (Day)	1567	Tudor	1893
Whitelaw	1838	Marshall House (Day, Y7 & 8) 11 歳～13 歳の男女 約 30 名	

ハウスマスターやハウスミストレスは、12 年が最長で通常 10 年くらいで辞めるようです。また、マーシャル・ハウスは、男女共学で 7 年生（11 歳～）と 8 年生用の通学生用のハウスです。このハウスは、公立学校出身の生徒で 9 年生（日本では中学 1 年生：通常 13 歳）でラグビー校に入学したい場合に、入学ができるように作られました。しかし 30 名と少数です。入学試験のためのラテン語など学びませんから、公立学校から入るのは大変困難だといえます。学費も高額です。私も公立のグラマースクールに通っていましたよ。

寮には 50 人生徒とハウスマスターやハウスミストレス及び副ハウスマスターやハウス

ミスストレスと一緒に住んでおり、寄宿生活なので夜も昼も常時生徒と接することになります。週末も勉強やスポーツがあります。ハウスマスターやハウスミスストレスは、それまでに副ハウスマスターやハウスミスストレスを2、3年以上経験する必要があります。

ハウスは性別を分けて住んでいますが、一日の決まった時間の指定された場所では、記帳が必要ですが、互いに訪問が可能です。また、1975年に男女共学になってから、男女ともに制服着用です。女子生徒は長いスカートで、ファッショナブルではないですね。しかし、短くすることは許されていないのです。

2) ラグビー校ではどのような生徒を育てるのか

本校では、学業だけではなく、スポーツ、音楽、演劇、広い意味での文化といった広範な、また、多様な教育を与えることに留意しています。

我々は優秀さを追及していますが、それはどの生徒であろうと何か卓越したものを持っていると信じているからです。ですから、我々は支援を必要とする生徒を支援し、前進が必要な生徒を前に進めていくのです。学業がトップの生徒のみならず、多様な領域で優れた生徒を集めているのです。また、我々は生徒が人間としてのあるべき姿や社会の一員として生きるための価値観を持つことが重要と考えており、生徒が学校を去る時には、社会の有用な一員であってほしいと思っています。

私たちは広く地域貢献をしており、生徒もそれに参加するように勧めています。木曜日にはかなりの生徒が街のチャリティーショップ、例えばオックスファム²⁴やイギリス心臓病支援基金の店などで無償で働いていますし、また、老人ホームを訪問し、楽器を演奏したり、劇と一緒に演じています。他には、少年刑務所に行き、読み書きを支援したり、地元の老人と交流するグループは、老人をショッピングに連れていったり、お使いに行ったり、座って一緒にお茶を飲んだり、おしゃべりをしたりしています。また、老人だけではなく障害児の学校に行き、彼らと一緒に活動もしています。例えば身障者の乗馬を手伝っているのですが、身障者が馬に乗ることを教える中で、生徒自身も多くのことを学んでいくのです。

ラグビー校に合わない生徒、例えば、寮生活に不向きな生徒には、なるべく早い時期に別の学校への転校を考えるように助言しています。寮生活を行うには、それに向けた性格が必要です。独立心があり、包容力があり、寛容、忍耐力、他者を受け入れられ、忙しい事に文句を言わないことが必要になってきます。また、学業、スポーツ、音楽、文化、劇といったアカデミック豊かな機会が沢山あるので、それらの機会を活かしていける生徒に入学してもらいたいですね。ですので、こういった事柄をやろうと思わない生徒には不向きな場所となります。

3) ジェントルマン・シップ

ジェントルマン・シップで重要なことは、他人をまず第一に考えることだと思っています。他人が何を必要としているかに気付き、共感し（**empathy**）合える感覚を身につけることが大切です。また、何が正しく、何が悪い事かを理解すること、正しい道徳観を育てること、また、マナーも重要です。マナーとは即ち、礼儀正しきで、生徒には「高貴なる義務（ノブレス・オブリージ）」を持つことも、あからさまにはありませんが、期待しています。

4) 保護者の職業

我々の学校の子弟の両親は、大半はシティーの金融関係の仕事をしています。弁護士、起業家、不動産会社の役員、IT関係者、医師、といった授業料が支払えるだけの富裕層たちです。父親の仕事はロンドンを基盤にしながら、家族は田舎のゆったりした環境の中に家を構えるといった生活です。

5) リーダーシップ

ラグビーには、リーダーシップを育てるための機会が満載です。ハウスの社交行事やチャリティ行事、音楽会、ハウスの演劇でも何でもリーダーシップを育てるための機会があります。

全てのスポーツにはキャプテンと副キャプテンが居り、それもリーダーシップを育てる大きな役割を果たしています。また、毎年ハウスでは演劇（House Play）が行われるので、そのためにもまた、リーダーシップが必要となります。他に、夏の最後の週にフェスティバルがあり、劇やコンサート、詩の朗読、ワークショップ、ダンスを、生徒主体で実施します。義務として、生徒は必ず何かに参加しなければならないのです。他には、ハウス対抗合唱会や、日曜日のランチの後には、2、3人の生徒が一時間ほどコンサートをしています。クリスマスは、クリスマスコンサートを実施したり、クリスマスキャロルサービスを行っています。学内だけではなく、地元の人々が集まるキャロルサービスも手伝っています。

6) 対談を終えて

2015年度におけるラグビー校の将来計画の第一番目は、「全ての領域において、革新の伝統を守りながら、イギリス及び世界において共学校としてトップの一つであること」である。この言葉から理解されるように、何よりも革新ということに力点が置かれており、伝統的な学校だからといって過去の栄光を守ることに汲々としてはいない。常に前向きにチャレンジを続けているのが、この学校である。

また、生徒の総数は約800人の学校であるが、伝統的なハウス文化を強固なものにすることで、寄宿制度のエートス²⁵を強化することを企図している。根底には宗教的思想が息

づきながら、アカデミックな卓越性を重んじる一方で、精神的深さを求めることに焦点が当てられていることは我が国の学校でも学びたい点である。その結果であろうか、イギリスの学校を卒業する生徒たちは、日本の生徒と比較し、精神的にかなり大人である。

更には、知的レベルを高めるだけでなく、個々人の生まれ持った才能や技能を伸展することを学校は支援し、忍耐と理解力や責任感を育て、地域に責任を持って関わられる（commitment）生徒を育てている。

＜寄宿学校、寄宿制学校での生活＞

ハウスでの生活は、挑戦であり、楽しみであり、伸展であり、生徒の潜在能力を伸ばすための少年少女はガイダンスとなり、鼓舞を支援するものである。生徒の健康と幸福を尤もの関心事とし、重要視している学校といえる。

日々の生活はなすべきことが非常に多く、学業や課外活動での卓越性に焦点を当て特別の機会を与えている。一方全生徒が、生涯にわたる友情を育てる機会も与えられている。

土曜日は午前の授業、午後の試合、夕刻の催しもの、日曜日は、午後は自分の時間が持てるため、授業の復習や、ボランティア活動が実施できる。

寄宿学校では、常に生徒に寄り添う、生徒の近くに教員が居り、支援をする体制が整っており、いじめにも素早く対処することになっている。11時には消灯。

3. 7 生徒の実績を積極的に公開する英国パブリック・スクール

—日英双方で学んだ日本人生徒たちによる英国式評価への反応—

(1) はじめに

イギリスのインデペンデント・スクール（私立学校）の中には、パブリック・スクールと分類される一群の学校がある。これらの学校は主に数百年の伝統を持つ学費の高い中等教育機関を指す。筆者は16世紀末に設立された全寮制パブリック・スクールX校で教員として勤務しているが、その日常生活ではさまざまな局面で日本の学校生活との違いを体験する。たとえば教員による生徒の扱い、テスト問題の様態、校則の緩急、愛校心の育成方法など、その違いは枚挙に暇がない。その中で特に両者の違いが際立つのが評価手段である。パブリック・スクールでは、すぐれた能力を発揮した生徒や学校の名声を高めるのに貢献した生徒を評価する機会が極めて多い。評価する分野も、勉学のみならずスポーツ、音楽、演劇、ICTなど多岐に渡る。また、その評価が誰の目にも明らかな形で長期間に渡り公表されている。授業も各教科で習熟度別であり、一クラスの数人が十数人と少ないためクラスの習熟度レベルは細分化されている。

一方、日本の初等・中等教育機関において児童・生徒の評価を本人以外に開示することは稀である。また能力の高い生徒を積極的に賞賛の対象にする機会は公立・私立どちらの機関においてもあまり見られない。習熟度別クラスを実施している教育機関もあるが、ク

ラス分けをするのは算数（数学）、英語など限られた教科であり、クラスの習熟度レベルも細かく分かれてはいないようである。

著名な政治家や芸術家を輩出してきたイギリスの男子パブリック・スクール X 校は 13 才から 18 才まで 5 学年の生徒約 800 人が在籍している。現在、数人の日本人生徒が学んでいるが、彼らのうち 4 人は日本で生まれ、日本の文部科学省による学習指導要領に沿った私立小学校に 3～4 年生まで通うと、イギリスのプレパレトリー・スクール（以下、プレップ・スクール）に編入した。プレップ・スクールとは主にパブリック・スクール進学を目指す児童が学ぶ私立の小学校である。4 人はプレップ・スクール在学中に自分の意志でパブリック・スクールへの受験を決め、厳しい入学試験を経て X 校に入学した。これらの生徒は日本の教育とイギリスの教育における評価方法の違いを体感しているはずである。

パブリック・スクールについて日本語で書かれた、または日本語に翻訳された研究書には、パブリック・スクールの経営者や教員が習熟度別クラスを採用したり優秀者を人目につくように表彰したりすることが示されている（池田，1949、ウォルフオード，1996）。しかしパブリック・スクールに在籍したことのある日本人生徒が習熟度クラスをどう考えているか、学校が能力や努力を開示することに日本人生徒がどのような影響を受けているか、についての報告は管見の限り見当たらない。

そこで本稿では、まずパブリック・スクール X 校における種々の可視的な生徒の評価手段を明らかにする。その上で、日本とイギリス双方で初等教育を受けたことのある上記 4 人のうち、個人情報開示について本人と保護者の承諾を得られた 3 人の生徒を対象とし、彼らが X 校による生徒の能力開示や表彰制度をどのように受け止めているかを探る。調査方法は個人面接法を採用し、筆者が各生徒と面接した。

本調査で得られた結果は、日本の教育において生徒の能力や達成度の差異をどう扱うかという問題を考える際の参考資料に資すると考えられる。また、可視的な評価制度のもとで生徒がどのような影響を受けるか、という判断材料のひとつとなり得るであろう。

ここで調査の範囲（限界）について 2 点付記しなくてはならない。1 点目は本稿での調査対象は 3 人と極めて少ないことである。そのため得られた回答は必ずしもパブリック・スクールで学ぶ日本人生徒全体の意見を反映しない可能性がある。また X 校は全寮制の男子校であるため、通学制のパブリック・スクールに通っている生徒、または男女共学や女子のみのパブリック・スクールに通っている日本人生徒とは意見を異にすることも考えられる。2 点目は、調査対象生徒が日本の中等教育機関に通った経験がないため日本とイギリスそれぞれの中等教育機関を比べることができない点である。しかしながらイギリスの名門パブリック・スクールに通っている日本人生徒は少数であり、その中でも日本の小学校に通った経験のある生徒はさらに限られる。また、調査対象はパブリック・スクールの卒業生ではなく現役の生徒である。よって彼らの意見は記憶や記録に頼る回想録でなく在校生として現在保持している意見であるため、より信頼度が高いと考えられる。これらのこ

とから、3人とはいえども日英双方の学校教育を知る彼らの意見は傾聴に値すると言えるだろう。

(2) 可視的な評価システム

日本と英国パブリック・スクールにおける生徒の能力評価方法の違いとして特筆できるのがビルブック (Bill Book) である。ビルブックとは全校生徒の名簿、教職員の名簿と各学期のスケジュールが細かく記載された手帳のような小冊子で、全教職員ならびに生徒、保護者に学期ごとに配られる。

何らかの奨学金を受けている生徒はビルブックに載っている名前に続けて Sch. (Scholar. 以下、スカラー) という文字が付け加えられている。この奨学金は授業料を払うのが困難な家庭の生徒に支給される給付金ではなく、入学試験時、学校指定の分野において能力を見込まれた生徒が受ける交付金である。

スカラーは学業、音楽、美術、卓越した才能、軍事教練、全般の6種に分かれている。卓越した才能には、演劇、ICTとスポーツが含まれる。どの種のスカラーも授与者に定数はないが、1学年約160人のうち、学業スカラーは5~10人程度、音楽・美術・卓越した才能のスカラーは1学年に5~15人、軍事教練は高学年から3人程度、全般は全校で5人程度が選ばれる。

生徒の能力は習熟度別クラス分けでも明示される。国語、数学などの必修科目はもちろんのこと、その他の科目も人数が一定以上の場合には学力によりクラス分けがなされる。一クラスは平均12人である。クラスレベル数は、数学、国語はそれぞれ9~10段階、必修選択の美術や音楽は約4段階である。スポーツや音楽などの芸術系クラスも能力別である。

さらに、X校では何らかの分野で高評価を受けた最上級生の生徒に特別な制服を着る権利を与えている。例えば学校代表の生徒として後輩の指導などにあたるスクールモニター (School Monitor) は、一般の生徒と違う制服の帽子やネクタイを身に着ける。スポーツや音楽分野の功労者も特別なネクタイやウエストコートなどを着る名誉を与えられる。

また、学校新聞や広報誌、ホームページにも、生徒が何らかの賞を受けたニュースがタイムリーな話題として次々と登場する。

(3) 日本人生徒によるパブリック・スクール式評価への反応

(2) で述べたイギリスのパブリック・スクールX校における様々な可視的な評価方法に対する反応を調べるため、X校在籍中の3人の日本人生徒を対象として2014年12月から2015年1月にかけて各々に約30~45分の面接を実施した。3人は、日本の高校一年生相当のA君(15才)とB君(16才)、中学三年生相当のC君(14才)で、3人とも日本人両親のもとに日本に生まれ、日本の私立小学校に3~4年生まで在籍した。その後イギリスの私立小学校に転入している。

現在の成績は、A 君が全科目において高く、B 君、C 君には中位から中下位の科目が 1～2 つあるが得意科目群は上位 1～2 段階のクラスに所属している。

3 人にはまず「習熟度によるクラス分けをどう思うか」と質問した。「日本で経験したレベル分けのない授業は物足りない」と感じ、「どのレベルのクラスに在籍するにせよ、自分と同程度のクラスメートだけが周囲にいることで良い競争心が生まれる」、「楽しい」という感想が 3 人に共通であった。「自分の能力を客観的に判断でき、過大評価や過小評価をする可能性がない」ことも利点として全員が挙げた。授業では活発な発言が交換され、ときには騒がしくなるそうである。この理由として、B 君は「クラスの人数が少ないことに加えて、クラス内は同じレベルの生徒が集まるため、自分がひとりだけレベルの高い意見を言って周囲から敬遠されるということがない。逆に、自分がひとりだけレベルの低い意見を言って見下されるということもない。だから気楽に発言できる」と説明した。日本の小学校のクラスで総合成績が 1 位だった A 君は習熟度別クラス分けのメリットについて以下のように語った。「自分がイギリスに引っ越すとき、クラスで 2 位だった生徒は「君が転校するので、これからは自分が 1 番になれる」と冗談めかして言ってきた。X 校の習熟度別クラスではお互いを良き刺激を与えてくれるライバルとして認め合っている。自分が 1 番になることもあるが、自分がクラスからいなくなることで喜ぶようなクラスメートはいないだろう」。

次に「自分が上位クラスするとき、優越感を感じるか」と問うた。「まったく感じないわけではないが、強く感じることはない」という気持ちを 3 人とも表した。「クラス内はいつも適度な競争意識にあふれている。自分より努力している人がいるし、所属クラスのレベルやクラス内の順位は流動的なので、自分が良いクラスにいてもその地位に安住していただけるわけではない」と考えているようだ。

「所属クラスが下がったとき、どう感じるか」とたずねると、B 君が「今度はがんばろうという気持ち生まれる」と語った。

さらに「優秀な生徒と比べて劣等感を感じることはあるか」とたずねた。「劣等感をまったく感じないと言えようそになる。しかし劣等感を感じるというよりも、優秀な生徒に対し『すごい』と感じる」と皆が答えた。

「下位クラスの生徒が上位クラスの生徒に対し妬みを感じたり、嫌味を言ってきたりするようことはないか」という質問に対しても全員が「ない」と答えた。「日本では成績の良い生徒は「ガリ勉君」などと言われ嘲笑の対象になることがあるが・・・」という問いかけには、A 君が「ガリ勉君」が馬鹿にされない理由をこう述べた。「全寮制の X 校ではどんなに学業が優秀な生徒でも勉強ばかりしているわけではない。体育、音楽、美術などの必修活動でいつも課題が与えられているため、それらに常に取り組んでいる。寮生活でも寮対抗のスポーツ大会や音楽大会、演劇公演が頻繁にあるのでそれらの準備にも時間を割いている。著名人の講演会も月に何度も開かれるので、それらを熱心に聞きに行く生徒も

いる。成績の良い生徒は忙しいスケジュールを上手にやりくりして効率的に勉強する時間を作り出し集中して勉強している。これはみんなが知っている事実なので、たいていの生徒は成績優秀者に敬意を払っている」。

「上位クラスの生徒や学業スカラーが下位クラスの生徒を馬鹿にする事態は発生しないか」という問いに対しては2人が「ない」、1人が「少なくとも表面上はない」と答えた。学業の成績が芳しくない生徒は、学業に重きを置いていない、または時間を割いていないのであり、下位クラスに在籍するのは自分自身が選択した行動の結果と見なしている。よって上位クラスの生徒は下位クラスの生徒について特に気にならないという。C君は上位クラスの生徒が下位クラスの生徒を馬鹿にしないいくつかの理由を挙げた。「同じ人でも教科によって上位クラスにいるときもそうでないときもある。教科によって得意・不得意があるのは当たり前なので、ある教科で下位クラスに在籍するからといって全体的な能力が低いということはない。また、勉強が不得意な生徒の場合、スポーツや芸術分野で活躍していることが多い。開講されているスポーツの種目や習える楽器の種類も多いので、勉強が不得意な生徒もどこかの分野で自分の能力を開花させることができる。たとえ能力の開花には至らなくても、自分の好きな対象を見つけ、それに打ち込むことができる」。このような理由から、3人全員が「下位クラスの生徒でも卑屈になりにくい」と答えた。

スポーツクラスのレベル分けについてB君は「上位クラスはプロ選手やセミプロ選手を育てることを目的とし、下位クラスは運動の苦手な生徒でも体を動かしながら運動の楽しみを体感することを目的としている。スポーツクラスは能力別であると同時に目的別でもあるので、自分と同じような生徒がいるクラス内では安心してプレーできる。ある競技が上手な人は小さい頃からはじめているし、努力している。そのような人に勝てないのは当然だからスポーツのクラス分けは妥当だと思う」との考えを述べた。

次に「何らかの分野で優秀な成果を挙げた生徒が、特別な制服を着ていることをどう思うか」と質問した。この問いに全員が「特別な服装を許されている生徒は、やる気のある後輩たちにとって、「自分もそうになりたい」というお手本になる。だから良いことだと思う」と答えた。さらにA君は淡々とした口調で次のように語った。「プレップ・スクールでも表彰を受けた生徒は特別なネクタイを締めたり、バッチをつけていたりしたから、この制度には慣れている。特に何も感じない」。

最後に「各分野のスカラーがビルブックに記載されたり、表彰を受けた生徒が学校の印刷物で華やかに公表されたりすることについてどう思うか」と問うと、3人は「なぜそんな質問をわざわざするのか」という表情を示した。3人にとっては、それくらい「優秀者や貢献者が周知されるのは当たり前」になっているのであろう。

(4) 考察と展望

筆者は、X校のように生徒の達成度や学校への貢献度を公開する評価体制のもとで教育

を受けたことはない。そこで、面接した全生徒たちが評価公開に対して前向きに回答したことに新鮮な驚きを禁じえなかった。回答者である3人の日本人生徒は寮が別々でお互いに会話を交わす機会はほとんどない。しかし一人一人面接を行ったにもかかわらず、質問に対する答えはほぼ同じであった。

習熟度によるクラス分けをどう思うかという問いに対し、否定的な意見は出なかった。自分の能力を客観的かつ正当に判断できるという点と、同レベルのクラスメートとの間で生まれるライバル心がやる気を向上させる点を長所として強く感じているようであった。

パブリック・スクールにおける各種能力や達成度公開について優越感や劣等感を感じることはあるか、という問いにはどちらの感情も強く感じないことが示された。優越感は、自分が上位のクラスに配属されたり表彰されたりしたときに感じることもあるが、周囲には常に適度な競争があったり、自分が表彰されない分野で表彰される生徒を見ていたりするため、自分の能力を過大評価することはないそうである。一方、劣等感は主に2つの理由で生まれにくいことが明らかになった。まず、生徒たちは上位クラス在籍者または表彰される生徒たちが努力をしてその地位を獲得していることを寮生活の中で見てきているため、彼らが受賞するのは当然だと考えていることである。そのため自分が劣等感を感じるよりも、むしろ受賞者に対する賞賛の念が生じるということであった。2つ目は、X校が日本の中学校・高校よりも多くの授業科目や活動を提供しているので自分の得意な分野や好きな分野を見つけやすく自分の特性をその分野に注力できるという理由である。

成績優秀な生徒が嘲笑の対象にならないことも示された。その理由は劣等感が生まれにくい理由と同様、優秀な生徒が人一倍努力している姿を見ているからである。日本では努力をしている生徒が疎まれることがあるため努力していることを隠す傾向があるが、X校では努力をしている生徒を見下す生徒はいないそうである。

何らかの分野で優秀さを認められている最上級生だけが身につけることができる特別な制服については、「後輩たちの励みになってよい」という意見が聞かれた。

また、学校が生徒の功績を学校の印刷物などに積極的に記載することは当然であると考えていることもわかった。

3人の生徒の発言から導けることは、「自分の能力が他から認められる環境に育つということは、自分も相手の能力を認められるようになる」という事実である。たとえ相手が自分より高い能力を持つ同学年の生徒だったとしても、生徒たちは素直にその事実を受け止めている。また、そのような環境では「自分が高い能力を有していた場合、誰かに臆することなくそれを発揮できる」ことも詳らになった。加えて、X校では多くの科目や活動を提供し、広範囲な分野で多数の表彰項目を設けていることで、「生徒たちが特定の分野だけに価値をおかず幅広い価値観を持てるようになる」ことも明確化した。

冒頭で記したように、本稿では調査対象の生徒数が3人と少なく、対象生徒は精神的にも物質的にも恵まれた家庭・学習環境の中で育っている日本人男子であるため調査結果の

有効性は限られる。しかし、彼らは日本の教育環境とは大きく異なる環境すなわち「能力や努力を目に見える形で積極的に評価しながら生徒を育てるという環境」に身をおくという特殊な経験を積んでいる若者たちである。彼らによって紹介されたイギリスパブリック・スクール式教育における数々の利点は、日本の教育のあり方に一石を投じ得ると考える。

パブリック・スクールにおける評価、表彰制度が生徒に与える影響についての研究は、生徒の成長を長期的に追う息の長い調査が必要である。パブリック・スクールにおける生徒の成長に関する研究を蓄積することにより、日本とは異質の教育方法に目を向ける日本人が少しでも増え、それが日本の教育に多様性を生み、質向上につながる糸口となることを願いたい。

【引用文献】

池田潔 (1949) 『自由と規律—イギリスの学校生活—』 岩波新書。

ジェフリー・ウォルフオード (竹内洋・海部優子訳) (1996) 『パブリック・スクールの社会学—英国エリート教育の内幕—』 世界思想社。

3. 8 チャーターハウス校 (Charterhouse School)

(1) 基本情報

1611年創立で、1971年から Six Form への女子の入学が許可される。

	Fees per term:	Boarding: £11,415 Day: Day boarding £9,433 Sixth Form Day £8,273	寄宿制/ 通学制	男子校/ 16+ 共学校 男子 13-18 男女 16-18
--	----------------	--	-------------	---

		年齢		入学者
下級学校 (Under School)	Fifth Form (Year 9)	13 - 14	806 名	Day 47 名 寄宿制 759 名 (男子 674 名 女子 132 名) (2012)
	Lower Shell (Year 10)	14 - 15		
	Upper Shell (Year 11)	15 - 16		
上級学校 (Upper School)	Sixth Form (Years 12)	16 - 17		
	Sixth Form (Years 13)	17 - 18		

課外活	月曜の活動 (For under school)	チャーターハウスの野外教育の目的：田舎での活動を安全に楽しむとともに、自立、チームワーク、カルトウジオ修道会のリーダーシップスキルを発展させる。月曜の活動は月曜の午後から始まり、フォース・フォームのCQ
-----	-----------------------------	---

動		<p>から始まり、フィフスフォームのLQまで続く。</p> <p>○Pioneers：自立、リーダーシップ、チームワークのスキルを育てるための活動。オリエンテーリングやチーム作り、応急処置、屋内登山、クッキングなど。</p> <p>○CCF (Charterhouse Combined Cadet Force)：軍事訓練と冒険的な訓練。責任感の質を促進するためのリーダーシップの力、自立、高い処理能力、粘り強さを育てる。</p> <p>○Duke of Edinburgh's Award</p>
	Creativity, Action and Service (CAS)	<p>目的をもちバランスのある課外活動のプログラムを専門家が実施する。プログラムの全ての時間に専門家が参加するわけではないが、生徒は専門家から学ぶ。生徒は、何をすべきかを計画し、何をなしたかを振り返る。</p> <p>Creativity：創造的思考や表現に関わる芸術その他の活動</p> <p>Action：健康的なライフスタイルに関わる身体的運動。スポーツや環境に関わるプロジェクト。</p> <p>Service：他の人や集団、コミュニティーの利益となり、生徒にとっても学習上利益となるような無報酬でボランティアな活動。</p>

●ハウス・システム：11のハウスは寄宿寮で、1つは通学生用のハウスである。生徒がどこのハウスかは、ネクタイ、傘、サッカーチームの上着のストライプの色で見分けられている。制服は、白やブルーのシャツ、ハウス毎のネクタイ、グレーのズボン、青色のジャンパー、ツイードのジャケット、革靴から成る平日の制服。日曜日の服装は、ピンストラップや無地のダークスーツ。チョッキはオプションで、学校の榮譽を受けた場合に授与されるネクタイ等を身に着けることができる。

●学期：1年3期制度で、学期の事はクォーターと呼んでいる。

Oration Quarter (演説学期)：9月初旬から12月中旬、**Long Quarter**：1月中旬から3月終盤、**Cricket Quarter** (クリケット学期)：4月終盤から6月終盤、7月初旬

(2) プレミング校長との対談

1) 生徒に期待するもの

どんな生徒が入学するかという事はあまり心配していませんが、彼らにこれから身につけてほしいと思っている価値観にもっと重きを置いています。どの生徒も自信を持って、ポジティブで、何事にも一生懸命取り組み、好奇心旺盛で、熱意があり、粘り強くなってほしいというのが理想ですが、これらが全ての生徒に当てはまるわけではありません。ですので、当校ではこれらの中で幾つかの価値観を、学校での活動や学習を通して、また、我々が奨励し、基盤としているボーディングスクールの精神を通して身につけてほしいのです。若い人にとってコミュニティーの一員となることは重要なことですし、精神的な生活を送ることの方が、ただ授業を聞いて、学び、試験に合格することよりも大切だと思っています。自ら高い期待や希望を抱き、道徳に合った勇気を養成していくことが大切です。

2) 精神的な生活

これまで訪問した学校にはチャペルがあったと思いますが、チャペルは信仰（英国国教会）の中心となる場所です。ここでも同様にチャペルがあります。我が校の生徒は誰でも入れますし、私たちも含め、週に4回、月・水・金・土曜日は礼拝に行きます。ただ、私たちは一つの信仰を生徒に押し付けたりするようなことはしません。むしろ彼ら自身の信仰をじっくり考える機会を持たせます。当校には様々な宗教の生徒がいますし、無宗教の生徒もいます。チャペルはそんな彼らにとって考える場所としてはぴったりだと思います。

3) チャーターハウスの将来の方向性

チャーターハウスは、2025年にはクラス・スクール、つまりアカデミックで、パストラルケアが整備され、宗教に囚われず、国際的な学校に移行する予定です。約25%が外国からの生徒となり、IB（国際バカロレア）コースも運営します。国際化を進める理由は、イギリスを飛び出して国際感覚を持つことがチャーターハウスの子供たちの成長には必要だと思っているからです。世界中の学校と交換プログラムを持ちたいと考えていますし、他国にチャイルドハウスを設け、私たちの信じる価値観を世界に広めていきたいと思っています。また、学内だけでなく、学校周辺の地域にも国際人を増やし、貴重な経験をしてほしいと思います。英語圏だけに留まりません。もちろん日本への進出もきっと面白いでしょう。まだ日本で学校をつくる事は考えたことはありませんが、いいかもしれませんね。

ただ、大切なことは、私たちの理念がそのまま全ての場所に伝わることです。儲けだけを追求しているわけではありません。2025年には強固な社会責任プログラムを実施する予定です。うちの学校の母体や同窓会で好評を博しているものです。みんな当校出身であることを誇りに思っていますので、生徒たちは将来社会にお返しをし、貢献する責任があると思います。つまり、ワールドクラス、国際的視野、社会的責任が我々の重要なポリシーなのです。

4) リーダーシップ

リーダーシップを養成する機会として、スポーツは重要です。チームのキャプテンに限らず、一人一人がチームの一員として頑張る必要があるからです。寮対抗試合もリーダーシップを体験する良い機会となりますし、生徒同士のつながりも深まります。また、スポーツもそうですが、CCFなども大きな意味で精神的リーダーシップの機会を与えてくれます。CCF活動は有意義な活動といえます。

「先駆者 (Pioneers)」と呼ばれている CCF の代替プログラムもあります。音楽ですと、オーケストラやアンサンブルでリーダー的な役割をするといったものです。芸術系であれ

ば、例えば演劇での主役です。こういった経験を生徒にさせるのです。

生徒は第6学年になるとみんな創造性・行動・奉仕プログラムを取らなければなりません。これは基本的には国際バカロアの授業で、ディプロマ用のものなのですが。

5) 人事

教員は全部で約140人います。教員の選考では、教務主任、副校長、パストラル、セカンド・マスターと私、そして面接に立ち会う必要のある職員が面接をしますが、最終的には私が決定します。チャーターハウスの卒業生で教員になったものは4～5名と少なく、教員の大半がMAかBAを持っています。オックスフォードやケンブリッジのMAです。私はケンブリッジのMAを持っています。専攻は英語でした。

校長は公募で募集され、選考したのは理事会です。私は、前職は他校の校長でした。その前は教師で、その前は銀行の機関投資家でした。校長（ハウスマスター）には定年はありませんが、基本的に10年間在職します。でも向いていなかったり、続けたくない場合は辞められます。逆に校長が希望すれば10年以上長く続けることもできます。特に決まりはありません。

理事会で毎年校長の評価をしています。また、辞めるにしても、辞めさせるにしても1年前に通知することが契約で決められています。私の場合は10年契約ですが、校長として能力がなかった場合は、辞任の手順があります。でもこの理事会はそれ程厳しくないですよ。評価結果がひどい場合でも理由を聞いてくれます。通常校長がクビになるのは、モラルに反した場合や、理事会と方針が全く異なったり、多くの保護者が子供たちを他校に転校させた場合です。

ハウスマスターの募集には、まず広告を出しますが、募集広告は学内のみです。基本的にハウスマスターは学内に限りますが、去年は外部にも募集をかけました。ハウスマスター適任者は、温和で、気さくで、外交的で、生徒のことを一番に考え、生徒や保護者とのコミュニケーションが上手で、家族のいる男性または女性で、60人以上の少年少女と一緒に住める人で、適応力があり、バランスがとれていて、気づかいができ、プレッシャーに強く、ユーモアがあり、生徒が好きで、生徒と一緒にいることを楽しめる人です。熱意があると共に、管理能力が問われます。今月は2名募集したところ、9人の応募がありました。

ハウスマスターは教師であり、特定の教科を教えますし、手当は教師の給料にプラスされます。また、いつ辞めてもいいのです。家族と一緒に生徒と住むのですから、仕事が合わないと思ったら、無理に働くことはありません。

6) 教員

新しい教員は、1年間の導入プログラムを受けます。また、毎週集まり、最近起こった

問題について、また、この1週間にあったことを話し合います。新任教員は各部署でメンターと監督するパーソナルスタッフが付きます。しっかりした導入プログラムといえます。受け持ちの生徒数ですが、生徒対教師の理想的割合は当校では教師1人に対し8名ですね。

教員の平均年齢は35～45歳です。勤続年数は約10年、まあ5～10年といったところですね。英国には定年はありませんが、大抵の人は60～65歳で退職します。しかし中には、ずっと続ける人もいます。任期について校長は辞めろとも、続けろとも言えません。

7) ヘッドボーイ、ヘッドガール

学校のヘッドボーイ、ヘッドガール各1名の選考方法を改善しようとしてきたのですが、まだ完成していません。大きい学校ですし、毎年200名の生徒が第6学年にいますので、グループの生徒たちを見て、しっかりしたスクールモニターになりそうな子を選びました。でも完璧な方法ではありません。

ヘッドボーイ、ヘッドガールは、リーダーとなり、仲間から信頼されるような、何か目立った能力を持った生徒でなければなりません。大抵勉強ができる子で、音楽やスポーツなどが得意な子です。

8) ジェントルマンシップ

それは礼儀正しさであり、実直さであり、誇り、忠誠、信頼であると思っています。あなたが言ったことを他の人が信頼し、有言実行し、心を開き、親しみ深く、ポジティブで、広い心を持つことです。

9) パストラルケア

ボーディングスクールの環境下で全クラスの全生徒を守っていくのがパストラルケアで、全ての生徒にはたくさんのケアラーがついています。本校の教員はパストラルケアラーとしての役割も担っています。当校の生徒は247人でそれら全員に我々は重責を負っています。デイ・スクールであれば、生徒たちと一緒にいる時間だけでよいのですが、ボーディングスクールとなると24時間パストラルケアが必要です。

特に最近は家庭が上手く機能していなかったり、子供も厳しい環境下に置かれていることがあり、ストレスや多大なプレッシャーを抱えている生徒も多く、教師たちは注意深く指導してやる義務があります。子供たちが安全で、幸せで、勉学だけでなく全てにおいて上手くいくよう支援してやらなければなりません。

どのパブリック・スクールもアカデミックですが、それぞれの子供が幸せであることも重視しています。幸せな子供は成功する確率が高く、勉強もよくできます。幸せを感じない子供が成功するわけがないと思っています。また、デイ・スクールであるウエストミンスターとちがって、当校では生徒が24時間学校にいるわけですから、可能なかぎりベス

トな環境を生徒に提供するよう心がけており、彼らの学びや活動をサポートしています。

10) 対談を終えて

2015年9月23日のDaily Mail紙によると、「チャーターハウスの教育の価値は、我々の生徒の人生全てにおいて続くものであると確信している。生徒が、手に入る最高のものを達成し、愛するものや善良なるものを見出し、挑戦することを学び、他者を正しく評価することを学ぶように本校は導くのである。とりわけ、わたくしはチャーターハウスに入学した全ての少年少女に、本校こそが彼らの学校であると信じてもらいたい」と述べていたチャーターハウスの校長プレミング(53歳)に対し、過酷な規律と彼の横暴さへの非難が集まり、退職を求める運動が卒業生と彼らの両親から起こっている。ここ18か月の内に、9名の教員と2名のハウスマスターが退職した。

これは、校長が強大な権限を持つことによる。教職員は個々に校長に対してのみ責任を持ち、校長の信任によってのみその職にある。教職員の任免や学課目・教科書の選択、学生の入退学、日常生活の細目等は全て校長一人の判断と責任により行われ、校長と意見が対立すれば、教職員は自説を修正するか、その職を辞めなければならないことになるのである。校長は、強大な権限があるだけに、トマス・アーノルドの様に生徒から敬愛されながら善政を敷く独裁者になる場合もあれば、自ら律しなければ時として関係者の見解や意思を無視する独裁者になる可能性がある。

- 1 生徒数については、独立学校委員会 (Independent Schools Council) の調査による。
<http://www.isc.co.uk/search/?q=winchester+college> (2015年11月15日アクセス) また、学費については、ウィンチェスター校のウェブサイトより筆者が算出している。
<http://www.winchestercollege.org/fees> (2015年11月15日アクセス)
なお、学費については、1ポンド≒187円で換算している。独立学校委員会はHMC(校長会議校)をはじめとする全英の主要独立学校組織7つの共同体であり、全英の全主要独立学校が同組織に所属している。2015年現在、1267校の独立学校が所属している。また、独立学校委員会の独立部門である独立学校監査団 (Independent Schools Inspectorate; ISI) は政府機関である教育水準局 (OfSTED) と連携して学校監査を実施している。
- 2 独立学校委員会 (Independent Schools Council) の年次報告書によると、同委員会に所属している1267校の学費は、寄宿制学校 (boarding schools) の寄宿生においては平均30,369ポンド(約574万円)、寄宿制学校の通学生は、16,902ポンド(約316万円)、通学制学校 (day schools) の学費は12,522ポンド(約234万円)(すべて1ポンド=187円で換算)となっている。(ISC Annual Census 2015, p22.参照)
- 3 Aレベル試験においてスコアがAまたはA*を取得した生徒の割合を元に表が作成されている。<http://www.best-schools.co.uk/uk-school-league-tables/a-level-passes/> (2015年11月15日アクセス)

- 4 オックスフォード大学 (University of Oxford) とケンブリッジ大学 (University of Cambridge) の併称。
- 5 2013年現在、ウィンチェスター校のオックス・ブリッジ合格率は、同学年の卒業生の約37%であった。
古阪肇 (2014) 「英国独立学校と大学進学 — 『グレート・スクールズ』を中心に」 早稲田教育評論第28巻第1号、161-181頁。
- 6 面接調査によると、ほとんどの生徒が、一つ以上の楽器を嗜んでおり、また学校としても、楽器を習うことを推奨している。
- 7 ハウス・システム (House system) とは、全学年の生徒を縦割りにして、数個のハウスと呼称される生徒集団に編制する方式のこと。ハウス (House) は寄宿舎・寮をさす。
- 8 実際にインタビューの中で聞かれたA氏の解釈であるが、英国独立学校の戦前における住環境の厳しさについては、池田潔著『自由と規律』に詳しい。
- 9 学校の日本語名表記には、いくつかパターンがあり、シュルーズベリー、シュールズベリー、シュールズバリー等が挙げられるが、発音に最も忠実に表記すれば、シュルーズブリーが近いと思われる。しかし本節では、同校の一般的表記であるシュルーズベリー校で統一することとする。
- 10 生徒数については Independent Schools Council (独立学校委員会) の調査による。
<http://www.isc.co.uk/schools/england/shropshire/shrewsbury/shrewsbury-school/> (2015年11月15日アクセス) また、学費については、シュルーズベリー校のウェブサイトより筆者が算出している。<http://www.shrewsbury.org.uk/page/fees> (2015年11月15日アクセス) なお、学費については、1ポンド≒187円で換算している。独立学校委員会の説明については、前項3.1 ウィンチェスター校の注記内に記載。
- 11 目標とする学校への進学を目的とする学校や大学などの教育機関。
- 12 生徒を募る範囲を広げた意図として、当該校が生徒募集に四苦八苦しているわけではなく、非常に競争率が高い学校であることも強調されていた。つまり、人気がない学校であるから、海外進出や前述したように女子にも門戸を開こうと意図したものではないことを校長は示唆。
- 13 2013年にsky TVで放映されたハーロウ校のドキュメンタリーが注目を集めた。その効果もあり、現在世界中から入学希望者が殺到し、入学選抜過程がより厳格化したという (ハーロウ校における保護者インタビューより。2015年9月30日実施。)
- 14 クリケットは野球の原型となったイギリスの国技である。またスカッシュはテニスに似たラケットを使用する屋内の壁打ちゲームである。前者は13世紀頃にはすでにイギリスで行われており、後者は19世紀初頭にロンドンで発祥した。日本では一部の競技者を除きあまり馴染みがないが、いずれもイギリスを代表するスポーツである。
- 15 シュルーズベリー校の生徒へのインタビューによって把握したことであるが、美術に関しては、訪問校によって異なっているようであった。例えば、ハーロウ校はシュルーズベリー校とは異なり、絵画に興味があれば個人レッスンも受けられ、さらに絵画の奨学金も設置されている。
- 16 註の7を参照のこと。
- 17 監督生制度は、通常最上級生をプリフェクトに任命し、下級生の指導ならびに生徒自治と規律の責任を負わせるものである。19世紀のパブリック・スクールにおいてこの制度が普及した。19世紀前半に実在したラグビー校校長のトマス・アーノルドが、プ

- リフレクトの存在を巧妙に利用し、学校自治の改革を行ったことは、パブリック・スクールの歴史における重要事項である。右記文献に詳しい。(池田良三(1971)『イギリス教育の伝統と未来: トーマス・アーノルドの教育観と経営実践』帝国地方行政学会.)
- 18 この考え方については、質問し調査に協力して頂いた、Eton と Winchester に子息を学ばせ、自身も独立学校出身であるイギリス人も同様の見解を示している。(Leading independent school について保護者の観点から質問紙に回答。2013年4月実施。)
- 19 ウェストミンスター校の歴史については、同校のウェブサイト参照。Westminster School, *History*, <https://www.westminster.org.uk/about-westminster/history> (2015年11月19日アクセス)
- 20 生徒数については、独立学校委員会 (Independent Schools Council) の調査による。<http://www.isc.co.uk/schools/england/london-area/westminster/westminster-school/> (2015年11月19日アクセス) また、募集人数については、ウェストミンスター校のウェブサイト参照。Westminster School, *Admissions Policy*, <https://www.westminster.org.uk/admissions/admissions-policy> (2015年11月19日アクセス)
- 21 学費については、ウィンチェスター校のウェブサイトより筆者が算出している。Westminster School, *Fees* <http://www.winchestercollege.org/fees> (2015年11月19日アクセス)
- 22 テレグラフの分析方法は、卒業生のうち GCE・A レベル試験において、A あるいは A* の成績を取得した生徒の割合を%で算出し、その数値を学校順に並べ変えて提示したものである。
- 23 ウェストミンスター校のウェブサイトでは、音楽や演劇、スポーツやコミュニティサービス (福祉活動) をどのように行い、充実した学校生活を送っているかが映像付きで詳しく紹介されている。
- 24 Oxford Committee for Famine Relief の略で、オックスファム・インターナショナルは、13の組織から編成される貧困と不正を根絶するための持続的な支援活動を全世界100カ国以上で展開している団体。
- 25 社会集団・民族などを特徴づける気風・慣習。習俗と呼ばれるもの(大辞林 第三版)。

4. フランスの学校 ～Lycée privé Sainte-Geneviève Versailles～

私立リセ・聖ジュヌヴィエーヴ・ヴェルサイユ¹

(1) 学校概要

パリの西方、ヴェルサイユに位置する私立リセで、「ジネット (Ginette)」、あるいはイエズス会の学校という意味で「BJ (Boîte à Jesuit)」とも呼ばれる²。1854年に設立され、1913年に現在の場所に移転した。後期中等教育課程は持たず、自然科学系および経済商業系の「グランゼコール準備学級」(classe préparatoire aux grandes écoles、以下、「準備学級」)のみが設置されている。

フランスのリセの中では少数派の私立であり、さらにカトリック (イエズス会) 系である点、および寄宿制である点でも、他校には見られない特徴を多く有している。ヴェルサイユ宮殿に程近い郊外の住宅街の中に広い敷地を構え、自然科学系・工学系の授業で使用する実験室やラグビー場、サッカー場、テニスコート等のスポーツ施設が整っている。

(2) 入学者の選考と教育課程

本校のいずれのコースに入学する場合も、普通バカロレア (中等教育修了資格) の中でも、自然科学系を選択していることが要求される³。1年次のクラス編成は次の通り：

MPSI (数学物理技術専攻) 3クラス；PCSI (物理化学技術専攻) 3クラス；

PTSI (物理工学技術専攻) 1クラス；BCPST (生物化学物理地球科学専攻) 1クラス；

EC-S (経済商業系・理科選択) 2クラス

公立校と同様に、国が定めた制度の枠内で選抜を行い、リセでの成績とバカロレアの評点のほか、学校の裁量の範囲内で、インターンシップやボランティア、スポーツや芸術活動における実績も重視している。同時に、独自の奨学金制度を設ける等、多様な背景を持つ生徒を集めるよう努めている⁴。公立も含めた他の準備学級と同様、国定カリキュラムに従って授業が行われており、教員の資格・人事も公立と同様である。私立学校ではあるが、教員は公務員であり、教員の給与も公費で賄われている。

(3) 本校の特徴

以下の通り、他の準備学級には見られない特徴があり、それが授業の枠を越えた教育活動や生徒の人的資質の涵養のうえで、重要な意味を持っている。

学校全体でキリスト教精神を重視している。正規の授業内で聖書の教義を教えることはないが、授業外の活動では、至るところでカトリックの精神が反映されている。本校の教育憲章 (Charte pédagogique) でも、この学校がイエス・キリストと福音の精神によって設立されており、ここでの教育が、生徒が人生の意味を見定め、それを深めていくというキリスト教の基本的価値にも及ぶと述べられている⁵。以下に述べるような団体スポーツや集団寄宿生活を通じて養われる連帯精神も、キリスト教精神と結び付いている⁶。

別の特徴として、寄宿制であることが指摘される。生徒は、敷地内の寄宿舎に居住する。寄宿生活を教育活動の一部としている準備学級は珍しい。1年生の宿舎は2人1部屋で、建物は男女別に分かれている。1年生を相部屋とするのは、初めて親元を離れて暮らす生徒がほとんどであるため、生徒が孤独を感じるのを防ぎ、互いに助け合うことを学ぶようにするための配慮である。2年生になると、各生徒にそれぞれ個室が与えられ1人部屋となるため、建物自体は男女で分けられていない。個室とするのは、コンクール（グランゼコールの入学試験）に向けて受験勉強に集中する必要があること、および、個人としての独立心を養う必要があると考えられているためである。宿舎の各個室のドアに鍵が付けられていない（学校の敷地、宿舎の建物には部外者が許可なく立ち入れない）。これはフランスにとどまらず、ヨーロッパ全体で見ても珍しいことで、生徒同士の相互信頼の精神を象徴している。厳しい競争の中で勉学に励むことを要求される生徒にとって、寄宿寮は、互いに親密な関係を作り、助け合うことを学ぶ場として機能する。

他校の準備学級と同様に、生徒は受験勉強で多忙を極めるが、学校の方針でスポーツや文化活動も重視している。木曜日の午後は授業が行われず、生徒は校内でテニスやサッカーをしたり、学校の近くにあるヴェルサイユ宮殿で音楽活動に参加したりする。定期的にクラス対抗のスポーツ試合や生徒主催のコンサートも開催されている。

(4) 考察

グランゼコール準備学級の性格上、生徒の当面の目標はコンクールに合格し、志望のグランゼコールへの入学を果たすことである。どの学校の準備学級に在籍しているかにかかわらず、最終的に受けなければならない試験が同じであることに加え、国定カリキュラムに準拠する必要があるため、カリキュラムの面で学校ごとの独自性はほとんど見られない。この学校では、多忙を極める生徒に、敢えて授業外のスポーツ・文化活動を奨励する。寄宿生活と課外の自主活動を可能にしているのは、「教育憲章」に掲げられている精神であろう。つまり、目下の目標であるグランゼコール入学の先を見据えて、生徒自身にとって何が「人生の成功」なのかを考えるという教育憲章の精神であろう。グランゼコールの出身者は、フランス社会を担うリーダーたる人材となるが、それを支えているのは、各自の人生における受験勉強に励むことの意味を自覚し、それを実行に移すという経験である。

【注】ウェブサイトの最終アクセス日は、いずれも2015年11月19日

¹ 筆者は、2012年9月26日、2014年6月6日に本校を訪問し、インタビュー調査および学校施設の視察を行った。2度の訪問調査に対応してくださった数学物理学専攻教務主任（当時）のCylvain-Cariou Charton神父、2014年の調査時に同席してくださったレケナ小室・舞カルメン氏（当時在学中）に感謝申し上げます。

² リセ（lycée）とは、フランスの後期中等教育機関であり、日本の高等学校に相当する。

しかし、本校を含む一部のリセのように、「グランゼコール準備学級」のみが設置されているところや後期中等教育課程と準備学級が併設されているところもある点には、注意を要する。「グランゼコール (grande(s) école(s))」とは、フランス独特の大学とは別系統の高等教育機関であり、フランス社会において、いわゆる「エリート」と呼ばれる人々の多くが、ここから輩出されている。グランゼコールの多くは理工系で、国立土木学校 (École nationale des ponts et chaussées)、パリ中央学校 (École Centrale Paris) が代表的である。また、政治系ではパリ政治学院 (Institut d'études politique de Paris ; Sciences Po) や国立行政学院 (École nationale d'administration ; ENA)、その他、高等師範学校 (École normale supérieure) が有名である。大学が、中等教育修了資格 (バカロレア ; baccalauréat) を取得すると、本人の希望に応じて無試験で入学できるのに対して、グランゼコールに入学するためには、中等教育修了後、準備学級 (多くは2年) で勉強し、コンクール (concours) と呼ばれる試験に合格しなければならない。

- ³ バカロレアには、高等教育進学希望者向けの普通バカロレアのほか、職人・技術者を目指す者向けの技術バカロレア (baccalauréat technologique) と職業バカロレア (baccalauréat professionnel) がある。普通バカロレアは、さらに、経済社会系 (ES: économique et sociale)、人文科学系 (L: littéraire)、自然科学系 (S: scientifique) に区分される。進学先によって、必要とされるバカロレアの種類が異なる。準備学級のコースと必要なバカロレアの関係について、次を参照 : Ministère de l'éducation nationale, de l'enseignement supérieur et de la recherche «Classes préparatoires aux grandes écoles (C.P.G.E.)

»
(<http://www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/cid20182/classes-preparatoires-aux-grandes-ecoles-e.html>) 。

- ⁴ Lycée privé Saint Geneviève Versailles « Mes moyens financiers ne me permettent pas de payer la pension ? Les solutions ! » (<http://www.bgINETTE.com/spip.php?article60>)
⁵ Lycée privé Sainte-Geneviève Versailles « La charte pédagogique » (<http://www.bgINETTE.com/decouvrez-lecole/la-charte-pedagogique-1>)
⁶ インタビュー調査の回答による。

【コラム】卒業生と保護者から見た「ジネット」

レケナ・舞カルメン

フランスが世界の経済大国から脱落するや、産業界も金融界も一時的にせよ冷えこんだ。ランキングの顛末は格付機関の気まぐれなのだろうか？ その理由はわからないにしても、確かなことは、この国では今や何もかもが一律に下へ下へと引っ張られていることだ。高等教育における「プレパ」のシステムもその傾向を免れない。金銭的な理由によってそうしたコースに進めない人たち、或は、自分には無理だと始めから諦めてしまっている人たちもいる中で、妬みや僻みがあるのは事実だ。それでも今なお続く、まさにフランス的なエリート主義の学制が強い批判に晒されたのは、昨年、政府が様々な教育改革に取り組んだときだった。

理系のプレパに入学すると最も権威あるグランゼコールへの登竜門が開かれる。プレパはとにかく厳しい。入学するや生徒たちは、それに馴らされ、「調教」される。ただし、何

よりの長所はあらゆる側面からの教育が受けられることだ。学術的に高い知識が要求されることはもちろんだが、社会問題についての意見考察も求められる。それは語学教育の一環として行われるが、母国語以外の言葉でもそれができなければならない。将来的に、上級エンジニアや経営幹部になって、時に期した様々な意思決定をすることになるわけで、それが技術革新の未来に賭ける決断になることだってあるわけだから、そうした能力を身につける訓練がこのプレパから始まっているとも言える体裁だ。

次に、私個人のプレパでの学校生活の体験談を語ろうと思う。私は聖ジュヌヴィエーヴという全寮制私学に入ったが、ここは理系のプレパ専門学校で、フランスではジネットと短縮形で呼ばれている。仲間内ではイエズス会を文字ってBJ(Boîte à Jesuit)で通じる。そこでの3年間、私の頭の中では、所謂「ソクラテス教育」がいつも過った。そう、あの有名な『汝、自身を知れ』である。

1年目の私は、鉄のような精神力を身につけなければならなかった。毎日、毎日、激しい競争にさらされた。それでも生徒たちは大方「良い子」で、競争心が敵愾心にまで発展することはなかったが、絶え間ない競争環境は重かった。ジネットには、フランス国内だけでなく世界中から成績優秀な生徒が集まっていた。各々様々な環境と歩みを経てここに辿り着いたわけだが、全寮制だから、必然的にオープンマインドで様々な価値観がぶつかり合う。そこは、言わば、小さな一つの社会だ。互助は自発的、かつ当たり前になりしあう一方で、処世術といったものも自然に身についていく。各クラスは一つの小企業体のように各自役割分担をして責任を請け負う。責任を持つ、ということは、何より社会の基本だが、同時に、それはクラスの良い雰囲気作りにも貢献するものである。例えば、全くたわいもないことだが、私はいつもティッシュを携帯して、思いがけなく大きなくしゃみをした人に差し出す、という役回りにも責任を持つことにしたのだ。しかし正直なところ、初めて親元を離れたことや、リセとプレパでは勉強のレベルに遥かに大きな隔たりがあったので、私にとっての1年目はとても辛かった。何はともあれ、2年目に進級することができたのだが、それは、学業成績以上に人格識見が認められたことだった。

年度末に1年間をじっくり振り返ってみたが、イエズス会流の知恵と教訓こそがこの学校が好評を博す理由だと私には思えた。その流儀のおかげで、自分は成長できたと思うし、心理面でも軌道修正して良い土台の上で新たな1年に再スタートできたのである。

2年目は、いよいよ受験を迎える年になるわけで、成績上も気持ちの上でも相当な試練ではあった。それでも、ストレスと向き合うコツを身につけ、自分にはグランゼコールへの国家試験を受ける資質があるんだと自信を持つことも学んだのである。

残念ながら初受験の結果は自分の目標に届かなかった。学監は私の中に「再チャレンジしたい」という気持ちが強いことを感じ取り、私に2度目のチャンスを下さった。3年生になるというのは特別だった。通称 5/2 (サンク・ドゥミ) という言わば浪人組のレッテ

ルがはられるが(*再受験はハンデを負い総合点で減点される)、それまで以上に自主性が求められるとともに更なる責任も持たされる。目標の実現に強い望みを託して頑張るのはもちろんだが、同じ受験生たる2年生の面倒もみなければならぬ。夜の自習時間に週一回勉強会を開いて後輩をフォローするのだ。しかし、こうした思いやりの協力関係こそが、3年生という年が私にとっては一番好きな年になったのである。

「挑戦しなければ、何も手に入らない」というフランスの諺がある。結局、私は、フランスで最も権威あるエンジニア養成学校には合格できなかった(最終的に化学専門のグランゼコールに入学を決めた)のだが、失敗を怖れず挑戦したことで、私は「謙虚であれ」「勇気を持って」という教訓を得た。負け惜しみではなく、何の汚点も傷もない経歴より遥かに価値のあることに思える。

* 原文はフランス語。翻訳はレケナ小室・薫氏による。

* * * * *

レケナ小室 薫

ジネットという通称は、高等教育に関心のあるフランス人にとって特別な響きを持つ。ジネットの学生というだけで、エリートへの嫉妬と称賛の空気が流れ、出身者には輝かしい将来が約束されている?という暗黙の了解があるような感じなのだ。

2012年9月、17歳の愛娘が、物理化学コースを選択してそのジネットへ入学した。多くのエリート学生は、両親はもとより親戚に名門プレパや有名グランゼコールの出身者がいる環境が普通だ。しかし娘はそうしたことは無縁だった。私たちがフランスのエリート養成コースの実態をどれだけ把握できていたか、というと、正直皆無だった。もとより、ジネットを知ったのも娘が高2の時だったし、そこがイエズス会系の教育機関であることさえ、入学後に知ったという体たらくである。名声は聞いても実感がなかったし、キリスト教徒でもなかったし、一粒種の娘と初めて離れて暮らす親として、ベルサイユの自然に囲まれた広大なキャンパスを持つ全寮制は、何よりの魅力だったのである。

恥も外聞もなく書けば、スペイン系フランス人の夫は、15歳で父親を失くしたが、勉強がらだったこともあって中等教育で断念、バカロレアも取得していない。時代も今とは違い、何が何でもバカロレアという風潮ではなかった。一方の私は、日本で生まれ育ち、有名私大の仏文科を出ているが、留学経験はなく、フランスの高等教育機関についてほとんど何も知らなかった。そんな私たちが、何の因果かエジプトで出会い、娘が生まれた。その出自を唯一無二であろう *Maï-Carmen* (舞カルメン) という名に刻んでいる。

互いの遠い祖先のDNAがどうなっているかは知る由もないが、文明の衝突を地でいく我が家では、娘が11歳の時から、ラスベガス、東京、シンガポールと移住を経験し、ラスベガスでの1年間のみアメリカンスクールに通ったが、それ以外はすべてフランスの教育システムで育った。娘は現在4カ国語(仏、英、日、西)を駆使するが、語学は特に強要

せず、自らの興味と関心に任せた。その代わり、本人の好奇心や向学心に合わせて、算術は日本式も教えたし、仏語に至っては2年先のレベルでディクテーションを習慣づけ、娯楽として博物館の科学教室をよく見学した。塾にも通わず、家庭教師も雇わず、自主性に任せて見守ったが、家庭事情の「いいとこ取り」で、面白い「個」が育ったと思う。特にラテン的な陽気さと日本的な「和の魂」を持っているらしいところが親バカとしては嬉しい。

ところで、フランスは、言わずもがな、世界で初めて市民革命を起こして共和国を創った。その伝統は今も固持され、労組が強く、既得権益には保守的で、教育システムも旧態然としており、改革が図られるもなかなか思うようにいかない現状がある。

グランゼコールは、革命後の国家建設の必要性から、技術的なインフラを確立し、指導者養成をする目的で創設されたものだ。国家公務員になる事を義務づけているわけではないが、主要名門校はテクノクラートや上級エンジニアの養成所になっていることに変わりはない。科学技術系を目指す優等生ならば必然的にグランゼコールへの道を選ぶ。

高等教育への進学には、選抜試験はなく、入学は内申書で決まるが、特徴的な事が一つある。兵役の代わりとして、国防に関わる一日研修を受けディプロマを取得しておく義務があること。これがないとグランゼコールへの国家試験も受けられない。

さて、名門ジネットの門をくぐった娘だが、それまでの栄光から一転して完全に鼻を砕かれることになった。何と一学期の総合成績がクラスで最下位、生まれて初めて下に位置する苦みと挫折を味わったのである。半期過ぎて、進学担当の先生から警告レターが届く、「このままでは退学の可能性あり」というわけだ。

学校側からのイエローカード？は、成績がビリであることが問題なのではなく、上に立つ者として、意識や人格はどうか等、総合的に審査されるようだ。そういう意味では、娘は、授業中手を挙げて発言したり分析回答するなど、とてもできず、完全に気後れしていた。小さい頃から、引っ込み思案で消極的と評価されることが多かったのだが、そうした態度は、西欧的には「存在が消えている」と見なされてしまう。

親としても、この事態にかなり動揺した。遠くから叱咤激励しつつ精神的に応援するしかなかったが、娘はそこから奮闘してくれた。表面的な印象とは裏腹に生来負けず嫌い、しっぽを巻いて逃げるようなことはしなかった。それこそが自尊心だったと思う。

成績はそう奇跡的に上がるものではなかったが、努力の甲斐が認められ、無事2年生に進級。居心地が良かったせいか(苦笑)ジネットには満期3年お世話になった。

2014年9月、化学専門のグランゼコールに入学した。残念ながら志望校には合格できなかったが、まずは化学エンジニアの資格を取る予定だ。彼女の野心は一念発起の倍返し？先は脳科学や神経学を研究したいらしい。いつの間にか積極性を発揮してプロジェクトリーダーにもなっているのは微笑ましい。はたして将来どうなることやら。。。

5. スイスの学校

(1) はじめに

筆者は2014年10月28日、29日、31日にかけて秦由美子氏（広島大学・教授）とともに、スイスにあるインターナショナルスクール3校で面接調査を実施した。面接応対者とともに3校を訪問日順に列挙すると、以下のようになる。

①ブリヤモン・インターナショナルスクール (Brillantmont International School)

応対者： マーケティング部長 F 氏

②ボーソレイユ・コレージュ・アルパン・アンテルナショナル

応対者：管理責任者 S 氏 (Beau Soleil College Aplin International)

③コレージュ・デュ・レマン・インターナショナルスクール

応対者：校長 T 氏 (Collège du Léman International School)

本章では、3校の特徴とリーダーシップ育成について、学校順に整理・考察する。

(2) ブリヤモン・インターナショナルスクールの特徴とリーダーシップ

ブリヤモン・インターナショナルスクールは、1882年創立のローザンヌのレマン湖畔にある小規模なボーディングスクールである。男女共学校であり、2014年現在、11歳から18歳までの150名が学んでいる。近年スイスにおける多くの寄宿学校が個人の経営を離れ、教育関連会社とパートナー契約を結んだり、売却したりされている中、現在5代続いている家族経営を維持する寄宿学校である。

ブリヤモンでは、スイスでは非常に珍しいイギリスの大学入学に必要なGCE・Aレベル試験のプログラムが用意されている学校であり、卒業生の主な進学先はイギリスの大学である¹。今回訪問したスイスの学校3校の中では最も小規模で、最もアットホームな雰囲気のある学校だという印象を受けた。35の国籍から150人が集まっており、そのうち約100名が寄宿生である。学校の規則で、ひとつの国籍が10%以下に収まるよう気を配っているという点も本校の特徴である。

同校の一番の強みは「規模」にあるという。担当のF氏は、「私たちの学校の一番の強みは規模です。規模が小さい分、すべての生徒に目をかけることができます」と言っている。そしてこの小規模学校を維持できる理由が家族経営にあるという。

また、インタビューでは英国パブリック・スクールとの相違点についても言及があった。「彼らになく我々にあるもの」として、「多言語環境」と「多国籍環境」の利点を指摘された。すなわち、英語とフランス語をベースにしたバイリンガルの環境で学ぶ選択肢があること、そして圧倒的多数がイギリス人である英国の学校とは異なり、国籍がバランスよく、多様に存在していることがメリットとして挙げられた。

一方、インタビューからブリヤモンでは、「ハウス・システム²」がリーダーシップ育成のキーとなっていることが分かった。生徒間で選出されたリーダーがトレーニングを受け、

中心となって多岐にわたる学校内外のイベントを運営している。F氏によると、全生徒のスケジュールに House Period という時間が設置されており、student leaders と呼ばれる代表生徒主導の下、ハウス対抗形式のスポーツ大会など、様々なイベントを開催している。

なお、ブリヤモンでは、全生徒の約3分の1が通学生であるが、ハウスは全生徒が所属するものである。この場合のハウスとは、実際に居住するためのボーディングハウス (boarding houses) ではなく、概念的なハウスを指している。5つの各ハウスは年齢、性別、通学生か寄宿生かという条件に加え、国籍の異なる生徒たちがバランスよく混合されるよう教員が構成を考える。また各ハウスのリーダー (student leaders) は学校の模範生となり、非常に重要な役割を担っているという話を伺うことができた。

(3) ボーソレイユ・コレージュ・アルパン・アンテルナショナルの特徴とリーダーシップ

景色の良いアルプスの山間部に位置するボーソレイユ校は、その立地を生かし、呼吸器系に問題のある生徒の健康改善を目的として、修道女が 1910 年に設立した。その後まもなく共学のインターナショナルスクールへと転じ、現在ではル・ロゼ (Institut Le Rosey) と並び、同国で最も代表的なボーディングスクールとなっている。

「代表的」になった理由の一つに生徒の出自が挙げられる。ル・ロゼと同様、ベルギー・モナコ・ルクセンブルグ等の王族が学んできたが、インタビューを実施した当時も、生徒の中には、各国の富豪の子弟に加え、アフリカや中東の王室出身者が在籍していた。ちなみに本校はコレージュ・デュ・レマンと同じくノードアンリア (Nord Anglia Education) という教育専門企業の学校グループに所属している。生徒数は、寄宿生が 240 名、通学生が 15 名 (そのうち 10 名は教職員の子弟) である。2015 年度現在、生徒の国籍は 40 か国であり、11 歳 - 18 歳の男女生徒が在籍している。

同校は、アカデミックな側面がその生徒の強みであると判断されると、アカデミックなスキルを十分に伸ばせるように教育される。反対に、特別な支援が必要だと判明すると、授業中常時傍らについてサポートするプライベートチューターを配置したり、放課後に補講を行ったりと、いわゆる「テラーメイド教育」が徹底している。

また、同校には「本学の 4 つの価値 (value)」というものが掲げられている。それは、「責任をもって行動すること」「敬意をもって接すること」「大志を抱くこと」「努力感を高めること」である。なお、努力感 (sense of effort) とは、努力したのちに味わう達成感のことであると考えられる。

さらに、大学入試についての方針やボーソレイユへの入学過程について伺う中で、本校が生徒の持てる力を最大限に伸ばせるよう、個別に丹精込めてサポートすることに教育の価値基準を置いていることが分かった。そして、そのサポートにおいて必要不可欠な要素が、「生徒が最大限チャレンジすること」の重要性を教授することにあると思われる。またそのチャレンジ精神こそがリーダーシップ育成につながっていると、同校の教育方針から

読み取れる。

同校で実践されている「チャレンジ」事項については、①クロスカントリー・トレッキング・ナイトスキー等の身体活動、②ラウンドスクエア（他国交流校との学術・スポーツ大会）、③企業家養成プログラムの3つが挙げられる。加えて校内イベントのみならず世界中の交流校とのスポーツ試合やコンクール、他国大学への勉強合宿等の機会が多く設けられている。参加必須のイベントも多く、生徒は自分の能力を最大限伸ばせるよう目標をもってチャレンジしていくのである。

ボーソレイユ校は、スキーやトレッキングといった野外活動の場所を体力づくり、リーダーシップやチームビルディングの育成のために、山間部の立地を積極的に利用している。その好例として、リーダーシップ養成のコースが挙げられる。毎年年度初めに、リーダーシップオリエンテーションのコースが始まり、その一環として、森に隠された食べものを探すトレーニングなど、多くのアクティビティをグループ単位で実施している。一方海外、例えばガーナの孤児院（児童養護施設）でのボランティア活動への参加、週末や夜間のアクティビティで得られた収益金をチャリティに寄附する取り組み等、広く実施されている。これらはすべてリーダーシップ教育の一環であり、活動を通して、当校の生徒たちは社会的責任を果たすのである。

裕福な家庭で育った子どもたちばかりであるため、教員は生徒に対し、常に社会に目を向けることの重要性を説いている。自分たちがいかに恵まれているかを自覚させることが肝要だとS氏は言う。多くの卒業生から「ボーソレイユでの生活が人生の中で最も一般社会に近い、普通で現実的な生活の体験であった」と回想されるのはそのためであろう。

リーダーシップ育成の一貫として実施されている上記の旅行プログラムは必須であるが、参加を促すまでもないという。生徒間で非常に人気のプログラムであり、皆積極的にガーナやインド、タンザニアに向けて出発するという話が印象的であった。

（４）コレージュ・デュ・レマン・インターナショナルスクールの特徴とリーダーシップ

コレージュ・デュ・レマンは、1960年創立のジュネーブのレマン湖畔に位置する通学制主体の共学校である。生徒数は2000名を抱える大規模校であり、そのうち240名程度が寄宿生である。国際機関に勤務する人材の子弟を受け入れる学校を創設したいという、スイスの地元当局の依頼を受け、クリバス（Clivaz）夫妻によって設立された。生徒の国籍が120という他に類を見ないほど国際色豊かな学校であり、赤十字、WHOやWTO等の国際機関、あるいはJT、P&Gといった多国籍企業に勤務する駐在員の子弟が多く在籍している。学費は他のスイスの私立学校と同様に非常に高額であるが、親が所属する組織や企業が支払いをしている場合が多いと校長のT氏から伺った。

当校はイギリスのザ・ナイン同様、スポーツや芸術活動も盛んであり、多くの生徒が楽器の個人レッスンを受けているという。また世界のトップ大学へ進学する生徒も多いが³、

当校への入学基準も英国独立学校のような厳しい選抜があるわけではなく、他の2校と同様に面接重視型で、優秀か否かではなく、生徒の熱意に重きを置く方針がとられている。

リーダーシップ育成については、T氏から非常に明確な考えを伺うことができた。スポーツや芸術活動から生み出されるチームワークがリーダーシップの育成には大切であるという。その理由は、チームワークの中で、人はどのように行動するかを学べるからである。長年サッカーチームのキャプテンをした経験を通し、スポーツにおけるチームワークが、正直さ (honesty)、忠誠心 (loyalty) 敬意 (respect) といった価値を与えてくれるのだと学んだということであった。スポーツにおいて、敬意を示すということは、ルールや対戦相手、審判を尊敬することを意味している。またスポーツだけではなく、アカデミックな側面 (学問) や社会的技能 (社交術) から、人はどのように行動すべきか、そして人としてどのように振る舞うべきかを学ぶことができるということをお話された。

またリーダーとは、「ビジョンを持ってくるべき人であり、人々を牽引するために他者を刺激 (インスパイア) できる人です。そしてリーダーシップのあるリーダーとは人を牽引するための考えを持つ人です」という意見も伺った。そのような人物を養成すべく、例えば、模擬国連や学生自治大会といった国を超えた他校との対抗戦がある。このような催事に代表として選ばれることや、所属しているメリタスグループの学校対抗イベントであるメリタスオリンピック、その他にダンスや音楽、スキー大会等のイベントも、リーダーシップの涵養に貢献するものであろうとの回答を得ることができた。

(5) おわりに

まずスイスを代表する3校の訪問で強く感じたことは、校舎にも教員にも空間にも、学校を形付けるすべての要素が、開放的で親しみやすく、シンプルかつモダンで、学校の規模に関わらずアットホームな雰囲気が漂っているということである。これは、同じく、すべての要素に緊張感や重厚感の漂うイギリスのザ・ナインの雰囲気と大きく異なる点であった。またザ・ナインの学校がいずれも、歴史ある瀟洒な校舎とともに先が見えないほど広大な運動場を備えているのに対し、スイスの方はより身近に感じられるものであった。

次に、スイスの3校は英国パブリック・スクールとは異なり、明確な入試選抜試験が課されていないことも共通した特徴であった。出身校からの内申書や面接による本人の意欲が重視される。基本的に17-18歳段階の場合は英語力の最低条件が規定されているが、厳しい競争選抜で優秀な生徒を振るいにかけることはない。生徒の個性を尊重し、能力を最大限に伸ばせるよう個別指導を重視し、様々な子どもたちを受け入れる方針である。

しかし「教育の質や個別対応の教育スタイルによる金額」とポーソレイユのS氏が語ったように、寄宿生の学費は3校ともザ・ナインをはるかに凌ぐほど高額である。ブリヤモン校の場合11-13年生の寄宿生が76,000CHF (約930万円)⁴、コレージュ・デュ・レマンの場合、83,000CHF (約1016万円) が基本料金となっている⁵。ポーソレイユにいたっ

ては、制服代や遠征旅行費を含めると、年額 14 万–15 万 CHF (約 1710–1830 万円) になり、ル・ロゼとともに、世界で最も学費が高い学校として有名である⁶。

最後に、ザ・ナインのような英国独立学校は大学進学準備校として有利なために、当該校に入学させる傾向が強まっていることは 20 年前から言われている (竹内, 1996)。しかしスイスの学校は入学後 IB やフレンチバカロレア等、アカデミックな科目の指導に注力しているものの、進学準備校としての役割を最重視しているわけではないことも分かった。それよりも、人間形成を重視しながら各学校がそれぞれ「ハウス・システム」「チャレンジ」「チームワーク」をキーワードとし、リーダーシップ育成に取り組んでいるのである。

【引用文献】

Walford, G (1996) 『パブリック・スクールの社会学 英国エリート教育の内幕』 (竹内洋, 海部優子訳) 世界思想社, 308 頁。

Collège du Léman,

<http://www.cdl.ch/admissions/how-to-apply> <2015 年 11 月 20 日>

Beau Soleil Collège Alpin International, <http://site.beausoleil.ch/> <2015 年 11 月 21 日>

Brillantmont (<http://www.brillantmont.ch/>) <2015 年 11 月 21 日>

Meritas, <http://www.meritas.net/> <2015 年 11 月 20 日>

Nord Anglia, <http://www.nordangliaeducation.com/> <2015 年 11 月 20 日>

【注】

- 1 インタビュー時に入手した情報に基づく。歴史の詳細については本校のウェブサイト参照。Brillantmont, *About Us, History*, <http://www.brillantmont.ch/about-us.html?history-of-school> (2015 年 11 月 20 日アクセス)
- 2 ハウス・システム (House system) とは、全学年の生徒を縦割りにして、数個のハウスと呼称される生徒集団に編制する方式のこと。ハウス (House) は寄宿舎・寮をさす。
- 3 2013 度は卒業生の 48% が Tier1 か Tier2 の大学へ進学し、また 2014 年度はその合格率が昨年度よりさらに 11% 上昇し、59% になったという。ちなみに、Tier1 はオックスブリッジやアイビーリーグを含む世界の最難関大学群である。
- 4 いずれの学校も 1CHF ≒ 122 円で換算 (2015 年 11 月のレート)。寄宿生は、通常の長期寄宿生に加え、週末は帰宅する週日寄宿制を選択することもできる。詳細は本校ウェブサイト参照。Admission & fees documents, <http://www.brillantmont.ch/admissions.html> (2015 年 11 月 20 日アクセス)
- 5 インタビューによる。ウェブサイトにも詳細あり。Collège du Léman, *How to apply?*, <http://www.cdl.ch/admissions/how-to-apply> (2015 年 11 月 20 日アクセス)
- 6 ボーソレイユ S 氏のインタビュー内容より。1CHF ≒ 122 円で換算。学費の詳細は同校のウェブサイトにも掲載あり。当該箇所ではインタビュー時に伺ったものを載せている。

6. Independent Grammar Schools in Northwest England in Historical Context

This paper aims to present an historical overview of the development of independent grammar schools, focusing on the region of the North West of England, especially the city of Manchester and the surrounding counties of Lancashire and Cheshire. The paper draws on some of the official histories that have been commissioned by these schools as well as visits to the schools by the author. This paper will chart the history of this type of school from the earliest pre-modern days up to the growth of state intervention in secondary education in the 20th Century.

Secondary Education for the Urban Middle Class in England

Before the advent of the industrial revolution and the growth of large cities in the north of England, education had been mostly under the control of the churches, especially the established church, and land-owning rurally-based elites. Educational Historian Andy Green has written about how newly-powerful social groups can challenge existing education systems either by creating their own set of new institutions to rival the existing ones, or by gaining political power and using the state to institute a top-down reform of the system. In the case of England, the rise of economic power by the new urban bourgeoisie was only partially (and belatedly) accompanied by a rise in political power. Electoral reform starting in 1832 gave them increasingly more representation in the House of Commons, but the House of Lords, which remained dominated by the landed aristocracy, was an obstacle until its power was reduced by the 1911 Parliament Act. Lacking political power, but with a growing abundance of economic wealth, the urban middle classes in England therefore adopted a piecemeal strategy of creating their own secondary school system (Green 1990: 69). This is a very important part of the story of the development of secondary education in England and is one reason why the nation ended up “with a system that nobody intended and which, rather than constituting a whole, is merely the sum of its constituent parts” (Green 1990: 70).

Another feature of the growing English urban middle class is its liberal, individualist ideology. As Green argues, “English liberalism and *laissez-faire* were the crucial factors which gave the distinctive cast to English education development” (Green 1990: 75). The first industrial revolution in England was achieved without a centrally-planned education system. The entrepreneurs who designed and financed the

first factories, deep mines and railways did not see much need for state intervention. They adopted the same attitude when planning the schools to teach their sons. Protestant nonconformity was another feature of the new urban middle class, and something else which distinguished it from the mostly Anglican rural elites. Many business families were Methodist or Presbyterian. The result was that 19th Century England never developed a standardized middle-class secondary school to match the *lycée* in France or the *Realschule* in Germany, Secondary schools in England remained financially independent of the State.

(1) The Pre-modern Origins of Independent Grammar Schools

Three grammar schools in the present study were founded during the 15th or 16th Centuries: Manchester Grammar School in 1515; Stockport Grammar School in 1487; and Bury Grammar School in circa 1570. The founders of all three schools were churchmen, reflecting the dominance of the church in educational provision in England at this time. Stockport Grammar School was founded in 1487 by Sir Edmund Shaa who set up a small school in St Mary's Church, Stockport. In his will he provided funds for one priest who would teach Latin grammar to a small number of boys. The term 'Grammar School' originates from this common practice of treating Latin grammar as the most important foundational subject to be taught to future 'gentlemen'. Later the school was provided with by the mayor of Stockport and the curriculum was expanded to include Greek, English and arithmetic. The school's historian, Benjamin Varley remarks that "the school carried on a precarious (though useful) existence in poor inadequate buildings for so long that its mere survival is something to wonder at" (Varley 1957: vii). Additional funding was provided by the 'Worshipful Company of Goldsmiths', and the school moved to a new larger site. Manchester Grammar School was founded on 2 July 1515, when Hugh Oldham, the Manchester-born Bishop of Exeter signed an endowment trust deed establishing the 'Manchester Free Grammar School for Lancashire Boys'. A site was purchased in September 1516 and construction took place between April 1517 and August 1518. The original deed promoted "godliness and good learning" and established that any boy showing sufficient academic ability, regardless of background, might attend, free of charge. The school was situated near what was eventually to become Manchester Cathedral, then a collegiate church (Bentley 1990: 14-15). The original foundation provided a school house in the grounds of Manchester's Parish Church and two graduates (the 'High Master' and the 'usher') to teach Latin, and later Greek, to any children who presented themselves. The school

was intended to prepare pupils for university and eventually the Church or the legal profession. There was often enough money to fund bursaries for pupils due to the custom of more wealthy boys paying fees that were used to subsidize those from less well-off families.

(2) Independent Grammar Schools and the Growth of the Urban Middle Classes

The huge social and economic changes brought about by England's industrial revolution forced changes in the pre-modern grammar school system. Some schools, like Manchester Grammar School, were slow to change and almost left it too late. Historian of the school James Bentley notes the decline of enrollments between 1780 and 1800, a period in which the original medieval small town of Manchester was fast being transformed into a large, sprawling city. He puts this decline down to the rise of a new "merchant class increasingly clamouring for an education in modern languages and science, neither of which the Manchester Grammar School was as yet offering" (Bentley 1990: 47).

It is clear from an examination of the history of those grammar schools that were founded in the middle-ages and then were transformed by the social forces unleashed by the industrial revolution that their governors and head teachers always resisted any moves that might incorporate the schools into a system of 'state-controlled' or public education.² This trend can be seen at the macro level of intellectual radicalism as well as the micro level of school governance. Andy Green discusses the influence of "the first pioneers of middle-class reform in England" in the late 18th and early 19th centuries, among whom he includes James Watt, Josiah Wedgwood, Joseph Priestly and William Godwin (Green 1990: 244). Green writes that "the main preoccupation of men like Priestly was clearly not with popular education but with the education of their own and other middle-class children (Green 1990: 145). Also, "the English educationalists were not talking about national systems. . . . and were certainly not friendly to the idea of state intervention in education" (*ibid.*). Green adds that "Priestly and Godwin both declared themselves to be against education becoming a function of the state which they believed would lead towards the imposition of uniform beliefs" (*ibid.*).

(3) The Taunton Report

The most extensive inquiry into secondary education in England was the Schools

Inquiry Commission under Lord Taunton that reported in 1868 (MacLure 1965: 89-97). Its task was to study every kind of school between elementary schools and the nine 'great' public (i.e. private) schools. The final report ran to 20 volumes. Its survey of endowed schools declared that the majority (nearly 2,200 in number) could not be called 'grammar schools' because Latin or Greek were not on the curriculum. This left 705 proper 'grammar schools' (including the schools that are the subject of this report) in England at that time. Lord Taunton's report proposed a new three-tier structure. Schools in the top tier would offer a classical education up to the age of 19, Second tier schools would provide a more modern education up to the age of 16. Finally the third-tier schools would offer just the 'three Rs' up to the age of 14. The tiers were deliberately aimed at meeting the educational needs of boys from different sections of the middle class. These proposals were only partially incorporated into the Endowed Schools Act of 1869.

(4) The 20th Century

Competition with Germany, France and the United States was a matter of great concern in the 20th Century. Compared to those three countries, England was slow to expand its secondary education sector. In 1914, out of every 1,000 pupils completing elementary school, only 56 went on to some kind of secondary school (McCulloch 2002: 36). Independent grammar schools as well as the famous public schools came under attack for only accepting boys from elite sections of society. Some radicals within the newly emerging Trade Union movement advocated the abolition of all private schools as a way of achieving educational equality. They did not succeed in getting this accepted as policy by the Labour Party, but a compromise was reached in the form of the Direct Grant system. The 1944 Education Act set up a system of compulsory secondary education in a new system of modern schools, technical schools and grammar schools. It also allowed for up to half of the places at an independent grammar school to be taken by pupils whose fees would be paid for by the Local Education Authority.

By the 1960s, the flaws in the three-tier system of secondary education were becoming clear. Many were opposed to the national 'eleven plus' exam because it sealed the educational fate of a young person at too young an age. Some local authorities began promoting comprehensive schools as the new model. The High Master of MGS, Peter Mason remarked at this time that "we shall do our best to co-operate with the State

system. If we cannot co-operate, we shall have to exist on our own and we must be physically prepared” (Quoted in Watson 2015: 129). The changeover to a comprehensive-school system was a gradual one that started in the mid-1960s and carried on for over a decade. By the end of the process most direct grant schools, such as MGS, had opted for independence instead of accepting open access.

In 1980 an Assisted Places scheme was introduced by the new Conservative government. MGS applied for places on this scheme equivalent to a quarter of the school’s annual intake (Watson 2015: 146) and by 1987 there were 280 boys on the scheme attending school. However, political uncertainty surrounded the scheme and the opposition Labour Party made it clear it would abolish it when it came to power. Thus it should not have come as a surprise when, following the landslide victory of Labour under Tony Blair in 1997, the Assisted Places scheme was ended. Some independent schools were unprepared for this but MGS was not one of them. In order to continue to allow boys from limited financial backgrounds to attend the school, it put increasing efforts into raising private money to pay for bursaries. By 2013, the High Master, Martin Boulton, himself a former pupil of MGS who attended thanks to the Assisted Places scheme announced that the school had succeeded in raising enough money to provide 220 bursaries (Watson 2015: 174).

(5) Conclusion

The great changes that took place in the English education system in the 19th and 20th Centuries transformed but did not diminish the role of the independent sector in secondary education. “Throughout the twentieth century, in spite of the reports of commissions and committees and the policies of Labour politicians, both in opposition and in government, public and other fee-paying schools have continued to occupy a central position in English education and society” (Gordon, Aldrich and Dean 1991: 210). More than one-third of candidates achieving three A grades at A level attend independent schools (Cooke and Woodhead 2002). The challenge for reformers is how to expand access to these schools without diminishing academic excellence.

References

- Bentley, James. 1990. *Dare to be Wise: A History of The Manchester Grammar School*. London: James and James.
- Cooke, Alistair and Woodhead, David. 2002. “Independent Schools” in Gearon, Liam

(ed.) *Education in the United Kingdom*. London: David Fulton. Fallows, I.B. 2001. *Bury Grammar School: A History c.1570-1976*, The Estate Governors of Bury Grammar School, Bury.

Graham, J.A. and Pythian, B.A. 1965. *The Manchester Grammar School 1515-1965*. Manchester University Press.

Green, Andy. 1990. *Education and State Formation: The Rise of Education Systems in England, France and the U.S.A.* London: Macmillan.

MacLure, J. Stuart. 1965. *Educational Documents England and Wales 1816-1963*. London: Chapman and Hall.

McCulloch, Gary. 2002. "Secondary Education" in Aldrich, Richard (ed) *A Century of Education*. London and New York: Routledge.

Varley, Benjamin. 1957. *The History of Stockport Grammar School including the life of Sir Edmund Shaa, Kt. P.C. Founder*. Manchester: Manchester University Press.

Watson, Nigel. 2015. *MGS: A History at 500*. London: Third Millennium Publishing.

¹ The Worshipful Company of Goldsmiths was originally a medieval guild for the goldsmith trade based in London, The guild founded or endowed several schools and educational institutes including the 'London Technical and Recreational Institute' which later changed its name to Goldsmiths University of London.

² It is always important to distinguish between the independent grammar schools – that are the subject of this paper – and the state-sponsored grammar schools that were set up as a consequence of the 1944 Education Act, a small number of which still remain.

7. おわりに

(1) 謝辞

最初にまず、インタビューを快くお引き受けいただきました学校の校長、副校長、先生方はじめ、関係者の皆様に心から感謝の意を著わしたい。お目に掛かれましたそれぞれの先生方はどの方も大変親切で、心正しく、厳しさの中にも心温かく、また一方で笑顔が優しく、人間として心から尊敬できる方々であった。このような方々に教え導かれているからこそ、生徒たちは知識だけではなく、真っ直ぐに、伸び伸びと育っていくのであらうと思われる。また、本叢書作成に当たっては、大変お忙しい中、加筆修正にまで丁寧に対応していただいた。研究者一同を代表してお礼を申し上げたい。

また、この度は本叢書に我々の研究チームの他に、ハーロウ校で日本語を教える松原直美先生、リセ聖ジュヌヴィエーヴ・ヴェルサイユ卒業生のレケナ小室・舞カルメンさんとそのご母堂のレケナ小室薫さんにも執筆頂いた。現場からの生の声であるので、大変貴重である。紙面を借りてお礼を申し上げたい。

(2) 本叢書のまとめ

今回我々は、イギリスのパブリック・スクール、グラマー・スクール、日本の中高一貫校、日本の名門進学校、フランスの進学校、スイスの名門校を調査した。名称を挙げると、海外の学校は、グレイト・ナインであるウィンチェスター、イートン、セント・ポールズ、シュルーズベリー、ウェストミンスター、マーチャント・テイラーズ、ラグビー、ハーロウ、チャーターハウス及び、マンチェスター・グラマー・スクール、フランスの公立のリセ・ルイ・ル・グランと私立リセ聖ジュヌヴィエーヴ・ヴェルサイユやスイスのエリート養成校ブリヤモン・インターナショナルスクール、ボーソレイユ・コレージュ・アルパン・アンテルナショナル、コレージュ・デュ・レマン・インターナショナルスクールであり、国内においては、麻布、鴎友、開成、慶應義塾、甲陽学院、灘、ラ・サール、早稲田及び日比谷高校と戸山高校である。しかしながら、全校を記載するには紙面の枚数が不足しており、残念ではあるが一部の学校は掲載していない。リセ・ルイ・ル・グランは、パリ 5 区に位置する公立のリセで、本校が位置するエリアは「カルチュ・ラタン(ラテン語地区)」と呼ばれる伝統ある学生街であり、周囲にはパリ第一(パンテオン・ソルボンヌ)・第二(パンテオン・アサス)大学、著名な学者が市民に向けて公開講義を行う場であるコレージュ・ド・フランス、文学作品に度々登場するリュクサンブール公園等がある。ル・グランの卒業生には、モリエール、ヴォルテール、ロベスピエール、ドラクロワ、ユゴー、ガロワ、ボードレル、ドガ、デュルケーム、ポアンカレ、サルトル、デリダ、ブルデューといった、文学者、政治家、画家、詩人、数学者、哲学者、思想家と、あらゆる領域で世界的な人物を生み出している。何故なのか。哲学を物事の基盤とする国であるからか。

今回は、人間涵養とリーダーシップの2点から論じたが、今後はもっと広範な切り口から上記の学校を比較、検討していく予定である。

Fostering Humanity and Leadership in Distinguished Schools: Lessons from Japan and Three European Countries

Yumiko HADA^{*}, Norio OSAKO^{**}, Robert ASPINALL^{***}, Ryo
SASAKI^{****}, Hajime FURUSAKA^{*****}, and Naomi MATSUBARA^{*****}

This document aims to comprehensively investigate the “human nature recharge and leadership education” in Independent and grammar schools in the United Kingdom in comparison with other counterparts, and to discuss how the results of this study can be applied to education in Japan.

In the United Kingdom, nine public schools were studied: Westminster, Winchester, Eton, Harrow, Rugby, Charterhouse, Merchant Taylors, Shrewsbury, and St Paul’s. Also some independent grammar schools were studied. One of these schools, Manchester Grammar School is the alma mater of one of the researchers, Robert Aspinall. In France and Switzerland, distinguished schools were also targeted and site visits were conducted.

Eight of Japan’s prestigious integrated middle and high schools were studied: Azabu High School, Ohyu Gakuen Girls’ Junior and Senior High School, Kaisei Academy, Keio Senior High School, Koyo Gakuin, Nada Junior and Senior High School, La Salle High School, Waseda Junior and Senior High School. Hibiya and Toyama High Schools were also studied. After the Second World War, the high school system predominant during Japan’s Westernization movement was abolished without proper thought. Bearing this in mind we conducted an analysis of the development of secondary schools in the United Kingdom.

Summaries of the findings of these school visits provide not only recommendations to the Japanese education system, but are also of significance for specific measures to encourage cooperation.

* Professor, RIHE, Hiroshima University

** Associate Professor, Department of Early Childhood Education and Care, Ikuei Junior College

*** Professor, Faculty of Economics, Shiga University

**** Ph.D. Candidate, Graduate School of Law, Chuo University; Adjunct Lecturer, Atomi University

***** Assistant Professor, Graduate School of Medicine, Chiba University

***** Part-time Japanese teacher, Harrow School

執筆者紹介

*編者には◎

◎^{はだ}秦 ^{ゆみこ}由美子

広島大学高等教育研究開発センター教授

^{おおさこ}大佐古 ^{のりお}紀雄

育英短期大学保育学科准教授

ロバート アスピノール

滋賀大学経済学部教授

^{ささき}佐々木 ^{りょう}亮

中央大学大学院法学研究科博士後期課程

跡見学園女子大学兼任講師

^{ふるさか}古坂 ^{はじめ}肇

千葉大学大学院医学研究院特任助教

^{まつばら}松原 ^{なおみ}直美

ハロウ・スクール日本語非常勤講師



「進学校」における人間性涵養とリーダーシップ
ー日本と欧州3ヶ国から学ぶー
(高等教育研究叢書 131)

2016 (平成 28) 年 3 月 31 日 発行

編 者 秦 由美子

発行所 広島大学高等教育研究開発センター
〒739-8512 広島県東広島市鏡山 1-2-2
電話 (082)424-6240

<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp>

印刷所 株式会社ユニバーサルポスト

〒733-0833 広島市西区商工センター 7 丁目 5-52
電話 (082)277-5588 (代)

ISBN978-4-902808-94-0

Fostering Humanity and Leadership in Distinguished Schools:
Lessons from Japan and Three European Countries

**RESEARCH INSTITUTE FOR
HIGHER EDUCATION
HIROSHIMA UNIVERSITY**